
Muv-Luv Red/Moon/Alternative

大蒜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v R e d / M o o n / A l t e r n a t i v e

【Nコード】

N 6 4 2 6 S

【作者名】

大蒜

【あらすじ】

戦争の道具としてGX9900に乗り第七次宇宙戦争に散つていった戦士がいた。

彼は新たな生を滅びつつある世界の極北の地で与えられることとなる。

地獄のような戦場、異形の怪物、絶望と希望、そしてガンダム。背中合わせの世界で彼は今度こそ光を見つけられるのだろうか

1、「また夢の話聞かせてくれ」（前書き）

ジャミル少年のキャラクターはマンガ版に準拠しています。本編でも「ガロードは昔の私によく似ている」と言っていたので間違いいはないかと。

1、「また夢の話を聞かせてくれ」

1、「また夢の話を聞かせてくれ」

太陽光を受けて青く輝く地球。人類の故郷たる青い星の遙か上空、大気圏すら越えた低軌道上でいくつもの流星が弾丸とビームの閃光と交差し散っている。

その流星の名前はMS^{モビルスーツ}。四肢を持ち大出力バーニアと重火器を備えるこの機動兵器は二つの陣営に分かれて戦っていた。

片や人類最大の建築物である”コロニー”に住む住民達がその独立のために立ち上げた宇宙革命軍。

片や地上のほぼ全ての国家を束ね、人類の管理者として君臨する地球連邦軍。

この二つの組織の確執は長年に及び、七度目にあたる今回の戦争は八ヶ月のこう着状態を経て遂に最終局面を迎えていた。

某年 地球圏低軌道上 南米大陸上空

「この感覚——ッ!? 俺を狙ってやがるな!」

移動中に宇宙革命軍の高機動型MSオクト・エイプにロックされている事に気づいた×××は悪態を吐くとスロットルを戻しメインバーニアの角度を僅かに変えその機動をずらす。

直後、敵が構えたマシンガンから放たれた100ミリの弾丸の雨が×××の眼前——もはや何も無い空間を通り過ぎた。

「そこか!」

×××の機体は一瞬で振り返ってシールドバスターライフルのトリガーを引く。

ビームに貫かれたオクト・エイプがモノアイを光らせたままオレンジの火球となったのを確認した×××は、汗の雫が浮かぶヘルメットを脱ぎ管制室のある旗艦に通信を繋げた。

「これで8機……おい、管制室！　こっちは終わったぞ。防衛ラインはどうなってる？」

『こちら第四艦隊旗艦マリアナ。現在第1防衛ラインは全戦域に渡って戦闘中、第2防衛ラインはパープル2、イエロー4で応戦中。三号機は直ちにパープル2へ向かえ』

管制官が命令を伝えると同時にモニターにパープル2までの航路が示される。

表示された予想到達時間を見て×××は僅かに顔をしかめた。

「これまた遠い所を選んでくれたな。他の奴じゃ駄目なのか？　確かパープル1にはジャミルがいただろう？」

ジーエックス

『GX二号機は現在サテライトキャノン発射ポイントまで移動中だ。行動予定を遅延させるわけにはいかんし、迎撃に回して万が一にでもGビットを減らすわけにはいかん』

「ジャミルの奴がそんなヘマをするとは思えないがな」

ジャミル・ニートは地球連邦軍のニュータイプ部隊に所属する少年兵で中尉の階級を持つ士官だ。

初陣から間もなくそのズバ抜けたMS操縦センスと高いニュータ

イプ能力を発揮した彼は各地の戦闘や作戦で華々しい戦果を挙げ、若干15歳にして瞬く間に地球連邦軍のトップエース座を駆け上がった、まさにMSパイロットの申し子とも呼ぶべき存在だった。

その彼は今回は12機のGビットを随伴したGX9900・NT002、つまりガンダムXの二号機に搭乗し宇宙革命軍のコロニー落とし作戦阻止のための切り札として作戦に参加している。

『敵は一個中隊規模だが部隊の中核に革命軍のNT専用機^{ニュータイプ}“ベルレイゴ”が確認されている。恐らくはコロニー落とし迎撃の阻止に回された精鋭部隊だ。貴様は命に代えてでもこの部隊を足止めしサテライトキャノンの一斉射まで2号機の安全を確保しろ』

「ニュータイプにはニュータイプってか？ 相変わらず鬼畜だなあ。こんなことを繰り返していたら、最終的には全てのニュータイプが相討ちで死んじまうんじゃないか？」

『我々連邦軍の側に最後の一人が残ればいい』

「俺はイヴ無しでアダムになる気は無いぜ」

『三号機、無駄口はいい。とつととパープル2に向かえ』

「……了解」

議論する無駄を悟って×××は大人しく命令に従い自分の愛機――^{ブラックカラー}漆黒塗装のガンダムX三号機を指定ポイントへ向かわせた。

進行方向には核パルスエンジンを取り付けられた無数のコロニーが太陽の光を受けその独特のフォルムを浮かび上がらせている。今頃宇宙革命軍はせっせと住民を退避させコロニーを地上に落とす準

備を進めているのだろう。

もしあれらが全て地上に落とされれば地球は壊滅的な被害を被るのは間違いない。それが例えたった一つでも小国は滅ぶ。数百万、数千万の命が失われる。宇宙革命軍のとっている行動は地上の人間に対してそれほど危険な物であった。

勿論本来あれば兵器ではない。一基につき一万の人間が暮らし、自給自足しながら来るべき他惑星・外宇宙への進出への試金石として人類の希望となるはずだったのだが……

「そのコロニーが今や大量破壊のための質量兵器か。俺達ニュータイプと同じだな」

カメラを更に遠くへ向けるとモニターに写るのは地球の端から半分だけ顔を出した月が見える。

原始の時代から何千年も崇拜し、憧れ続けてきたあの天体ですら人類はマイクロウェーブ照射のための軍事基地に変えてしまった。

宇宙コロニー、月、ニュータイプ。戦争が夢もロマンも何かも武器に変えていく。だというのに有史以来人類の歴史から戦争が消えた事は無い。

かくいう×××も戦争で幼児期に親を失い、孤児として地球連邦に引き取られた後はNT兵士として何人も人間を屠ってきた。

それが戦争。無限に続く負の連鎖。

「いつそ”宇宙人”でも攻めてくれれば……いや駄目だな。例え滅びる寸前でも俺達は絶対に一つにはならない」

『そんなことはない、きっと希望はある！』

「——ッ!? ジャミル? ジャミル・ニートか?」

独り言を聞かれていた上に、突然モニターに知り合いの顔が映し出され×××は大いにうろたえた。

一体何故、と思い戦域モニターを確認すると現在地にパープル1の表示。どうやらパープル2へ向かう途中にたまたま発射地点に向かうジャミルの部隊に近づいたらしかった。

リーダーで確認した位置まで機体を向かわせる。約7時間ぶりに二機のGXは並びあった。

『確かに人類は争い続けてばかりだ。でも地球にもコロニーにも、いつだって平和を求める人の声は途絶えなかった。その声に耳を傾けられるようになればいつかきつと人類はいつか争いの無い世界を手に入れられる!』

モニターとヘルメット越しに見えるジャミルの顔は幼さを残しながらも鬼気迫る物があった。

この言葉は×××にも聞き覚えがある。NT部隊の教官で二人の恩師に当るルチル・リリアントの言葉だ。——もつとも×××は何度も彼女と師弟以上の関係になるうと口説き続けて失敗していたが。

「そして平和な世界に飽きればまた戦争、人は過ちを繰り返す……
つてね」

『——ッ!? ×××、どうしてそんな風になっちゃったんだ!?
昔みたいにあの夢で見たっていう平和な国の話を聞かせてくれた
あんたはどこへ行っちゃったんだよ!?』

「戦争さ。全部この糞溜め^{くそだ}みたいな戦争が持っていた。人工ニュータイプ実験に子供を寄せ集めたニュータイプ部隊、コロニー落と

しにサテライトキャノン…… たった18年しか生きていないのに、俺は人間がどれだけ残酷になれるか思い知らされたんだ。この世界で俺が心の底から安心できるのは女に抱かれてあの夢を見ている時だけだった」

『……………』

ジャミルは何も言わない。

彼自身、ニュータイプという人間の悲惨さを知っているから。そしてフラッシュシステムに不完全にしか対応しない×××が地球連邦からどれだけ恐ろしい人体実験を繰り返されてきたのかわからないから。

だからジャミルは×××の言葉に何も言うことができなかった。

熱くなり過ぎたことを自覚した×××は一拍置いて深呼吸してからこう告げた。

「ジャミル、俺が間違っているというのなら……この戦争、お前だけは何があっても生き残ってくれ。生きて俺にお前の言う争いの無い世界って奴を僅かでも信じさせてくれ」

『……ああ、約束だ。アンタも生き残ってそして……また夢の話を聞かせてくれ』

「ああ、任せておけよ。宇宙^{そら}に上がる前に立ち寄ったマスドライバ―基地でもうすぐ落とせそうな子がいたんだ。この作戦が終わったら彼女とよろしくやって、そしてまた最高の夢を見てやるんだ！」

『マスドライバ―基地？ 技術局の彼女はどうしたんだ？』

「技術局……？ ああ、パーシバルか。あの子はもう少しかかりそうだ。彼女、GXとGビットの共通規格化に携わっていたメカニックらしくてさ。相手がエリートの学者様だから話を合わせるために先月からMS設計の猛勉強中さ」

『そうか……ま、アンタは万能だからな。きつとすぐにも話せるようになるさ』

「そうだな。じゃ、そろそろ仕事に戻るか」

ジャミルが苦笑しモニター越しに敬礼すると同時に、レーザー通信の有効範囲から外れて通信が途絶する。

白のGXは発射ポイントまで、黒のGXは敵のNT部隊の方へそれぞれ飛び立っていった。

それから五分ほどして×××はようやく防衛部隊と目標——宇宙革命軍の巡洋艦アストラザー級との交戦ポイントに到着する。

パープル2の防衛部隊は既に損害を受けていて、10機いたはずのドートレスは既に4機にまで減っていた。

「セプテムが3機、オクト・エイプが2機の編成か。ベルティゴはまだ出撃していない……舐められているのか？」

敵戦力を確認すると黒いGXは素早くライフルを前方に向ける。その銃口がピンク色の粒子を吐き出すと、瞬間に一機の青い機体——宇宙革命軍のセプテム——がバーニアを貫かれ行動不能に陥った。

意識外からの攻撃に両軍の動きが止まった。

『ガンダム——ッ！？ 援軍か！？』

生き残った防衛部隊の内一機、隊長機仕様のドートレスコマンドから通信が入る。

「こちら連邦軍NT部隊所属GX3号機、これよりそちらを援護する」

『ありがたい！ セプテムはこちらでなんとかする。ガンダムはオクト・エイプを沈めてくれ。俺達じゃ手に負えない！』

ドートレスコマンドのパイロットから悲痛な声が届く。

×××は簡単に撃墜したが、本来オクト・エイプは宇宙革命軍が戦争の最終局面を迎えるに当って投入した高機動量産MSの傑作だ。その性能はガンダムやNT専用機には及ばない物の、地球連邦軍の主力兵器であるドートレスなど遥かに超えた能力を秘めている。

エース級のパイロットならともかくこんな防衛線の後詰に回されるような一般の部隊では手も足も出ないだろう。

「了解了解つと」

ガンダムという心強い援軍を得て士気を持ち直したドートレスは編隊を作つて残った2機のセプテムに攻撃を加える。

セプテムの援護に向かおうとしたオクト・エイプに対して×××はGXのバーニアを最大出力で吹かして迫りハイパービームソードを抜きながら近接格闘を仕掛けた。

咄嗟にビームサーベルを引き抜いてGXの攻撃を防ぐオクト・エイプ。その反応は良かったが連邦軍の最新MSであるガンダムタイプと格闘戦を行うには機体出力が余りにも違いすぎた。

続く2撃目でサーベルを弾かれ、3撃目を回避しようとして姿勢

が大きく崩れる。パイロットが慌てて制御バーニアを吹かした所で動きの止まった機体にシヨルダーバルカンとブレストバルカンの計5門の砲口が打ち込まれた。

「ひとつ！」

僚機の撃墜に焦ったもう一機のオクト・エイプがGXの頭上からビームライフルを連射しながら近づいてくる。

「甘い！」

×××はそちらをロクに見もせずに小刻みに機体を動かして難なく全弾を避けると、射撃が終わり脇をすれ違おうとした敵機の胴体に対して脚部間接による攻撃——膝蹴りを食らわせた。

機体のダメージというより急激なGを受けてオクト・エイプはパイロットが意識を失い行動不能になる。

「ふた、——ッ!？」

腰のマウントからバスターライフルを引き抜きトドメを刺そうとしたところで×××は殺気を感じて跳ぶように後退した直後、20を越えるビームがGXの元居た場所に光のシャワーのように降り注ぐ。

動きを止めていたオクト・エイプはその中の一条を受けて爆散した。

「なんだっ!？」

『そのガンダムタイプ——』『お前が噂のGXか?』

G Xが広域通信から拾った声は女の物だった。

×××はすばやく光のシャワーの元を見やる。

そこにあるのは純白のカラーリングに独特の円錐形の腕部、周囲には無数の小型ビットが飛び交い、頭部と胸部に2つのモノアイが光るMS——宇宙革命軍のNT専用機　RMSN-008ベルティゴ。

×××自身何度か戦って撃墜した経験もあるMSだが今回は勝手が違った。

『無人機がないぞ？』『色も黒だ』『だが私達と同じ力を感じる』

「ベルティゴが…二機？」

そして通信で拾っている女の声も二人。×××は女を褒めるために鍛えた洞察力のおかげでこの二人が双子であることを見抜き更に冷や汗を流した。

ニュータイプにとって双子や親兄弟というのは最も感応しやすい存在となる。このガンダムを見ても全く動揺しない事からこのベルティゴは二体でワンセットのチームとして今まで何人もの連邦のニュータイプを葬ってきたのだろう。

×××は苛立ちを隠そうともせずにコンソールを操作して先程戦域を指定してきた管制官へと通信を繋げた。

「おい、管制室！　こちら三号機、パープル2に来たベルティゴは2体だ！　クソツタレ！　お前らの情報はどうなってるんだ！！」

『こちら第四艦隊旗艦マリアナ。情報の齟齬^{そご}については謝罪する。だが現在作戦は最終準備段階、サテライトキャノンの射線確保のシークエンスに入っている。レオパルドもエアマスターも手一杯で援

軍は出せない。三号機は防衛部隊と連携して敵に対処せよ。いいか、絶対にその2機の突破を許すな！」

「無茶を言いやがって……」

通信の切られたモニターに向かって×××は毒吐く。貧乏くじはいつものことだがここまで最悪なのは今回が初めてだ。

レーダーを見れば頼みの綱のドートレス部隊はようやく一機を撃墜したものの、アストラザ級の対空砲火に守られたもう一機のセブテムに手を焼いているようで到底援護を頼める状況ではない。よしんば援護に来たとしてもたかが4機のドートレスなど一瞬で葬られてしまうだろう。

『大型兵器を背負っているな』『ランスロー様に報告するか?』『いや……私達だけで撃墜しよう』『賛成だ。有人のガンダムタイプを撃墜すれば間違いなくランスロー様に褒めていただける』

広域通信で拾った会話はなんとも緊張感の無い物だが、内容からして戦う意志は確定したらしい。

2機のベルティゴはビットを回収すると静かに真空の宇宙^{そら}にその殺意を広げ始めた。

「やれやれ、もったいない。声からして美人なのは間違いないんだが……まあ、もうゾッコンの相手がいるってんなら諦めるしかないなっ……!」

先手は向こう。両腕を収納した高機動モードでの左右対称の突撃。2機同時に迫ってきたベルティゴに対してGXはシールドバスターライフルとハイパービームソードをそれぞれの手に取り出して構える。

『『落ちろ!!』』

G Xは完璧に同時のタイミングで襲ってきた4発のビームを上昇してかわして見せると左の機にライフルを放ち、右の機に近づく。

近づかれたベルティゴは躊躇無くサーベルを引き抜くとG Xの斬撃を片手で受け、軽々といなす。そして次の瞬間、ベルティゴは生まれた空白を瞬く間に詰めてビームサーベルを突き出した。

なんとか上体を逸らしてサーベルをかわすG X。メインカメラの側を通り過ぎたメガ粒子の剣が一瞬だけモニターをピンクの光で満たした。

「やっぱりさっきのオクト・エイプみたいな雑魚とは違う！ お前らは肝の据わった良い女だ。だがまだ本気じゃないだろう？ ビットを出しな！」

『……不愉快な奴』 『同意する。メインカメラの動きがイヤラシイ』
『長居はしたくない』 『決定だ。こいつは——』

『『排除だな』』

双子がそう宣言すると同時に×××はG Xのフラッシュシステムから冷たい波動がフィードバックするのを感じた。

二機のベルティゴが並びそれぞれが長い両腕を左右に広くかかげる。そのままコマのようにクルクルと回転すると遠心力で加速された24基のもの小型ビットが打ち出された。

「きたか！ ビット！」

通常、モビルスーツがフラッシュシステムで操る機動兵器は12

基。ニュータイプという超存在に操られたそれらは連邦でも革命軍でもMS大隊に匹敵する戦力だと考えられている。

対して×××が乗るガンダムXは決戦用のNT専用機といえどもこういった局地戦でフラッシュシステム無しではライフル一丁とサーベル一本だけを背負った一MSに過ぎない。火力差は単純に考えて28対1。ビームの発振装置で数えれば敵は32にすらなる。通常であれば到底勝てる相手でないのは誰の目にも明らかだった。

24基のビットがGXに迫る。その数は×××が今まで訓練や実戦で経験したどんな敵よりも多く、動きはどんな敵よりも鋭い。

ベルティゴから感じられる殺意が鋭く深くなるのと同時に、今度はビームの雨どころか嵐にも匹敵するような圧倒的な弾幕が形成された。

「このおーーツー!!」

だがその弾幕を目視するよりも、想像するよりも早く、直感に従った×××は右手のGコンを殴りつけるようにして前に押し出す。操作に従い、バーニアの推力にサテライトシステムのリフレクターの共振を全開にしたGXは爆発したように押し出されたことでビームの嵐よりほんの刹那早くGXは死線から脱した。

攻撃を外したことを見て取った双子はより強い殺意を滾らせてビットにGXを追うように指示する。自身のベルティゴも再び高速移動形態に変形し今だセプテムやアストラザ級の残る戦域からGXのいる方へと向かう。

『逃さん!』『貴様はここで私達の手土産となってもらう!』

ビットとそして二機のベルティゴが連携した弾幕は途切れる事無くGXに向けられる。

だが最初は前に、そして右に左に、GXの進行方向を見た予測射撃はそのどれもが掠りもしない。GXはデブリがあればそれを蹴って方向を変え、コクピットの残るMSの残骸すらも殴って機動変化の足しにする。バーニアの軌跡に滑らかな曲線は無く、子供が落書きで描いたようなデタラメな絵が宇宙に書きなぐられた。

『ビットの補足が間に合わない！　なんだあれは！』　『本当に人間か！？』

ベルティゴのパイロットの動揺がビットに伝わる。

事実、異常な機動だった。NT専用機であるGXのバーニア推力は並みのMSを遙かに超える。それを全開にして左右に機体を振り、あまつさえデブリを蹴ってさらに加速をつけるなどMS戦闘を知るものからすれば自殺行為でしかない。

だが黒いガンダムのパイロットはそれをやつてのけたのだ。

彼は死の包囲網の一瞬の綻び^{ほころび}を見破ると二機のベルティゴの内、片方に向けてシールドバスターライフルの引き金を二度引いた。

『キャアアアアー！！！！』

『姉さん！』

ビームはどちらも命中。ベルティゴは胸と左腕に損傷を受けたが爆発する気配は無い。装甲の薄い部分には当らなかったようだ。

「まだ落ちないか……むつ？　なんだ？　ビットの動きが……」

×××は自分の攻撃が与えた思わぬ効果に驚いた。

ビットは今だ鋭い動きでGXを追ってきている。だがそれが4基だけ。残りの実に20基近くがその動きを完全に止めていたのだ。

「あの一機だけでビットを20基も搭載してコントロールしていたということか？ ……いや、そんな事、できるはずが無い」

考えながらも動きを止めたビットに攻撃を加えて次々と撃墜していく。最近のジャミルであればランダムに動き回るビット相手でも平気でライフルを当ててしまうのだが、彼はビット撃ちはそれほど得意ではなかったためこの機になるべく数を減らしていく。

被弾したベルティゴのパイロットが意識とコントロールを取り戻した時にはビットの数は一基にまで減らされていた。

その8のビットが再び鋭い動きでGXを追いつめようとする。やはり被弾したほうのパイロットが優秀だったのかと思案する内、今度は無傷の方のベルティゴがサーベルを持ってGXの懐にまで接近していた。

『貴様……！』

GXもサーベルを引き出しベルティゴの攻撃を受け止めると、すぐにその場を退避する。ビットのビームがGXの装甲を僅かに削っていた。

「コンビネーションは抜群でしかも執念深い……厄介だな」

胃や肺に感じる嫌な重みに顔をしかめる×××。先程の機動は体にかかる負荷が大きくてそう何度も使えるものではない。

一方、ベルティゴの姉妹もビットの大半を失ってしまった以上、どちらも白兵戦を決着をつけなければいけないのだ。

再び接近してきたベルティゴに対して今度は固定兵装のバルカン

の一斉射撃を放つ。装甲の薄いオクト・エイプと違いダメージは与えられないが、カメラや精密機器に衝撃が与えられ一時的にベルティゴの動きが鈍る。

すると今度はビットの動きが止まらなかった代わりに一瞬だけ8基全ての動きが単調で緩慢になった。

「——っ！……そうかつ！この双子、それぞれでビット操作の”質”と”量”を補い合っていたのか！そんな……そんな手があったっていいのか！」

×××は敵の新技术を看破すると同時に強く惹きつけられた。

戦場での優勢劣勢を直接支配できるNTに関する研究はどちらの勢力でも最優先で行われている。特に覚醒レベルが低かったりフラッシュシステムに対応しないNTの能力の底上げは軍が最も欲しがっていた技術だ。

かくいう×××もフラッシュシステムに不完全にしか適合しないという弱点を持っている。

鹵獲は無理だとしても少なくとも今日、この二機のベルティゴの戦闘データを持ち帰れば、いつかは自分もジャミルのような無敵のニュータイプになれるかもしれない。

「そうと分かれば……！！！」

GXは先程のバルカンを受けたベルティゴに向かって今度は自分から近づいていくと切り結んだ瞬間、手首を絡め取るようにしてビームソードを動かす。腕を予想外のベクトルに引っ張られてベルティゴがよろめいた瞬間、GXの回し蹴りが強烈にそのコクビットの装甲を叩いた。

『ぐううううー！！！！』

『ニキータ！』

同時にGXを補足していたビットの照準が甘くなり、動きも鈍くなる。

蹴った反動で加速をつけたGXはビットの方へ向かいサーベルとライフル、バルカンの全てを使い一息で残りのビットを片付けた。

『そんな！』『ビットが！』

「これで、もう満足な援護はできまい！」

自身の精神的優位を悟った×××は今度こそカタをつけるべく再び近接戦闘を挑む。

双子は白兵による乱戦を嫌がって牽制のビームを放ちながら距離を保とうとするが、回避動作を最小限に絞って迫るGXに成す術も無く追いつかれる。

「随分と焦らしてくれたな！ 今喰ってやるぜ子羊ちゃん！」

『くっ、サーベルを……！』『——ッ！？ 姉さん、いけない！』

宣言どおり噛み付くような機動を見せるGXに二機の内一機が焦って中途半端な距離でビームサーベルを抜刀する。

完璧だったはずのチームワークの僅かな乱れを×××は見逃さなかった。

ベルティゴが武装をサーベルに切り替えたのを見たGXが雷のよきな軌道で方向を変えもう一体のベルティゴの方へ迫る。

姉の援護を失った一瞬のタイミングについて行われた斬撃はニキータと呼ばれた女の機体の両膝を切断していった。

『しまった！』

両足を失ったMSは腕部や脚部の質量による機動制御——AMB
AC制御を失いその機動力を著しく減少させる。

斬った後すれ違ったGXは即座に反転してバタバタと溺れるよう
にもがくベルティゴにビームを一射。援護に駆け寄ろうとした姉に
向かって同時に三射を放った。

三射はそれぞれ右腕、頭部そしてさきほど被弾のあった胴体部に
命中する。

二機のベルティゴはどちらもジェネレーターを貫かれ、小爆発を
起こした。

『姉さん！！』『ニキータ！！』

双子は最期に互いを求めるように手を伸ばしたがその手は届く
ことは無く、紅蓮の炎がベルティゴのコクピットを包み込む。

白い機体は同時に爆発し、×××は2つの魂が宇宙に拡散してい
ったのを感じた。

「……終わったか。ふう、これでしばらく戦線は——接近する
MSの反応！？クソッ、センチメンタルに浸る暇もねえ！！し
かもこの感覚——まだニュータイプが来るってのかよー！！」

引き攣ったように叫びながら流れた汗を振り払い再びヘルメット
を被り直す。

「敵のMSは一機。しかし凄まじいプレッシャー……ジャミル並み
の相手か。あの双子の死を嗅ぎつけてきたか」

G Xの砲撃用望遠レンズが捉えた機影はまるで人魚のような円錐状の下半身を持ち太い五指を構える見た事も無いMSの姿。ベルティゴを発展させた宇宙革命軍の最新型NT用MSと見ていい。基礎性能ではともかく、Gビットも無く局地戦に不向きな×××のGXでは明らかに力不足だ。

「こりゃあ、殺り合ったら間違いなく俺が死ぬな」

×××は自嘲気味に呟いた。

ジャミルとのシュミレーター、模擬戦を合わせた戦績は10勝25敗。その内8勝は三ヶ月以上前の物で、あとの2勝ですら快勝とはとても言いがたい物だった。それでも地球連邦軍の全てを見回してもこれほどジャミル・ニートと戦える者はいないだろう。

名実共に連邦軍ナンバー2である×××。

それがこれほどのプレッシャーを受けるとは、相手は一体何者なのだろうか。……いや、機体名もその特性も攻略法も、どれもが予測不可能であるが×××には一つだけ確信がある。

「間違いない、あいつがあの子の言っていた”ランスロー様”って奴だ」

もし、生きたいのであればあと30秒。見つからないようにこのデブリに隠れてあの機体をやり過ごせば×××は助かるだろう。もとより敵の目的はサテライトキャノンの発射の阻止、Gビットを連れていない三号機に傾注するとは思えない。

あのMSが現れればサテライトキャノンの発射は阻止されるだろうが、ジャミルが黙ってやられることだけはありえないと×××は確信していた。

だが

「……あいつを見逃せばコロニーは間違いなく地上に落とされる。それがひよっとしたら俺の女に当るかもしれねえ」

台詞とは裏腹に死の予感でブルブルと体が震え始める。

×××は自らの意に反する体を筋肉を強張らせることで押さえると、本能が鳴らす警鐘に逆らって無理矢理に笑った。

「いいぜ、やってやる！ ジャミルのサテライトキャノンの発射まであと140秒。その間に色男の面目って奴を俺が散々にしてやるよ！」

黒いGXはその乗り手の期待に応えるかのように獰猛にバーニアを唸らせると宇宙を駆ける白いMSを迎え撃つように飛び立っていた。

この後、ジャミル・ニートの乗ったGXによるサテライトキャノンの砲撃は成功を収め、宇宙革命軍はコロニー落としに使用するはずだった廃棄コロニーの10基以上を失う。

だが戦線の膠着とそれによって再び見え始めた敗戦の可能性を恐れた宇宙革命軍はむしろ、コロニー落としの強行を強く決意する。

当初の予定を超えて産業用、軍事用の如何を問わずにいくつものコロニーが落とされた結果、地球環境は深刻な打撃を受け100億の人口がその数を2割以下にまで減らす人類史上最大の悲劇となった。コロニー、地球全ての住人が人類滅亡という予感を抱く。

だがその寸前、一歩手前まで、本当に国力の限界まで消耗しもは

や国家体制を維持する力すら残っていなかった地球連邦政府と宇宙革命軍は皮肉なことに戦争の最中、ほぼ同時期に空中分解することになった。

×××が憎んだ全ての業、罪を背負うべき組織、人間は何もかもがうやむやのうちに消えた。

ランスローのフェブラルによってコクピットを撃ち抜かれた三号機は連邦軍残党によって回収、修理されその後24年の眠りにつくジャミル・ニートは軍には戻らずバルチャーとしてニュータイプの保護運動を開始。

ランスロー・ダーウェルは2《・》機のガンダムXを撃破した功績を讃えられ2階級の特進。NT能力を失いながらも依然最高のパイロットであるとしてクラウド9防衛部隊に配属された。

戦争は終わりアフターウォーAWの世紀が始まる。

だが死んだ×××の魂がその平和を見ることは無かった。

彼はその名前を失い、その魂を更に過酷な戦場へと連れ去られていったのだ。

1、「また夢の話を聞かせてくれ」（後書き）

ドートレス ジム

セプテム ドム・リックドム

オクト・エイプ ゲルググ

ベルティゴ キュベレイ

フェブラル ジオング

2、「なるほど、突然変異へミュータント」じゃな」

2、「なるほど、突然変異^{ミュータント}じゃな」

——ソビエト社会主義共和国連邦

世界初の社会主義国家にして5億に迫る人口を持ち、”労働者による独裁”を掲げる強固な国家体制、横断すると時差が10時間以上発生するほど広大な国土、軍事力は強大で技術力も一流とあらゆる面で大国たる威容を備えた国家。

かつて《・・・》この国はアメリカと世界を二分した超大国だった。

全ての転機は1973年。

この年の4月19日、隣国にして友好国の国土である中国の新疆ウイグル自治区カシュガルにBETAの着陸ユニットが飛来した。

中国は異星生命体の宇宙船を回収するため、落下地点から出現したBETAに対して陸・空軍の総力を挙げて攻撃を開始する。当初こそ圧倒的な火力と航空戦力によって対BETA戦は優位に進んでいたが、戦闘発生から約3週間後、現れた生体レーザーを発する光線属種の発生によって中国人民解放軍の航空戦力は無力化され、空からの援護を失った機甲師団も壊滅する。

この危機的な戦局に対して中国はソ連に対して共同作戦を打診、ソ連政府も同じようにBETAに対して危機感を募らせていたためこの提案はすぐさま了承された。こうして興った中ソ連合軍による人類史上初のハイヴ攻略作戦”紅旗作戦”はしかしBETAの圧倒的物量と光線属種という天敵によって軍事的效果を出せず僅か九日

で断念される。

連合軍は敗走に次ぐ敗走と繰り返し戦略核による焦土作戦を決行ことでなんとかその侵攻を食い止めるが、その頃にはソビエト・中国軍ともにその戦力の7割以上を喪失し超大国としての姿は面影も残ってはいなかった。

この戦闘結果を受け国連ではオルタネイティヴ2（BETAの捕獲と調査による生体研究を目的とした計画）では決定的な成果を得られないとし、ソ連主導のESP能力者による対話を目指したオルタネイティヴ3への移行が決定する。

オルタネイティヴ3はその第一段階として霊能力者・聖職者・カルト教団関係者などソ連が今まで調査しESPおほと思しき能力を持っているとされた者を見境無く集め、投薬から身体改造まであらゆる生体実験を行った。

この果てしない犠牲と資金投入の結果、ESP能力者には能力ごとに脳波と遺伝子に共通部分があることが判明し、ソビエト最高会議はオルタネイティヴ3完遂のために不安定な天然ESP能力者ではなく、安定した能力と人数を確保すべく人工ESP能力者を生産するための研究を開始した。

***1978年 10月 ソビエト連邦 第2首都ハバロフスク

第6 感覚関連遺伝子研究所***

第2首都ハバロフスク。

北緯48東経135、アムール川とウスリー川の合流地点に面したこの都市は1975年、当時BETAの西進によって圧迫されていたモスクワに代わりこの国の首都機能の移転先として決定される。その三年後の1978年2月、パレオロゴス作戦の失敗とBETAの逆襲を受けてユーラシア北西部を維持することができなくなっ

たソ連政府はその後の更なるBETAの西進に備えて当時ノヴォシビルスクにあったオルタネイティブ3の中樞施設をハバロフスクへ移転させた。

移転先は街の中央にあるハバロフスク駅から真っ直ぐアムールスキ―大通りを進んだ政府官庁の並び。

施設には第6感覚関連遺伝子研究所との公式名称が掲げられている。

オルタネイティブ3の中樞施設であり、その中でも最も重要な研究を任されている部屋があった。

「ニコライ！ ニコライ！ どこにおる！ 何をしておった！」

部屋には床から天井までを貫く青くボンヤリ光るシリンダー100柱が等間隔に設置されている。

シリンダーは液体で満たされ中には直径5、6センチ、胚と見まごう程未成熟な人間の胎児。まだ未分化の内臓が透けて見えるこの胎児達は人工の胎盤に繋がれながら日々成長していた。

母胎の環境に限りなく近づけるために暗く暖かく静粛に保たれるべきこの部屋は今ほ怒声を放つ白髪の老人――この部屋の責任者たるソ連科学アカデミー自然科学部 学部長セルゲイ・ラフマニノフによってドアが開け放たれ、全ての電灯が点けられていた。

彼の声に答えて一人の青年がボサボサの頭を掻きながらシリンダーの隙間からのそりと這い出す。

「またですか、教授！ 勘弁してくださいよ。まだ朝の5時ですよ。酒が切れる度に目を覚まして怒鳴り散らすなんて酷いじゃないですか」

「人を痴呆の進んだ老人みたいに言うんじゃない！ いや、それよりもこれはどういう事だ！？」

「これって…どれですか？」

「^{アシン}一番の人工子宮だ！ 胎児が2つも入っているじゃないか！」

老人の声に答えて青年が目を擦りながら1番とラベルの貼られたシリンドーを見やる。見れば部屋にある100の人工子宮の内、確かにこの一柱だけ2つの胎児が培養液の中でプカプカと浮いている。

「んん？ 本当ですね」

「ニコライ！ まさか貴様、例のいかがわしい実験のために勝手に遺伝子サンプルを弄ったんじゃないな！？」

老人の落とした雷に首をすくめるニコライ。

「ちょ、ちょっと。そんなことしてませんよ！ 人類の命運を賭けた計画でそんな不祥事を起こしたら、いくら国連の所属になった僕でも祖国に抹殺されてしまうじゃないですか。それにこの仕事に付いた時点で僕の夢はもう既に叶いつつあるんです。今更そんなことはしませんよ」

現在オルタネイティブ第三計画の要であるESP能力の研究は第5段階まで開発が進んでいる。

第一世代はESPのサンプルとして世界中から集められた天然の超能力者。

第二世代はESP発現の遺伝子を調べるために第一世代の卵子と

精子を掛け合わせた人工交配児。

第三世代は第二世代の結果を踏まえて遺伝子操作によって100%ESP能力を持つよう作り出されたデザインベビー。

第四世代でESP能力の中でもリーディングとプロジェクションを操れるESP発現体を人工子宮によって生産することが可能になり、

そしてようやく今、目の前の人工子宮で育ちつつある第五世代がハイヴ突入後のリーディング作戦を行うために戦術機適正遺伝子を付加した人類の救世主として完成したのだ。

この計画、主導は国連だがホストとしてメンツが掛かっているソビエト連邦の期待は相当な物で、セルゲイの一助手でしかないニコライの元にも天文学的な額の研究資金が入ってきている。

ニコライにとってたかが遺伝子実験の一つのために彼がその立場を危険に晒すのはありえないことだった。

「……それもそうじゃのう。ではこれは突然変異とつぜんへんいということか？」

「いや、元々一番は成長が異常に早いと観察記録に残っていましたから、ひょっとしたら双子がくつついて一つに見えていたのかも知れません」

「双子にならんよう遺伝子はきちんとチェックしたはずなのじゃのう」

セルゲイは確認のために一番の人工子宮に懐中電灯の光を当てる。小さくて殆ど目立たないが、二つの胎児の皮膚には確かに破けた跡があり、元々くつついていたのが二つに分かれたようだった。

「厄介じゃのう。第五世代は遺伝子カテゴリを厳密に分けて生産計

ビャーチエノワ

画を立てておるから予備の人工子宮など残つとらん。二人分の”生産”にマシンが耐えられるかどうかもわからん。仕方が無い……いつそどちらかを――」

――ヤメロ

” 廃棄してしまうか？ ” という教授の言葉は紡がれなかった。

突如、彼の脳裏に届いたのは強烈な拒否の感情。

部屋の電灯がパチンパチンと音を立てて消え、それまで静かだった部屋に暖房が勝手に作動し生暖かい風と不気味な唸り声のような音を響かせる。

――シニタクナイ……シニタクナイ！

声無き思念があらん限りの力を振り絞ってセルゲイとニコライの精神に生への渴望を訴える。

学者2人にとって慣れ親しんだはずの研究室は一瞬にして不気味な存在の住まう恐怖屋敷へと変貌を遂げた。
ホラーハウス

「きよ、教授……？ これは、い、い、一体な何が……？」

腰が抜けて情けなくもへたり込むセルゲイ。

対してラフマニノフ教授は臆^{おく}する事無く、むしろ興味津々といった様子で青白く光る一番のシリンドラーを睨みつけている。

この老人にESP能力は無い。だが積み上げてきた経験と洞察力からセルゲイはこの一番シリンドラーの胎児の内どちらかがこの現象を起こしたのだと確信していた。

「……儂の言葉を理解したわけではあるまい。胎児の体、脳も感覚器官も無い状態でリーディングとプロジェクションを発現させるか

……なるほど、突然変異ミュータントじゃな」

「教授、そんな悠長なこと言っていないで逃げましょうよ！ 祟りですよ！ きつと今までここで死んだ実験体の幽霊が……」

アワワと齒を鳴らしながら怯えるニコライを見てセルゲイは嘆息した。

なんたることか。無神論者であるべきソ連国民のしかも科学者という身分を持った人間がこのような戯言を口にするとは。

「ばか」！ うろたえるでない。こんなものはただの超常現象だ。普通でないというだけで、いくらでも科学的説明がつく！」

馬鹿、の部分だけ日本語で発音したセルゲイ。

ニコライはいつもと違う、聞きなれない言葉で叱られたおかげで少しだけ理性を取り戻す。

「ぼ、僕は遺伝子工学が専門です。教授みたく超能力に関しての推論なんて立てられませんよ」

「だったらもつと精進することだ。学問は全て一つなのだからな。何、研究対象なら今僕が提供してやろう。その一番の二人だ」

「ええ~~~~！！ このまま継続するんですか！？ 最悪、人工子宮が壊れるかもしれませんよ？ それに僕、もうこんな部屋には居たくないし……」

ニコライの最後の呟きはしかし老人によって一蹴された。

「当然だろう。人工子宮が何だ。お前のためにこんなに面白い実験

体を処分する理由がどこにある？ ……だが、そうじゃな。確かにこのまま続けるとこの胎児が生まれた場合アジン・ビャーチェノワ（第五世代の一番目）が二人になってしまう。これは書類上非常にややこしい、別の記号が必要だ」

「え”え”っ、問題はそこですか？」

ふーむを髭をなでつけ考え込むセルゲイ。

だが思いつかなかったのかすぐに手を振って思考を放棄した。

「ただの記号に時間を割くのは無駄だな。儂の四人の孫の名前をやるでしょう。男の双子ならユーリーとボリス。女ならリウドミラとアナスタシア。ユーリー・アドニー（ロシア語の一番の複数形）・ビャーチェノワか……………そういえば儂が人に名を与えるのはこれが初めてだな」

「…………。そういえば教授は子供が生まれた時も孫が生まれた時も論文を書くのを止めなかったんでしたっけ」

「当たり前じゃ。儂の頭脳は一日で人類を一年分進歩させるのじゃぞ。たかが配偶者の出産くらいで研究を休んでなどいられるか。全く…………まあいい。お前が平気なら儂はもう寝るぞ。それと、後でセキユリティを呼んで設備を点検させておくのじゃぞ。さっきのESP波で人工子宮に不具合が出るかもしれんからな」

「はいはい。大丈夫ですよ教授。僕が人工子宮の監視ぐらいこなせないとお思いですか？」

ニコライは歯を見せ親指を立てて余裕をアピールする。
だがセルゲイの目は疑わしげなままだった。

「……大いに思う。学生時代、経過観察を任せたビーカーを転んで薙ぎ倒したのは誰だったか……今更じゃがなーんでお前のような奴が助手として国連に推薦されたのかのう？」

「ひ、ひどいです！ あの時は実験室にネズミが出てそれで驚いて――」

「……………とにかく、頼んだぞ」

それだけ言いつけてセルゲイはそつと部屋のドアを閉じた。

ニコライはまだ何か抗議していたが実験室の扉は分厚く閉じると殆ど音を通さない。

「やれやれ、あの性格さえ直せば遺伝子デザインの腕とセンスのあるいい学者になれたのに。あの突然変異ミュータントといいBETAにハイヴといい……なんと、この世はままならんことばかりじゃな」

老人らしく肩をすくめたセルゲイは再び眠るためにウォツカを求めてPXの方へ足を向けた。

2、「なるほど、突然変異へミュータント」じゃな」（後書き）

ソ連やオルタネイティブ3の設定でかなり独自の物を出しています。
正直完全に把握しきっている自信はないので矛盾がございましたら
どうかご指摘ください。

3、「あれが、戦術機……！」

3、「あれが、戦術機……！」

1984年 ハバロフスク近郊 国連軍基地

「ひとつ、我々ソビエトの子らは世界の先駆けとして、常に規律正しく模範的な行いを心がけるべし！」

「「ひとつ、我々ソビエトの子らは世界の先駆けとして、常に規律正しく模範的な行いを心がけるべし！」」

二スの塗られた椅子と机。一段高くなっている教壇には白墨が一本と汚れた黒板が一枚。

25人の子供が立って祖国の標語を斉唱している場所はロシア中どこでも見られるような普通の教室だった。

ただしここは普通の教育機関ではない。その証拠に生徒は全員が美しい銀髪と碧眼を持つ5歳の幼児であり、教師役の男が黒と蛍光ブルーの国連軍の軍服を着ていて軍曹の階級証を付けている。

ここはハバロフスク内にある国連軍基地。元を辿れば大戦中に作られたソビエト軍の航空基地を国連がオルタネイティブ計画のために租借した建物だった。

「ひとつ、党の言葉は常に正しく最善である。党の言葉を忠実に実行しその威光を知らしめる事が”優秀者”になる唯一の方法である！」

「「ひとつ、党の言葉は常に正しく最善である。党の言葉を忠実に

に実行しその威光を知らしめる事が”優秀者”になる唯一の方法である！」「」

（あゝ、くだらねえ）

その中の一人、フワフワの巻き毛を持った男子、ユーリー・アドニ・ビャーチェノワは毎日繰り返されるこの”洗脳作業”にうんざりしていた。

彼は周りにいるほかの24人と同じような何も知らない子供ではない。ソ連が理想郷で無い事もこの暑苦しい標語を毎日2回斉唱させる目的も知っているし、それどころかこうした教育では決して教えられない筈の共産主義や独裁体制の問題点だって指摘できる。

彼にとってこの毎日の”教育”は無駄な時間そのものであった。

だが全てを知っているが故に、この日課から逃げた場合どんなことをされるかも予想がついているので、教官にバレないように口パクで斉唱をしているのだ。

唯一隣に立つ腰まで届く長い髪的女子だけが彼の怠慢に気付き、注意のために肘で彼のわき腹を突つついた。

（おいリユー、やめろ！ どうせ影になって見えてねえのに、バレちまうだろうが！）

何度かわき腹を突かれ悶えるユーリー。だが意地でもこの唱和には加わるまいと必死で耐える。

やがて呆れたのか、はたまた自身も叱責の対象になるのを恐れたのか、リユーと呼ばれた少女は嘆息すると再び己の教科書に目を戻した。

（諦めたか…… やれやれ危ないところだった）

必死で声を堪えてはいたが実際、彼の幼くて筋肉の無い体にはあの肘は相当辛かった。もう少しでうめき声をあげてしまうといった所で彼女が切り上げたのでなんとか助かったのだ。

やがて唱和が終わり、全員が教科書から顔を上げると教師役の軍人がユーリーの隣を指した。

「同志リュドミラ！ 貴様を生んだのは誰だ？」

「はっ、偉大な父共産党と母なるロシアの大地です！」

教官の問いかけに先程ユーリーのわき腹を突いていた少女——リュドミラと言うらしい——が答えた。

「同志ユーリー！ 貴様達ビャーチェノワ（第五世代）の使命は何だ？」

「はっ、ハイヴに進入し最奥部にてリーディングを実行。BETAと意志の疎通を行うことです！」

ユーリーもさすがに今度は口パクで済ませるわけにはいかずに仕方なく教官の望む通りの返答をした。

「同志トゥリツァッチ・トゥリー！ そのためには貴様達は何を犠牲できる？」

「——全てです！ 私の手足が千切れ、血が最後の一滴まで乾くに至るまで！ 我が兄弟姉妹は全員が一丸となって目的を達成します！」

「大変結構。では授業を始めよう。全てはソビエトのために」

「――全てはソビエトのために――」

一連の会話を終えようやく全員が席に着くことを許された。

熱狂は無かった。教官も形式以上の物は求めていない。ただただ淡々と課せられた義務――人工ESP発現体に対するソビエト連邦への盲従と奉仕の刷り込み――を確認するだけの儀式。

だがそれ以外に何も知らない幼子にとって1000、2000にも及ぶこの繰り返しは精神の根幹を成す絶対の価値観として刻み付けられていく。それは西側諸国からは洗脳教育と恐れられ、この国にとってはBETAと戦う20年以上前から続けられてきた当り前のことだった。

（くそ、なんでこんなことになってるんだ！ せっかく死んであのクソツタレな地球連邦軍から解放されたと思ったのに、今度は大昔の独裁国家で宇宙人と戦えつてのかよ！）

ユーリーは真面目な演技を全く損なわないまま、生まれてからの五年間、ほぼ毎日のように繰り返している懊悩を心中で叫んだ。

――ユーリー・アドニー・ビャーチェノワには前世の記憶がある。

それは第七次宇宙戦争時にニュータイプとして覚醒し、地球連邦軍に入隊させられルシル・リリアントに散々しごかれた記憶。年下の友人で戦友でもあるジャミル・ニートとの訓練の日々。そしてガンダムX三号機に乗って宇宙革命軍と戦い戦死した記憶。

だがただひとつ、自分の出身地や趣味の数々、ガールフレンドのメールアドレスだって諳^{そら}んじる事ができるが、記憶の中で一つだけ、何故か己の名前だけがどうしても思い出せない。

どうにかして記憶の中の他人の会話や持ち物から名前を思い出そ

うとするが、忘却はインクでもこぼしたかのように名前の部分だけを完璧に覆い隠していた。

そのせいで前世の記憶は自分の記憶であるはずなのにどこか他人のように感じられ、ユーリーにはそれがとにかくもどかしかった。

「今回はBETAと人類の初接触に着いて話したな。誰か、”BETA”が何なのか答えられる者はいるか？」

教官が問いかけると一斉に24の腕が掲げられた。

ユーリーも渋々ながら腕を挙げる。ここで挙げておかないと返って指名されるのは目に見えていた。

「では同志デビヤノースタ君」

「はい。BETAとは国連名称Beings of the Extraterrestrial origin which is Adversary of human raceの頭文字から4文字をとった名称で我々の言葉では”人類に敵対的な地球外起源種”という意味になります」

「よろしいデビヤノースタ君、正解だ。彼らは容姿、能力によって8つの類別に分けられるが共生関係にあるわけではない。あくまでもBETAという一種類の群れとして行動しているという事が君たちが所属している計画の前身オルタネイティブ2で判明している」

教官は手元のファイルから何枚かの画像資料を取り出して黒板に貼り付けていく。

その資料に写ったBETAのあまりに奇形で異形な姿に今まで感情を見せなかった生徒達の中にも目を逸らしたり口元を押さえる者が出始めた。

（話には聞いていたけど……うへえ、信じられないくらいグロい生き物だな）

「まず一番に覚えておくべきなのが光線^{レーザー}属種。人類がここまで劣勢に至った最大の理由だ。小型の光線級の特徴は380？離れた高度1万mの飛翔体を的確に捕捉する照準能力と重戦車ですら一撃で蒸発させる威力を備えた生体レーザー発振器官を持っている。重光線級は攻撃方法は光線級と同じだがより高い照準能力と攻撃力を備え、さらに突撃砲に対する防御力まで備えている。どちらも戦場では最優先撃破対象だ」

教官が示した画像には全長3メートルほど緑色の体躯で2つの大きな目を持った光線級の姿と、その五倍の体躯と大きな単眼を持ったピンク色の重光線級の姿が映し出されている。ぶよぶよとした質感と二本の人間らしき足は生徒達に生理的嫌悪感を高める効果をもたらししていた。

「要塞級^{フォート}は今まで人類が観測した中でも最大のBETAだ。巨体ゆえのタフネス、自由自在に振り回し溶解液を送り込む尾角、そして何よりも体内に小型種を格納していることがあるのが厄介だ」

ハチのような胴体^{バイル}に杭の様な10本の足を持った要塞級。全高は66メートルと下手なビルよりも巨大だ。

（でかい……まさか宇宙革命軍の砲撃MAグランディーネより巨大な生物がいるなんて）

MSに乗って宇宙革命軍と戦い続けてきたユーリーにとって宇宙は身近な場所だったが、彼のいた世界では地球以外に生命体は確認

されていない。

今まで習った歴史などから薄々違和感を感じていたが、この写真を見てようやくここは自分の元いた地球とは違う世界なのだと確信した。

「次は小型種。歩兵の兵器でも有効打を与えることができるBETAのことだ。兵士級^{ソルジャー}。全8種中最小のBETAで人間を遥かに超えた腕力がある。そして闘士級^{ウォーリアー}、こちらも対人BETAだな。挙動が俊敏で像の鼻のような器官は三トン近い牽引力を持っていることが判明している」

闘士級はまるで赤く光る蠅のような複眼を持った二本足の象^{ぞう}のような姿をしている。兵士級は上半身は人間に近いシルエットをしているが肥大した下半身と6本の足がやはり異星起源種というべきか。教官は全員がここまでの5体の資料を見たことを確認するとそれらを脇に押しやって残る3体の資料だけを真ん中に置いた。

「さて、これで5種のBETAを同志諸君に紹介したことになるが、これらのBETAにはある共通点がある。それはこれら5種類のBETAはハイヴ内には存在しない、もしくは存在しても脅威にならないということだ。詳しく言えばまず要塞級はハイヴ内での観測事例が無い。光線級2種はハイヴ内では生体レーザーを使わないし、兵士級と闘士級は戦術機に対して有効な攻撃手段を持っていない。君達の使命は戦術機によるハイヴ突入であるからして脅威となるのは残りの3種となる」

教官が再び資料を指す。そこには皺くちやの顔を尾に持ったサソリのようなBETAや紫斑のついた甲殻を背負った犀のようなBETA、4つ足の真つ赤な体躯に人型の腕大きな口が胸元にあいた3種類のBETAの姿があった。

「要撃級。^{グラップラー} BETA戦力の中核を成す個体であり、主に2対の前腕を武器にして格闘戦を挑んでくる。BETAの中でも特に動作が俊敏で生命力が高い。特にこの前腕はダイヤモンドより硬く強靱で現在我々人類が製造できるあらゆる材質よりも優れた攻防自在の武器であることを覚えておけ。

^{デストロイヤー} 次は突撃級。先の要撃級以上の硬度を持つ甲殻と衝角を備えておりその突進速度を生かした衝角突撃戦術をとってくる。外でならいざしらず狭いハイヴ内では脅威度がぐんと高くなる。

^{タンク} 戦車級は小型種ではあるものの数が多くその口部は戦術機の装甲すら噛み砕くほど強力だ。多くいるBETAの中でも最も多くの衛士^{いし}を喰ってきたBETAだ。決して対処を怠らないように。怠った奴は……こうなる」

「うつ……！」

教官が戦車級の資料をめくり今まで見えなかったもう一枚の写真を取り出す。

そこには何匹もの戦車級にたかれながらも必死に手を伸ばしてもがく戦術機の姿。それは人を模して作られたゆえに、中にいる衛士の生々しい断末魔をそのまま伝えていた。

（対処だと……ふざけるなよ！ こんなのが数千数万もひしめく場所に送り込んで、何をどう対処しろっていうんだ！）

MS同士での戦場ならまだいい。

殺し合いに違いはないが少なくとも相手とは鍛え上げた技量と信念をぶつけ合って死んでいける。それは戦士としての死であり、尊厳のある死だ。

しかし

（けどこれは違う。俺はこんな風に化け物に食われて死ぬのも、実験動物として死ぬのも嫌だ！）

ユーリー達第五世代の人工ESP発現体はオルタネイティブ3の技術責任者にして東側の生物学第一人者であるセルゲイ・ラフマニノフ教授によつて600体が”生産”されたが、未熟な遺伝子技術で作られた彼らの中から無事に人工子宮から出られたのはたったの半分でしかなかった。

その300人ですら生まれて1年以内に74人が病死し、3歳から行われたESP開発実験や投薬の”事故”によつて既に50人以上が命を落としている。

オルタネイティブ3での人工ESP発現体の損耗率は衛士の戦場での死傷率よりもずっと高いのだ。

「では最後にBETAの巢にして前進基地であるハイヴの説明に……ん？」

——イイイイイイイン！！

教官が資料を外し次の説明に移ろうとしたところで教室の外からキインという甲高い金属音が聞こえてきた。

最初は微かでほとんど耳鳴りのようだった音は徐々に大きく、教室全体に響くほどになる。

金属音が最高潮に達し、なんだなんだと教室が騒がしくなり始めた頃ドンと一際大きな音がして教室が揺れた。

「キャア！」

「何だ！？ BETAか！？」

「ば、爆撃！？ 逃げなきゃ死んじゃうぞ！」

ビャーチェノワの一人がパニックを起こして外へと走り出す。

パニックは人工ESP発現体に備わった能力——感情を読み取るリーディング能力によって教官が止める間もなく拡大していき、窓から逃げようとする者、机にしがみつく者など各々がバラバラの退避行動を選択していた。

リーディング能力を持つ者は相手の感情を色として思考をイメージとして捉えることができる。ESPで得た情報というのは言語や視覚による情報と違い脳や精神に直接影響を及ぼすため傍目で見ている以上に影響を受けやすいのだ。遺伝子調整のおかげで高い知能指数を持っているとはいえ彼らはまだ5歳児。ようやく自我を持ち始めた年齢であり、不意の事態に直面して冷静でいられるほど精神は育ってはいなかった。

大混乱に陥ったビャーチェノワの中で冷静だったのは唯二人、実際の精神年齢が20を越えているユーリーとその隣に座っていた少女リュドミラのみ。

「……ってリユーは平気なのか？」

前世での従軍経験という特殊な経験を持つ自分とはとかく、ただの五歳児であるはずのリュドミラが平然としているのはユーリーにはかなり不思議だった。

「平気だよ。だって敵の攻撃じゃないんでしょう？ ユーリー」

長い銀髪を揺らし鈴の転がしたような声で答えるリュドミラ。

「よくわかったな……多分さっきのは飛行機かシャトルが不時着してきた音だ。ほら、今は放水の音が聞こえるだろう？ あれはエンジンの火災を消しているんだよ。きつとこの周辺でソ連か国連の機体にトラブルが起きてこの基地の滑走路に誘導されたんだと思う」

「ふーん。ユーリーは物知りね」

リュドミラはふむふむと頷き大変感心している様子だった。

「物知りねって……やっぱり知らなかったのか。お前も皆の”色”が見えてるんだろう？ 怖くないのか？」

ちなみにユーリーはESPとしてではなくニュータイプとして相手の精神に触れているせいか、他のビャーチェノワのように色やイメージで相手の心を捉えるというのはすこぶる苦手だった。

「うん、怖くないよ。教室中に警戒の黄、興奮の赤、恐怖の黒がぐちゃぐちゃに混ざってちよつと気持ち悪いけど……でも、ユーリーを見てたら平気。あなたはクリーム色でほとんど落ち着いているもの」

「俺の感情はリーディングじゃかなり見辛いはずなんだがな」

「わかるよ、だって私は「落ち着けえ！ 落ち着かんか貴様らああ！！」これは敵襲ではない！ 席に着け！ 命令があるまで動くな！」

混沌としていく教室の様子にさすがにまずいと思ったのか、教官はその大音声でもって全員に呼びかけた。このあたりはさすが軍人、力強い声に不安を取り除かれて徐々に子供達に冷静さが戻っていく。

全員が再び席に戻ったことを確認した教官は教室備え付けの内線電話をとってどこかへ電話をかけた。

「こちらカテゴリーファイブワン……はい、若干の混乱がありました
が今は……はい、それで原因は………そうですか特務部隊のM i
G - 27が……はい、
了解致しました」

教官は電話の相手から何かの命令を受け取ると静かに電話を切り
こちらへ向き直った。

「管制室から情報が降りた。基地機能に問題無し。だが念のために
私は現状の確認を取ってくる。カテゴリーファイブワンはこのまま教
室で待機するように」

それだけ言うとは教官はサッと身を翻して教室を出ていく。

パニックから立ち直ったばかりなのに突然放り出されたビャーチ
エノワ達はざわざわと騒ぎ始めた。

（子供に与える情報は無いってことか……）

当たり前のようにつけられる情報規制に呆れかえる。が、それ
もある程度の事情を察することができる。

（さっきの教官の会話から察するに、エリート特務部隊の隊員サマ
が乗った最新戦術機が故障か撃墜されてここに不時着したって所か
な。ハハッ、そりゃあ確かに教育上良くない話だな）

戦線悪化、異民族搾取、内部闘争、経済不振。外国に住んでいる
人間なら誰でも知っているがソビエト連邦をとりまく状況は最悪だ。

今は戦時体制下で情報規制を敷いていることであんなにか国家としての体面を保っているが、もし今日の事で疑念を抱いた人工ESP発現体が将来ここで――ソ連国内の国連軍基地という政治的に微妙な場所で反乱でも起こせばどうなるだろうか。

（まあ十中八九鎮圧されるだろうけど、政府は深刻なダメージを受けるだろうな。史実どおりのソ連崩壊が見れるかもしれない）

ユーリーが腹黒くもソ連崩壊の日を思い描いていると窓の外に大型の輸送車両が通りかかるのが見えた。

カラーは緑、軍用の重機の中でも負荷40tを誇る超大型の油圧シリンダーと全長20mの多目的担架を持ったその車両は兵士から蝸牛の愛称で呼ばれるソ連の自走整備支援担架だ。戦術機の輸送と戦場での簡易整備の役割を負ったその車両はこの国連軍基地でも見かけたことがある。

なんとなく興味を惹かれたユーリーが身を乗り出して外を見下ろす。そして思わず息を呑んだ。

「あれが、戦術機……！」

眼下に見えたのはウリートカの背に横たわる炭素素材を纏った鋼鉄の巨人。左腰のエンジンと左腕がグシャグシャに潰れ、所々に消化剤の泡が残ったままになっているが紛れも無い人型の機動兵器、戦術機アリゲートルの姿がそこにはあった。

――MiG-27 アリゲートル

ソ連初の純国産戦術機にして第一世代戦術機の域を脱することはできなかったMiG-23チボラシユカの発展強化型にあたる本機は跳躍ユニットの可変機構などのチボラシユカ独自の技術を残し

つつ弱点であつた前線での整備性や稼働率に加えて、機動性、運動性を向上させた第二世代機である。MiG-23との外見上の差異は殆どないが機体を構成するパーツの9割を再設計によって頭部ワイヤーカッターは小型化され、また、通信や探知識別能力の向上のため、センサーマストは大型化されている。ナイフシースも大型化され、刃渡りの長いマチェットタイプの近接戦用短刀が納められているなど、同時期に発表された米軍のF-14 トムキャットやF-15C イーグルに比べて明らかに接近戦を意識した設計となっていた。

「バーニア、いや跳躍ユニットは腰についているのか。AMBACではなく空力で機動を制御するんだな……」

モビルスーツ
元MSパイロットとして無意識の内にMSとの差異を探してしま
うユーリーであつた。

そもそも戦術機とMSはその発生目的からして違う。

MSは宇宙空間で有視界距離で敵兵器に対して白兵戦を行うのが主な役割であり、その設計には機動力のほかに音速を超える速度で飛来するデブリや大口径の実弾兵器に耐えられる防御力と戦艦や敵MSを撃墜するための火力が求められていた。

逆に戦術機は光線級によって駆逐された航空機が陸戦のために進化した兵器であり、求められるのは低空での運動性能とBETAの物量に対抗するための継続戦闘能力だ。

そのためMSに比べて装甲は薄くて軽く、火力は兵器としては小口径の36mm弾と近接専用のナイフや長刀などが装備の主流になっていた。

「……剛性は低そうだからあんまり蹴ったり殴ったりはできないな。でもあの小口径のマシンガンなら至近射撃で……」

「ねえ、ユーリー？」

「ん？」

窓から食い入るように戦術機を眺めていたユーリーにリュドミラが声をかける。

「ユーリーがそんなに楽しそうにしているの私初めて見た。ロボットを見て喜ぶなんて、やっぱり男の子なんだね」

「リューツ！」

いつもの子供のフリから完全に素の自分に戻っていたため、不意を突かれたユーリーはうろたえて叫んだ。

「いい加減俺を子供扱いするのはやめてくれよ！俺達、同い年なんだぜ？」

勿論、肉体はともかく精神的には18歳分の年齢差があるはずだ。だがユーリーはリュドミラと話していると彼女からいつも年下のように扱われる事に困惑していた。

外見はともかくユーリーは立派な大人である。それを感じ取って他のどのビャーチェノワもそんな事はしない。大そももこれだけ感情豊かで人間らしい人工ESPをユーリーは彼女の他に知らなかった。

「いいじゃない。だって私達二人は同じ人工子宮で育った双子で、私はあなたのお姉さんなんだよ」

ユーリーの精一杯の主張にも関わらず、リュドミラはクスクスと笑いながら彼の提案を却下した。

同日 同基地 基地司令室

ハバロフスクの国連軍基地司令室は常に清潔に保たれていた。床には塵一つ無く、デスクの上には最小限の書類しか置いていない。観葉植物は常に手入れされ艶々とした葉を茂らせていたし、この部屋の主もまた身だしなみに一部の隙も有り得ない。

伝令の兵士達は報告に来る度に見せられる変わらぬ部屋と司令官の様子にこの部屋の時間は止まっているのではと噂するほどであった。

「ガスパロフ司令、不時着したM i G - 27の収容が完了いたしました！ 機体は中破、左翼跳躍ユニットから火災があったものの防災班によってすぐに消し止められました！」

「よろしい。搭乗していた衛士の容態は？」

「骨折が数箇所に見られますが命に別状はありません。ただ少なくとも2ヶ月は戦線復帰は難しいでしょう」

「そうか……衛士の受け入れの手続きは私がやっておく。君は下がつてくれ」

「はっ！ 失礼します！」

報告を終えた兵士が司令室から出て行くのを確認したヴィクトール・ガスパロフは溜息を吐きながら革張りの椅子にもたれこんだ。

「まさしく大事件だな」

彼には基地司令として国連軍のオルタネイティブ計画監査として、そして共産党の党員として三重の責務が押し掛かっている。3つの組織は時にはそれぞれの利害が相反する事もあり、ヴィクトールはその度にもう若くない体で利害の調整のためにアチコチを駆け回らなければならない。

ふと、彼はもう一人連絡せねばならない相手を思い出して電話を取ると短縮番号を押してある人物の部屋に電話を繋げた。

『もしもし』

「ラフマニノフ教授、私だ。先程の不時着騒ぎの事は知っているな？」

『これは司令殿。勿論じゃ。もつとも助手が人づてに聞いてきただけなので今ひとつ状況は掴めんのじゃが』

電話の向こうのセルゲイ・ラフマニノフ教授は僅かに声を固くして答えた。

教授にとってヴィクトール・ガスパロフ基地司令という男はオルタネイティブ計画遂行のための頼れるパートナーであり、ソビエトと国連から派遣された警戒すべき監視役でもある。

「偵察に出していたA-01の小隊が任務中に光線級にやられた。三機は撃墜、味方機の影になっていた一機だけが辛うじて帰ってきたようだ」

『なんと……！ もうそこまで戦線が近づいていると？』

「ああ、党は戦況の悪化を隠していたようだ。この基地はすでに光線級の射程から大して離れていない立派な前線基地になってしまっていたというわけさ」

『では、わしらいよいよもアラスカへ……？』

「そうだ。情勢は極めて厳しいものと判断される。4個連隊あったオルタネイティブ直属特務部隊A-01はすでに半分まで壊滅。補充を要請しても党が送ってくるのは実戦経験の無いロシア人の士官ばかりだ。もはやハバロフスクに残ってBETAのデータを取りながらなどと言っている暇はない。我々は来年中にタルキートナの基地に移る」

『あそこはまだ建設中ではなかったか？ それに人工子宮の完全移設は一年では無理じゃ！』

「そうだが居住スペースとインフラは既に完成しているので人員の移設自体に問題は無い。そして人工子宮についてだが……恐らく必要無くなる。オルタネイティブ計画の総司令部では人工ESP発現体によるハイヴに突入作戦が無謀だという意見が増えつつあるのだ。向こうは今生産している第六世代を人工ESP発現体の最終ロットにするつもりらしい」

『な、なんという冒険じゃ！ ハイヴ突入作戦が無謀なのは我々のせいではなく現行の戦術機能力のせいじゃろう！？』

”最終”という言葉にセルゲイが大いに動揺して言葉を乱す。人工ESP発現体の生産を止めるということ、それはオルタネイティ

ブ3計画が見切られることと同義であるからだ。

一方ヴィクトール、電話の向こうから響く怒声にも一切顔色を変えなかった。この程度の恫喝で怯むようでは人類を救う計画の監査役など勤まるわけが無い。

「君の言い分もわかる。だがそもそも我々が国連に計画として提出していたのはハイヴ外からのリーディング及びプロジェクト能力によるBETAとの意思疎通だったはずだ。それを計画実行を予定していた第四世代のESPの有効範囲が予定を大きく割り込んだからといって、戦術機適正を付加した第五世代^{ビャーチエノワ}を作るなどという遠回りをするのでは他所から見れば計画は半分頓挫しているように見えても仕方が無い。人類は未だハイヴを制したことがないのだから」

『ぐむむむむ……』

オルタネイティブ第3計画発動後から現在まで、ESP発現体を製造する技術は着実に進歩していると言える。

かき集めただけの第一世代から血統交配による第二世代へ、第二世代から遺伝子操作を行った第三世代、投薬で能力調整を行う第四世代、戦闘力を付加した第五世代、そして高度な催眠教育と選抜を行って飛躍的にESP能力を向上させた第六世代。

そのどれもが最新技術と多額の投資による人類の英知の結晶であると同時にオルタネイティブ計画の中核として期待された能力を発揮できない欠陥品でもあった。しかもここ数年はセルゲイの研究は行き詰まり、第七世代の概念を作るところか生物学的に人間にはこれ以上のESP能力の開発は困難なのではないかという推論も出てきている。

「一応、第六世代が戦術機に乗れる年齢になるまでは計画は続行さ

れる。だが恐らくチャンスは一度きりだ。そこで何の成果も出せなければ世界は別の可能性を模索し始めるだろう」

「……わかったわい。こちらは第六世代と第五世代の育成と観測機器類の開発に全力を注ぐ。機器類は少なくとも5年あれば戦術機に積めるサイズの物が完成するはずじゃ」

電話の向こうで老人ががっくりと肩を落とす様子が伝わってくるようだった。

セルゲイの専門は薬理学や心理学、遺伝子学からESP能力を強化する事であってESP能力を観測したり増幅する装置はオマケの要素が強い。彼の落胆ぶりは押して知るべしといった所だ。

「こちらも期限ギリギリまでは資金面物資面は可能な限り融通してもらえよう努力しよう。少なくともハイヴ突入作戦には最高の状況で挑みたいからな。……時に教授。例の第五世代の双子のミュータントとやらはどうしている？ あなたが名前までつけた人工ESP発現体だ。期待してもいいのだろうか？」

ヴィクトールは資料に載せられた癖毛の少年と長髪の少女の二人の人工ESP発現体の顔を思い出しながら言った。

今まで報告書に載せられた断片的な情報でしかこの二人を知らなかったが、オルタネイティブ3がここまで追い詰められている以上、期待できる要素は一つでも欲しい。

「正直なんとも言えん。姉のリウドミラは単なる優秀なESP発現体だということが確定しておる。だが弟のユーリーの方は脳波の質から普段の言動まで全てが我々の想定を逸脱しておるのだ。」まるで宇宙人^{ベータ}だ”なんて気の利いたジョークを飛ばす研究員もおるくらいにな」

「いくら突然変異といってもそこまで違う物なのか？ たかが子供じゃないか」

『嘘だと思うなら後でビデオを見せてやろう。生まれてこの方ずっと我々の教育を受けているはずの5歳児が教官が説く共産主義の素晴らしさをこっそり鼻で笑っているのを見たときは背筋が冷たくなつたわい。IQが規格外なのか……もしかすると奴の能力はバツフワイト素子によるリーディングジャマーの影響を受けないのかもしれない。とにかく、今のところ分かっておるのはあ奴の思考はリーディングでは読めない事。意識下・無意識下のどちらも洗脳や催眠の効果が無い事。リーディング使用の際の作用に他の人工ESP発現体との類似点が無い事。そしてプロジェクション能力の有効範囲に難があることくらいじゃ』

セルゲイの提示した情報にヴィクトールは息を呑んだ。

「つまり我々のコントロールを一切受け付けない人工ESPであるというわけか？ 由々しき事態ではないか。不確定要素、それも特大の不安要素だ。オルタネイティブ計画は勿論、党にとっても脅威になる恐れがある」

ヴィクトールは無意識の内に国連よりも党を上位に置いた発言をした。

『じゃが能力自体は大変魅力的じゃ。この”もう一つの”ESP能力を解析できればワシらはBETAに対してもう一つアプローチの手段を得ることができる。計画実行のためのまたとない保険になるのじゃぞ。手放せるわけが無い』

「しかし……」

『しかしもしかかしもあるか！ 例えどんな障害が立ち塞がろうとも、オルタネイティブ3を遂行する以外に人類が生き残る道はありえんのだ。ならばその障害がミュータントだろうと悪魔だろうと関係あるまい。わかるだろう？ チェコの英雄さん』

3、「あれが、戦術機……！」（後書き）

しばらく更新を空けます

4、「世界最強の人間だ」(前書き)

お待たせしました。

ソ連最強といえはこの人ですよね！

4、「世界最強の人間だ」

4、「世界最強の人間だ」

1987年 アラスカ州国連軍タルキートナ基地

ユーリー達オルタネイティブ3関係者がハバロフスクからこのタルキートナ基地へ来ておよそ10ヶ月が経った。

アラスカから250キロ南にあるこのタルキートナ基地は世界でも有数の大自然の中に立てられた基地でもある。

赤松やシダといった針葉樹の生い茂る森に加えクリステイアンセン湖、タルキートナ湖に冬には氷河にもなる幾筋もの河川とこれだけでもアメリカ合衆国が制定している国立公園の中でも抜きん出た物を持っているタルキートナだが、この土地を訪れた人間はまず何よりも北米大陸最高峰であるデナリ山に度肝を抜かれる事になる。

デナリ山の標高は6194m。エベレストの標高より2700mも低い、エベレストがチベット高原から3700m程度の比高であるのに対して、デナリ山はふもとの平地の標高は600m程度であり、そこからの比高は5500mに達する。要するに”世界で一番大きく見える山”というわけだ。

最大にして雄大。BETA侵攻によって滅亡しつつあるこの世界でこの極寒の霊峰に山岳信仰を呼び覚まされる人は少なくない。

——だが世界に残った最後の楽園にしてソ連の威信を背負った基地があるこの地、タルキートナはすでにロシアではない。

BETAの侵攻の激化によって自国領内に6つものハイヴを抱え、ユーラシアの領土を維持することが難しくなったソビエト連邦政府がそのプライドや主義主張を投げ打って宿敵であったアメリカから

借りた租借地である。

国連の上級官僚はこの20世紀の”民族大移動”によって、オルタネイティブ計画の本拠地がロシア西部ノヴォシビルスク基地からハバロフスク基地、ハバロフスク基地からタルキートナ基地へと実に11000キロメートルもの距離を移動した事実を見て”国連の総力であるオルタネイティブ計画の後退距離はそのまま人類の衰退を表している”と評したほどだった。

そのタルキートナ基地の滑走路に一台の輸送機が着陸した。

——イリユーシン エー-76改

全長46メートル、最大貨物搭載量47000kg、翼面積300平方メートル。

1971年に開発された本機は輸送機としての速度・高度の国際記録を数多持つソ連の傑作輸送ジェット機である。光線級属種の発生や戦術機の配備、そのうえ近年開発されたアントノフ225ムリーヤに性能面で圧倒的に劣勢ではあるものの、米国にすら購入された実績を誇り、また既に多数生産されて信頼性の高いイリユーシンを戦術機やその他大型兵器の航空移送のために改造することでソ連は需要を確保した。

この鋼の鳥が本国のロシアからこのタルキートナへと運んできたのは一体の戦術機。いや、正確に言えばこの戦術機を操るたった一人を運ぶためにこの機体はベリング海を越えてきたのだ。

機体に設置されたタラップが展開され気密扉が開かれる。すぐさま誘導係、整備兵等この滑走路にいた全ての兵士が集まって半円状に立ち並んだ。

「全員整列っ！！」

軍用の頑丈なタラップをすら軋ませる巨軀きよくに手の甲から覗くほど濃い体毛と髭、巨大な体から生えた腕や足は筋肉でパンパンに張り詰めて今にも軍服の布地を張り裂きそうになっている。

イリユースンから降りてきたのは巨大な熊……ではなくソ連陸軍の軍服に身を包んだモヒカンの男性軍人。

誰がどう見てもデスクワークや後方の任務とは無縁そうな存在だ。かといって前線の歩兵であってもここまで体を鍛える人間はそうはいない。それほどまでに彼の様相は野生的に過ぎていた。むしろシベリアの山奥で熊相手に戦っている格闘家が裏世界のレスラーと言ってくれた方が幾分信憑性がある。

ただしこの男の胸に付けられた勲章の数は凄まじい。陸・海・空・武勲・戦傷・名誉など種類を問わないそれはこの男が身体能力だけではなく優秀な軍人に必要とされる知識や決断力を兼ね備えていることを周囲に知らしめていた。

「ヴォールクの英雄である大佐殿に敬礼！！」

緊張を孕んだ上官の掛け声に合わせて全員が一斉に敬礼を向ける。百近い人数から敬礼を受けたこの男だが怯む様子も無く敬礼を返した。

「国連軍の諸君、出迎えありがとうございます。この基地で将来有望な志願兵達の教官兼彼らが所属するであろう連隊指揮官として出向してきたソビエト連邦陸軍に所属する身だが今回の任務を通して、国際社会に奉仕し、日夜BETAという共通の敵に立ち向かい続ける諸君の一助になりたいと思っている。これからよろしく頼む」

大佐の声は見た目通り野太くそして大きかった。スピーカーなど無く、背後にイリユースンの4発のジェットエンジンが唸りを上げ

ているにも関わらず周囲の全ての人間の耳に届くほどに。

だがその場にいた国連軍兵士達の反応は上場だった。ワツと歓声と拍手が巻き起こる。

悪名高きソビエト連邦の軍人——しかもあの有名な大佐ともなればもつと厳しい人間を想像していた兵士達だが（実際に本人を見て更に悪いほうに想像していた）思ったよりも低い物腰であったので大変に好感が持てたのだ。

大佐に次いでイリユーションからは彼の副官らしきロシア人男性と中年のアジア系男性が降りてくる。

二人が脇に大きなトランクケースを抱えているのを見て、案内係に任命されていた伍長が慌てて前に進み出た。

だが大佐はやはり比較的長身の伍長と比べてもさらに大きく、目を合わせるため伍長は3歩ほど離れなければならかった。

「宿舎までご案内いたします大佐！」

「よろしく頼むぞ伍長！　ところで今日はヴィクトールはいないのか？」

伍長は大佐が誰の事を尋ねているのかわからず僅かに戸惑ったが、すぐに目の前の人物がこの基地の基地司令と旧知の仲であることを思い出した。

「は、はい！　今日はセラウィクで全連邦党大会があるので大佐の出迎えはできないと承っております！」

「そうか……ふん、国連軍に入ってもせこせこ党に根回しとはヴィクトールの奴。チェコの英雄ともあろう人物が随分とつまらん人間になったものだな」

吐き捨てるように大男は言った。だが彼の言葉の後半は殆ど呟くような声だったため伍長の耳に入ることは無かった。

「伍長、予定変更だ。自分に案内はいらない。君は後ろのトルストイ中尉とモリ大尉を宿舍まで連れて行きたまえ。イワン、ケン。お前達は先に行つて荷物を置いてこい」

「ハッ!」「了解しました!」

「え、ええ?」

躊躇無く返事を返す副官二人に対して伍長は困惑気味だった。

何しろ彼に基地内を案内するというのは彼が基地司令から直接受け取った命令なのだ。それにソ連軍人である彼を国連軍の基地で自由に歩き回らせるのは機密上非常に良くない。

彼は8階級差という伍長風情にとつては神にも等しい人物に精一杯の勇気を振り絞つて質問を返した。

「あ、あの大佐はどちらへ……?」

「野外演習場だ。ああ、そこまでの案内も必要ない。場所は分かっている。着陸前に輸送機から見えていた」

「野外演習場!? だ、駄目ですよ大佐。あそこは今は立ち入り禁止です! Aクラス以上のセキュリティ権限を持った人間でなければ近づいただけで憲兵に銃殺されてしまう!」

思わず声が裏返る。

伍長の記憶が正しければここタルキートナ基地の野外演習場は本

日一杯オルタネイティヴ計画直轄の部署が貸切にしていたはずだ。彼自身がオルタネイティヴ計画に参加しているわけではないがその悪名と機密レベルの高さは上官から嫌というほど聞かされている。ホスト国家の軍人とはいえ国連軍所属でない人間、それも赴任してきたばかりでは問答無用で殺されてしまうだろう。

だがザンギエフは伍長の忠告を特に気にした様子も無く飄々と答えた。

「問題無い、権限はあるし、自分がこれから教えにいく子供たちを見に行くだけだ。それにだな伍長、」

大佐がその巨大な体を屈めて自分と視線を合わせる。たったそれだけのことだが、伍長にはアサルトライフルに狙われるよりも恐ろしい事のように思えてブルブルと体が震えだす。

「銃でしか戦えない人間にこの鋼の肉体を持つオレを倒せるわけがない。そうだろうか？」

一方その頃、野外演習場には模擬戦用のゴム製ナイフを振るっている集団がいた。

数は40人といったところか。

年の頃は皆幼い。普通なら軍事訓練どころかミドルスクール小学校に通っていてもおかしくないような年齢だ。

だが現実はその訓練に参加している者は男女を問わず全員がある程度の技量を持ってナイフをふるっており立派な軍事訓練の体を成していた。

「どうしたリユー！？ お前の優等生ぶりは座学だけか？」

「うゝゝゝ！！ ユーリー！ 男の子なんだからもう少し手加減してよ！」

「そりゃゴメンだな。これでお前を倒せば俺のカテゴリファイブワンの全勝記録は達成されるんだ」

双子や他のビャーチェノワ達は皆二人一組で体を開くオープンスタンズでナイフを構えて向き合っている。その全員が黒いタンクトップにミリタリーパンツを着ていて、その服や肌の所々にはゴムが擦れた黒い線と泥がついている所まで一緒だ。リュドミラも同じ格好をして辛うじて許されるおしゃれとして長い銀髪に赤い飾り紐をつけていたが、それもいまや汗や泥汚れで見るも無残な姿になっている。

だがしかし、一人だけその中で唯一ユーリーにだけは泥も黒い擦過傷も無い。

彼は大人気なくも前世の経験や技術をフル活用して他のビャーチェノワの子供たちを圧倒していた。

「ふんふんふんふん♪」

ユーリーは余裕綽々といった様子でステップを踏みリュドミラの周りをグルグルと大きく円を描くように周り始める。

ペースを握られることを恐れたリュドミラはユーリーの足が地を離れた瞬間を見計らってその喉元にナイフを突きつけた。

「せいっ！」

可愛らしい掛け声とは裏腹に大人顔負けの鋭さをもった突きがユ

ーリーに繰り出された。

渾身の一撃、だが彼はそれを首を傾げるだけでかわし、逆に突き出された腕を取って動きを封じる。

リュドミラの腕を引き戻そうとする動きにユーリーが逆らわずに押し出すと、たたらを踏んで体勢を崩した腹に横一線。

「はい、オシマイっ」と

「^{あつ}熱っ!!」

ゴムの摩擦が生み出す熱にたまらずリュドミラがナイフを取り落としほぼ一方的な攻防のみで訓練は終了となった。

「ふっ、話にならんな」

「う~~~~っ」

格好つけて髪をかきあげながら、一度血振りをするように大きくナイフを振ってから鞘にしまうユーリー。もちろん意味は無い。

その間リュドミラはペタンと座り込んで、深い海のような瞳をウルウルと潤ませながらタンクトップをめくりあげ己の怪我を確認していた。

「ひどいよーユーリー……。お姉ちゃんのお腹に火傷の跡が残ったらどうしてくれるの?」

タンクトップをめくりあげ子供っぽい腹と小さな臍を晒しながらリュドミラが言った。

その白い肌には確かに赤い腫れがついている。

「あらら蚯蚓腫れになってら。医務室で薬をもらってきてやるよ」

「ええっ！？ い、いいの！？ ユーリー、なんか今日は優しい」「今日の担当医はニコライのオッサンじゃなくてミス・フレデリカだからな」

「えっ」

「丁度いいや。最初はお前の火傷の話から始めて俺の愛の言葉で今日こそミス・フレデリカの心に火をつけてやるんだ」

「それ完全に自分の都合だよね！？ 私への愛は無いの？」

ショックを受けたリュドミラが激しく抗議した。

「八歳児に興味は無い」

「それはフレデリカ先生も同じだと思う……」

ハアと溜息を吐くリュドミラ。

彼女と彼女の双子の弟の間ではこんなやり取りは珍しくない。

相手の女性の名前と口説き文句のフレーズこそ毎回変わるものの、ユーリーは物心ついた時から何かにつけて大人の女性に話しかけて口説き落とそうとする困った習慣があった。

まだ10にも満たない子供ということもあって大抵の場合は向こうが笑って流してくれるのだが、稀に戦場帰りまれで”溜まっている”衛士や恋人や家族を亡くして自棄を起こした人などがフワフワの巻き毛と空のように澄んだ碧眼を持つユーリーの天使のような容姿にトチ狂って自室に持ち帰ろうとする事件ケースが起こる事もあったりするので油断ならない。

幸いどの事件も基地司令直属の憲兵のおかげで未遂に終わっているが、そのせいでユーリーは基地内で早熟な子供として有名になり彼の双子の姉としてリュドミラの名前も広まる結果となってしまうていた。

「とかいい加減ナンパなんてやめてよ！　あなたが女の人に声を掛ける度に私まで恥ずかしい思いをするんだからね」

「なあに皆最初は恥ずかしいもんさ。でもいいじゃないか。もし俺が成功すればお前に義妹ができることになるんだ。年上の義妹なんてなかなかもてるもんじゃない」

「三倍とか四倍も年の離れた義妹なんて嫌だよ……」

溜息と共に弟に愚痴を漏らすリュドミラだったが、ふと気づくと辺りが静まり返っている。

「あれ、どうしたのかな？」

「軍曹殿が戻ってきたんじゃないか？」

だがユーリーの予想は外れていた。

その人物はとんでもなく大きかった。成人ばかりの整備兵に囲まれてすら頭二つ分は抜けていた巨体は子供ばかりのビャーチェノワの中にあることで余計に強調され、もはや映画か特撮の撮影風景にしか見えない。

ミドウェイエチ
「熊……いえ、巨人？」

「いや……、そうじゃない。あいつは……」

ユーリーがもつと良く見ようと目を半眼にする。

聡明なリュドミラですら人外と見紛うほどのモヒカンの巨漢――
さきほど滑走路に降り立った大佐がそこにいた。

その襟に輝く階級章を確認するとリュドミラは慌てて直立敬礼の
姿勢をとる。

ビャーチェノワ達はいつのまにか訓練を止めて演習場に入ってきた人物の方へ注意を向けていたが、逆にその人物は唯一自分に注意を向けなかったユーリーとリュドミラの方を見ていたのだ。

「ほう！ 随分と気の抜けた奴がいたものだ！ 訓練中にお喋りとは……それともこれは余裕の現れか？」

「申し訳ありません大佐殿！」

リュドミラは脊髓反射的にそう答えた。

――軍隊において階級は絶対。

リュドミラ達人工ESP発現体第五世代は全員、生まれたときから軍属である事を叩き込まれている。なぜなら彼らの命は国連と党政府によって生産された”備品”であり来るべきハイヴ突入によるBETAとの対話のために消費されるべき”兵器”なのだから。

備品や兵器に人格はいらない。

兵器に必要な知能とは即ち、命令に従う。規律は守る。己を鍛え、敵と戦う。

実際、生後間もなく始められた英才教育のおかげでアドニー姉弟以外のほぼ全ての子供は命令に従うだけの従順なロボットのように育っていた。

そうリユドミラともう一人を除いて。

「後者であります、大佐殿！」

「え？」

声はリユドミラの真後ろから聞こえた。

（ユーリー！？ 何を？）

「自分は彼ら39人と戦って無傷で勝ちました。既にこの訓練に意味はありません！」

「ほう。貴様、名を名乗れ。どこの阿呆か聞いてやろう」

敬礼したままとんでもないことを言つてのけるユーリーを見て、コメカミを引き攣らせ歯を剥き出しにした巨漢がリユドミラのすぐ側を通り過ぎた。

士官教育を受けた人間はこういう時に部下に舐められてはいけないという事を知っている。軍隊とは完全な縦社会。だからこそ階級を力で超えようとする輩は徹底的に叩いて恐怖を覚えこませる必要があるのだ。

大佐の怒り顔は大人どころかどんなに肝の据わった軍人でも泣いて許しを請う様な物だが、ユーリーは敬礼したまま涼しい顔を崩すことはなかった。

「ユーリー・アドニー・ビャーチェノワであります！ 階級・所属はまだありません！」

「なるほど。正規兵でも訓練兵でもないから訓練をサボってもいいと考えたということか？」

「いいえ、自分以上に強い人間がいないと考えたからです！……ただもし今すぐ目の前に自分に釣り合う程の訓練相手が——例えば大佐殿のような方が現れてくれれば、話は別ですが」

にやりと小馬鹿にしたようにユーリーは笑った。

「——ッ！！？」「」

ピキツと音を立てて二人の間の空間に亀裂が走る。
ビャーチェノワ達は凍りつき、ユーリーの発言にリュドミラは危うく卒倒しかけた。

「……………正気か？」

大佐の表情は先程と打って変わって能面のようにになっている。彼の冷静な軍人としての部分がこの子供の挑発の意味を嗅ぎ取るうとしていた。

「自分が正気かどうかは一人では証明できません、サー！」

「誤魔化^{しまか}しい。オレには本音で喋れ。目的は何だ？ 自殺志願者なのか？」

齢8歳。こんな子供が歴戦の大男に挑んでいる。信じられない光景だった。

この巨漢の身長は214cm。対して目の前の子供の身長は130センチ強、リーチだけでも1メートルは違う計算だ。体重は恐ら

く5倍近く差があるだろう。体の厚みは倍以上違うし、筋肉のつき方にいたっては次元違いと言ってもいい。比べるべくも無い程二人の身体能力には差がある。

そしてここまで体格差があれば例え訓練であつても命を失う恐れがあるのは明白だ。

「かしこまりました大佐殿！……ゴホン、じゃあ熊野郎！お前の筋肉でできた脳みそでもわかるように言つてやる。俺の目的は、お前と戦つて、勝つ事だ！」

だがザンギエフの巨体に、彼の放つ圧力にもユーリーは決して怯まなかつた。

それどころかさきほどのザンギエフと同じように歯を剥きだしにして獣のように吠え立てた。

「……いいだろう。死んでも後悔するなよ」

大佐は静かにそう言うと言つた勲章のついた上衣を脱ぎ胸に着けていたホルスターとトカレフを外す。ザワザワと騒ぐビャーチエノワ達の中の一人が放り投げられた軍装をどうすればいいか分からずオタオタと慌てている。

その隙にリュドミラがユーリーの元に駆け寄つてその胸倉を掴んだ。

「ユーリー！何を考えているの！？」

「何つて……見てたんだろう？上官に喧嘩を吹っかけたのさ」

ユーリーは答えたがその目はリュドミラを見ていなかった。彼の意識は既に敵であるザンギエフに向けられている。

「だから！　なんでわざわざあんな強そうな人に吹っつけたのかって聞いているのよ！」

「チャンスだからさ。リユー、お前はあのおっさんが誰か知ってるか？」

「え？　そういえばまだ名前は……」

「座学で習っただろう？　あのモヒカン間違えようがない。ヴォールク連隊の生き残り、ソ連の赤きサイクロン、ミハイル・ザンギエフ大佐だ」

ハツとしてももう一度大佐の方を振り返るリュドミラ。若干年を食ってはいたが確かに写真で見た事がある。

「まさかっ！！　本当にあ、ああああああの、ザザザザザザザザンギエフ大佐……ッ！！？」

リュドミラの素っ頓狂な声が演習場全体に響き渡った。

——ミハイル・ザンギエフ。

彼の名前を知らぬ軍人はソビエト連邦は勿論、米国や西側諸国にもいない。

元々はアマチュア格闘家であり、モスクワ大学を卒業した知識人インテリゲンチヤだったザンギエフは20歳でソビエト連邦陸軍に入隊し、そこから人間離れした能力を開花させた。彼が今日まで対BETA戦線で挙げた戦果と授けられた勲章・感謝状は数知れず、10年に一度しか授与されないレーニン勲章、ソ連英雄勲章、国連対BETA勲章に

加えなんとお互いに仮想敵国であるはずの米国の大統領からも勲章を授けられた程だ。

ザンギエフの名前が初めて知られたのは1978年に東欧州で発令された大反攻作戦・パレオロゴス作戦——NATO・ワルシャワ条約機構連合軍400万人という人類史上最大の戦力で持つて臨んだソ連領ミンスクのハイヴ攻略作戦である。

二ヶ月に及ぶ激戦の末、全ヨーロッパの軍隊を囿にして当時22歳で中尉だったザンギエフが所属していたソビエト陸軍第43戦術機甲師団・ヴォールク連隊はついにミンスクハイヴの最奥部である反応炉への到達に成功する。

だがBETAの圧倒的物量の前に連隊に所属していた突入戦術機部隊27個小隊+戦闘車両240両、機械化歩兵500名、歩兵1800名、工兵2300名の内ハイヴ内から生還したのは30分毎にデータを運び出した衛士14名のみ。

しかもその14名すらハイヴ攻略を断念後の撤退戦で戦死し、結局生き残ったのはザンギエフただ一人だったのだ。

衛士達にとって何よりも貴重なハイヴ内の構造データを持ち帰った彼は世界中で英雄となったが、話はそこで終わらなかった。

後日ソ連が公開したザンギエフ大尉の戦闘データには誰も想像すらしなかった物が記録されていたのだ。

ハイヴ突入から三時間に及ぶ激戦の末、反応炉を制圧したザンギエフは最奥部の反応炉のデータを地上に送り届けるべく連隊長から地上まで単独での帰還を命じられる。

残り少ない弾薬と推進剤をどうにかやりくりして、門まであと300メートルのところまで到達したザンギエフ。だが地上を目の前にして突如、一往路では存在しなかったはず《……………
……》の横杭からBETAの奇襲に会い乗機であるMiG-21

バラライカが大破。ペイルアウトし強化外骨格を身に纏うも100メートル進むこともなく闘士級の攻撃を受けて強化外骨格は機能停止してしまう。

だが彼は諦めなかった。

戦術機を失い、強化外骨格も、アサルトライフルの弾丸さえも使い切り全くの徒手空拳になったザンギエフはハイヴのデータを収めたメモリを飲み込むと襲い掛かってきた兵士級をなんとスープレックスで撃破。

その後もラリアットで、チョップで、キックで。360度あらゆる場所から次々と襲い掛かるBETAを全て生身で退け続けたのだ。結局異変に気づいた地上部隊が駆けつけた頃には彼の周囲には28の兵士級と10の闘士級。そして一体の戦車級の死骸が転がっていた。

「馬鹿げた話だよな。熊やライオンですら銃無しじゃ倒せない人間がプロレス技だけでBETAを倒したなんて。でも対BETA戦争での戦果のごまかしや捏造は国連規約で厳重に禁止されている。おそらく真実だ」

「じゃあザンギエフ大佐って……」

「ああ、世界最強の人間だ。……いや、人間かどうかかなり怪しいけど」

頷く弟を見てリュドミラは眩暈めまいがして再び倒れそうになった。

目に入れても痛くない可愛い弟が挑発した相手、それがよりにもよってあのザンギエフ大佐！

「なんてこと……」

「ああ、なんて幸運だろうな。思いもしないチャンスだ」

「チャンス？」

「おいおい、しっかりしろよりユー。これはチャンスだぜ！ あれだけ名前の売れている人物だ。ソ連軍どころか絶対に党政府やアメリカ合衆国にもコネがある。そんなスゲー奴をただの子供が挑発して、しかも倒して見せれば日和見主義のガスパロフ司令は絶対に係者を放っておかない。多分社会のゴミが送られるような最前線かどこか一生出て来れないような後方に飛ばされるはずだ。そうなたらもう監視はつかない。簡単に逃げ出せる！」

「え、えゝ？ そうかなあ……」

リュドミラは疑わしげだった。

果たしてそんなにうまくいくだろうか？ という懷疑心が表情にありありと浮かんでいる。

「大丈夫だつてば。アイツが人外なら俺は新人類だ。^{ニユータイプ}絶対に勝てる。問題は俺達二人が同じ場所に飛ばされるかどうかだけど……まあその所はどうにかなるだろう」

「……ユーリーはそんなにここがイヤなの？」

どこか残念そうにリュドミラは言った。

彼女は自分の弟が以前からこのオルタネイティヴ計画から抜け出したがっていることを知っていた。

だが少なくともリュドミラはハバロフスクやタルキートナでの生活はそう悪いものではないと思っている。確かにこの幼い身柄には軍事訓練は辛いし、ESP開発カリキュラムは時に激痛を伴うこと

があつたが、それ以外では一応大事にはされているし人類生存のための希望の星として期待されるのは悪い気分ではない。それにここには大勢の兄弟姉妹達もいる。

だが生憎ユーリーはそんな感傷など持ち合わせていなかった。

「ああ、ここは最悪だ。反吐が出るね。俺はこんなところでモルモットか特攻兵器になるのなんてゴメンだ。お前は残りたいのか？」

「……ううん、私はユーリーが出て行くなら一緒に行くわ」

リュドミラ・アドニー・ビャーチェノワにとってユーリーとは自分がかげがえのない”もの”を与えてくれた無二の存在。

だから彼女にとって双子の弟と一緒にいることは人類の未来よりも兄弟姉妹達よりもずっと大切な事だった。

5、「ウウウウーラアアア!!!」

5、「ウウウウーラアアア!!!」

***1987年 6月12日 アラスカ州国連軍タルキートナ基地
野外演習場***

決意を決めた二人の子供の間を大きな影が遮った。

「作戦会議は終わったか？ オレから逃げるなら今のうちだぞ」

「その言葉はそっくりそのまま返ししてやる！ 逃げるなら今のうちだぜ。何せ俺のお姉様は今日の熊殺しの記念にお前のダサイモヒカンを持って帰るつもりだからな」

「何イ！？ キサマ、言うに事欠いてオレのモヒカンを！」

「……………」

モヒカンなんていない。

リュドミラはそう思ったが、それを言うとザンギエフ大佐のプライドをさらに傷つけるような気がしてどうにも言葉に出せなかった。

「許さん……！」

大人気なくも挑発に乗ってゴムナイフをなぎ払うザンギエフ大佐。恐ろしいことに軍用ナイフを模しそらの包丁よりずっと大きいはずのゴムナイフですら彼が持つとペーパーナイフ以下に見えてしま

う。

初撃をヒラリを後ろに飛んでかわしたユーリーは己もナイフを抜き取ってトントンとフットワークを刻み始める。

その淀み無い動きを見てザンギエフは目を細めた。

人工ESP発現体には遺伝子的に知能や身体能力にある程度強化が施されている。第五世代であれば身体能力の強化は特に顕著なはずだが、だがあくまでそれはESP能力のオマケであり、軍事・催眠教育と組み合わせる”成人すればオリンピック選手間違い無し”という程度でしかないはずだ。

だがユーリーが持った技能はそれだけではない。

彼には前世で3年近く地球連邦軍に在籍していた経験があり、この世界には無い地球連邦軍流の軍隊格闘技を修めている。実はMS戦闘の技能こそジャミル・ニートに劣ってはいたが、前世のユーリーは個人格闘から作戦立案、果てはMS整備までなんでも優秀にこなせる希少な万能型の軍人だったのだ。

ザンギエフの思考を待ちに入ったと見たユーリーは滑るように巨体の懷に飛び込む。リーチの差から一方的な先制攻撃を取れたはずのザンギエフだがここはあえて懷まで招き入れる。

そして地上すれすれからザンギエフの胸元までユーリーのゴムナイフが振り上げられる。同じくナイフでそれを受け止めるザンギエフ。

だがユーリーにとってそこまでは織り込み済みであった。

「せあっ！」

風を切る音とともに右足が振り上げられると、ユーリーのブーツ

の爪先がザンギエフの股間にめり込む。

爪先に確かな手ごたえを感じると続けざまにナイフの柄で筋肉に覆われたわき腹を強打、周囲に肉を打つ音が響く。

そして離れ際に背を仰け反らせるとバク転しながらのサマーソルトキックでザンギエフの顎を蹴り抜き、そのまま二回転三回転と華麗に繰り返し距離を取った。

「玉無しになった気分はどうだ、熊野郎！ 訓練だから急所を狙わないとも思ってたか？」

その圧倒的な戦闘力に周囲のビャーチェノワ達がどよめく。

たったの一瞬、一度の攻防で彼は屈強な大佐の急所を三つも仕留めたのだ。

訓練時の動きですら捉えられなかった子供たちは改めてユーリーの突き抜けた強さを実感させられた。

「……………」

中指を突き立てるユーリーに対してザンギエフ大佐は身動き一つしない。

「おいっ、気絶してるのか！」

「……違うわ。あの人、ユーリーの攻撃を受けても全然動かなかった」

傍から見ていた分、正確に攻防を把握していたリウドミラが呟いた。

反応したのは最初のナイフの攻撃のみ。それ以外は悶絶どころか身を守ることも避けるようとすらしていない。あの瞬間、ザンギエ

フはまるで山のように不動だった。

その静けさにさすがに不審に思ったユーリーが再び動こうとした時、不意にザンギエフが呟いた。

「……見たことの無い動きだ。少なくとも我が祖国^{ロシア}や国連軍がカリキュラムで教えている物とは違う」

「まさか、耐えられるはずがない！」

ユーリーの声が驚愕に染まる。

防がれる事を前提としていた最初の一撃はともかく後の三連コンボはスピードも体重の乗りも申し分の無い会心の一撃だったはずだ。特に股間は男の共通にして最大の急所。プロテクターでも入れている話は別だが、爪先の感触は確かに二つの玉を捉えている。

「ふん。このオレの鋼の肉体に、お前の子供遊びなど効くわけがないだろう。私がストリートファイトで世界中を回っていた頃は車やレンガブロックを素手で砕くような連中を相手にしていたのだぞ」

「ス、ストリートファイトお〜？」

「そうだ、オレは世界中の軍人やマフィア、格闘家達と戦ってきたが、そんなオレでもお前の使う”軍隊格闘技”は見た事が無い。蹴りは日本のコブドーでナイフの扱いはイスラエルのベニタリに似ているが……そもそもどちらの格闘技もほとんど知られていないはずだ」

ギクリと体を強張らせるユーリー。

地球連邦軍の制式格闘術は文字通り世界中の格闘技をミックスし

て作られている。ザンギエフの指摘した通りその中には世界でも有名だった日本のジュージュツやイスラエルのベニ・タリ等も含まれているが、日本のジュージュツが柔道として世界でブームになったのはユーリーの世界で第二次大戦後の冷戦末期、イスラエルのベニ・タリも自国の特殊部隊以外に教えるようになったのは宇宙コロニー建設以降である。

当然、国連軍基地とはいえこんなアラスカの片田舎に何人も数少ない格闘技経験者がいるわけが無い。

「これは、お……オリジナルさ！ 名付けてユーリー式熊殺し！」

「おもしろい。これが終わってもしお前が生きていたら貴様、その格闘術をオレに教える」

ザンギエフがニヤリと笑う。それはまるで新しいおもちゃを見つけた獣のようであった。

「今更条件をつけようつてのか？ でもいいぜ。その代わり俺が勝つたらお前に一つ仕事をしてもらう！」

負けた人間は勝った人間に従う。極々単純で子供でも解るルール。突然の提示だったがユーリーにとってはまさしく望むところだった。

「ほう、なんだ？」

「すぐわかる。なぜなら——」

”俺が勝つからだ”という言葉を切ったユーリーが再び、ザンギエフの足元目掛けて飛び込む。ただし今度は先程の突撃よりもずっ

と低く早い。

身を屈め地を這う蛇のように走るユーリーは腰を極限まで落として走る。彼の視線はザンギエフの膝どころかスネを捉えるほどだった。

——確かにユーリー・アドニー・ビャーチェノワの体術はザンギエフには通じない。

一体どんな鍛え方をしているのかは知らないが、筋肉の薄いわき腹も、脳震盪狙いの顎も、それどころか露出した内臓と呼ばれる金的への攻撃すらザンギエフにはダメージが通らなかった。

まだ眼球は試していないが、さすがに眼球は身長差がありすぎて狙うのは難しいだろう。

ただの八歳児でしかない今の身には先ほどの三連コンボこそが切り札にして最大攻撃力だったのだ。

ナイフどころか拳銃ですら効果の怪しいザンギエフ自慢の鋼の肉体、だが今ユーリーの手元には彼を妥当しうる唯一の武器がある。

それがこの黒い軟質ゴムでできた模擬ナイフ、これならば自分の力不足も相手の恐るべき耐久度も関係ない。ただ斬って相手の皮膚に黒い線を残せばそれで有効と”判定”される。

ユーリーとしては当初の目的するために体術を絡めてザンギエフを文字通りコテンパンに叩きのめしてやりたかったのだが、勝てば相手に条件を突きつけられるのならもはや遠慮は不要だと判断した。

人差し指と中指に挟んだナイフが大きく弧を描き大男の足首に迫る。その攻撃はナイフで受けるには余りに低く、蹴りで迎撃するには余りに早すぎた。

故にザンギエフは

「なッ！ どこへ——！？」

飛んだ。

直上へ、ユーリーにすら感知させないほど少ない予備動作で跳んでみせた。

それが視界の低いユーリーには消えて見えたのだ。

「悪いがしゃがみ攻撃には慣れている。オレを倒したければもっと鍛えるか、ヨガが気功で飛び道具を習得するんだな」

影を見て、声を聞いて、ザンギエフの巨体が頭上から降ってくる事を察知したユーリーは両手を獣の前足のように使い、その進路を直角に変える。

殆ど同時にユーリーの顔のすぐ側の地面を二本のブーツの砲撃が挟っていった。

「ぐうううー！！」

今の一瞬、ユーリーの判断が少しでも遅ければ、彼の頭は今頃熟れたトマトのように潰されていただろう。

だがそれは攻撃ではない。

着地より一拍遅れてザンギエフの拳が鉄槌のように振り下ろされる。

ユーリーにその拳は見えなかったが、立ち上がろうとしていた彼は脊髄に氷を流し込まれたような感覚を覚え、咄嗟に全身を砂まみれにして転がりながら鉄槌の着弾点から己の体を逃した。

再びの地面が割れる音と大量の砂埃が舞い上がる。

衝撃波は離れようとしていたユーリーの体を吹き飛ばし、唯一の勝機であるゴムナイフを彼からもぎ取った。

「ユーリイイイ!!」

今の攻防の微妙な一瞬を捉え切れなかったリュドミラが己の半身を失う恐怖に耐え切れず叫ぶ。

（——大丈夫だ、リユー！俺はまだやれる）

砂埃の中からリュドミラはユーリーの”声”を受け取って安堵する。

モタモタする間もなくユーリーは立ち上がると、ザンギエフをかく乱すべく再び走り始めた。

（けどなんて……なんて奴だ!）

あの巨体で、あの姿勢で、あの高さまでジャンプなどそうそうできるものではない。

そもそも自分の攻撃は体格差とスピードを最大限に利用した奇襲攻撃だったのだ。地面すれすれの攻撃は身長2mのザンギエフからすれば限りなく視認しにくいはずだし、ナイフは指で挟むことで限界までリーチを伸ばしていた。一体どれほど戦闘経験を積みめばそんな攻撃を察知できるようになるというのか。

そして何よりもあの馬鹿げた拳の威力！

（冗談じゃない！ あんなの、一撃でももらったら死んじまう!）

どうにかナイフを見つけて立て直さなければ、と考えた矢先に再

び直感が働く。

丸太のように太い足がソバットとして、きわどく身を逸らしたユーリーの喉元をかすめていった。

「今も見えなかったはずだがな。それがリーディング能力という奴か？」

冷や汗が噴出す。

なんとか声が震えないようにユーリーは己を奮い立たせた。

「……はっ！ アンタなんかリーディングはもったいないぜ！
けど……そんなに知りたいのなら教えてやる。ESP能力の凄さって奴をさあ！」

全ては自由のため。

残る勇気と知恵を振り絞って三度ユーリーは駆ける。今度は両手をまるで眼前で交差させて正面の守りを固めていた。

「ぬかせ、超能力なんてもので倒せるほどこの鋼の体は甘くはないわ……！」

だがザンギエフも今度は立ったままではなかった。先ほどと違い十分に身を屈めて今度こそユーリーを仕留めるべく左足を顔面へと繰り出す。

両手ごと顔を潰す算段のそれをユーリーは地を蹴り両手を振り下ろして、ザンギエフの足に飛び乗る事で攻撃を回避した。

「器用な奴っ……！」

足首を蹴って太ももへ飛び乗る。左右からザンギエフの両手が迫

るが、そこから更に胸板と肩を蹴って空中へと飛ぶことで死地から抜け出すユーリー。

高度は実に地上から4メートル。先ほどの地面を這う攻撃とは逆に今度は視界は鳥になったかのように広く、見上げるばかりだったザンギエフの巨体全てを収めている。

だが、彼の目的はザンギエフの攻撃を回避することだけではない。

「そこからどうする気だ！？ 膝か、目潰しか？ オレには効かんぞ！」

「だったら！」

体術は効かない。そんなことはわかっている。ユーリは素手では勝てない。

それは必須条件。”ユーリー・アドニー・ビャーチェノワの勝利にはナイフが必要”

(そのためには……『リユー！！ 今だ！！』)

跳躍しザンギエフの頭上へとユーリーはその手を天へと伸ばす。その先には存在しないはずの三本目のゴムナイフがあった。

「なんと！？」

ザンギエフの顔が初めて驚愕に染まる。

この時点で、ユーリーのナイフはザンギエフの遥か後方にある。ユーリーはその事を知らないがザンギエフはそれを確認していた。ザンギエフ自身も己のナイフをしっかりと保持しておりちよつとやそつとの事で奪い取るのは不可能だ。

そこまで考えた所でザンギエフは己の中にあるESP能力者のも
う一つの情報を思い出した。

——プロジェクション能力。それは言葉を交わさなくてもイメージ
で物事を他者へと伝える異能。

視線だけを巡らせれば先ほど彼が姉と呼んでいた少女が投擲し終
えた姿勢で固まっている。

この齡にしてなんとという発想力か、とザンギエフは心中で唸った。

もしナイフを持たず無策のまま突っ込んでいたならば、彼はこの
後チャンスも無いまま問答無用で肉塊になっていただろう。

もし最初からナイフを持っていれば自分は警戒し、少しずつダメ
ージを与えながらやはり彼を殺していただろう。

ザンギエフはその巨体とファイティングスタイルゆえに頭上から
攻撃を苦手としている。意図してかは知らないがこの子供はその能
力で自分の姉に最適なタイミング、最適な形で必殺の武器を供与さ
せることでゼロだった可能性を再び己の側へ引き戻したのだ。

だが

（惜しい、実に惜しいな）

若干8歳にしてここまでの能力を持つ少年に詫びる。

この戦いを終わらせてしまうのが惜しい。

自分の手の内を全て見せられないのが惜しい。

そして何より、人類の救世主たり得る子供をこんな所で潰してし
まうのが惜しい！

（悪いな。オレは戦士には手を抜かん。それに祖国のために死んでいった者達のために、こんなところで己の名前に土をつけるわけにはいかんだ！）

ザンギエフは体を大きく^{ねじ}振り、右腕が砲丸投げのように大きく引き絞られる。ザンギエフが空の敵へ相対する最優の選択肢にして己の代名詞でもある技を放つための前準備だ。

それとほぼ同時にユーリーの手がナイフに届いた。

——ウウウウウウウウウウウウウ

「取った！」

ユーリーがはつきりとした声でそう叫んだ。

ビリビリと震える空気と共に両手を大きく広げたザンギエフの体が^{たいかん}幹と^{じくあし}軸足を中心に回転を始める。

ザンギエフが好んで使うのはロシアンプロレスとアメリカンプロレスの技。だが少なくともこのような技はどちらの格闘技にも存在しない。いや、存在したとしてもまともに扱える人間がいるわけがない。

空気を巻き込み粉碎する様子はまさに竜巻。それは世界に一人。ただミハイル・ザンギエフ一人だけが扱える技。

”ダブルラリアット”

「ウウウウー——ラアアア——！！！」

——この時点で実はユーリーは勝利を確信していた。

彼にとってダブルリアットは未知の技だが、腕を振り回すこの攻撃は少なくとも真上にいるユーリーにとって脅威にはならない。

だが

（な……なんだ！？）

徐々に、僅かずつユーリーの体が吸い込まれていく。

真下に、ではない。地面に対して斜めに。弱点であるはずの頭上から体勢を崩し、外側の必殺の暴風と貸したザンギエフのダブルリアットに向けて。

（吸い込まれる——ッ！！　これがザンギエフ大佐……赤きサイクロンだったのか！？）

逃げられない空中。

全く自分の拳動を操作できないユーリー。

迫り来る巨腕リアットが己に触れる直前、銀色の流星のようなナニカが間に飛び込んできたのが見えた。

（だめだ、殺される——ッ！？）

『
』

そして衝撃。

ガッン《……》！　という交通事故そのものの鈍い音とともにユーリーの体は再び大きく吹き飛ばされ、土と砂を撒き散らしなが

ら体はボールのように地面を跳ねて転がった。

「あつ……ぐつ……」

地に伏せてブルブルと震えるユーリー。
立ち上がろうとして、失敗する。

（動ける……？ 俺、生きてるのか？ でも……なんだ？ 何かが……無い）

生きているはずだ。だがユーリーの中には先ほどまであった何かが無い。

震えながら、確かめるようにゆっくりと身を起こす。

出血は無い。感覚もある。五体満足で五感も正常。

そして今は四つんばいの状態だが足の力を戻りつつある。

（だったら……この喪失感は何なんだ？）

フラッシュバックする激突寸前の光景。

あの瞬間、何かが……誰かが自分を守ってくれた。

それは誰か。

生憎、この世界で自分を守ろうとしてくれる人間などユーリーは一人しか知らなかった。

「リ、リユー？ どこだ、リユー？」

声をかける。思えば彼女と過ごした八年間、名前を呼んで答えが無かったことなど一度も無い。

だがいつもの鈴を転がしたような耳触りの良い声は返ってこない。

目に付いた地面の血痕。

震えながらその跡を追えば、そこには銀の髪を血に濡らした子供が身動きすらせずに倒れていた。

銀髪碧眼の子供ならばこの演習場には沢山いる。だが一人だけ、その一人だけは絶対にユーリーが見紛うはずがない。

「おい、リユー……ねえさん？」

リュドミラがうつ伏せに倒れている。

長い銀髪は血に濡れて斑まだいになり、深い海のような瞳は閉じられて、子供らしい笑顔に溢れていた顔かんはせは今人形のように生気がない。そして血溜まりは今この瞬間にも広がって彼女を死の底へと飲み込むうとしていた。

「姉さん、姉さん!!」

（まさか……そんな！　こんなはずじゃ……—　こんなはずじゃなかった《……………》！）

「おい、担架だ、担架！」

「ミス・フレデリカがニコライ先生を呼べ！」

周囲のビャーチェノワが俄かに慌しくなるがもはやユーリーの耳には雑音のようにながら聞こえない。

地面を這うようにしながら恐る恐るリュドミラの元へ向かう。

先ほど以上に体がブルブルと震える。

こんなはずではなかった。

深い後悔が冷たい氷の刃のようにユーリーに突き刺さる。

自分は強いはずだ。一人で、何でもできる。

鍛えた体、知識、そして超常の存在であるニュータイプなのだから。

前世からずっとそう信じてきた。だからあの太佐に喧嘩を売った。

どうにかなる。きっと勝てるはずだったから。

だが、あの瞬間。

万策尽きて諦めた瞬間

『（だめだ、殺される——ッ！？）』

自分は叫んだのだ。

『助けて——！』

無意識にプロジェクション《……………》を使って、ただの8歳の少女に《……………》助けてくれ、と叫んだのだ。

（俺は……………守ってもらったのか！？ 20年以上も生きてたつてのに、ニュータイプなのに……………こんな小さな子供に守られたのか！）

華奢な、たった8歳の彼女の体。自分で壊してしまいそうで彼女

に触れるのが恐ろしい。

だが今触れなければリュドミラはの意識はどこかに溶けたままと二度とこの体に戻らないような気がする。

彼女を抱き上げ、手に血のぬめりを感じた時、ユーリーの中で何かが切れた。

「姉さん！！ 目を開けろよ、姉さああああああん！！」

リュドミラの肩を揺さぶって目を覚まさせようとするユーリー。だがその寸前に太い指に自分の肩を掴まれたユーリーは反射的にナイフを構えリュドミラを庇いながら振り返る。

背後にいたザンギエフはあくまでも臨戦態勢を崩さないユーリーを見て溜息を吐きながらいった。

「おい、小僧、もういいだろう？ 身も口も随分と軽いようだが、キサマの攻撃は俺には通用しない。オレに何をさせたかったかはしらんが、どうせ碌でもない事だろう？ その娘もお前を守った以上は命を賭けてそんな事をして欲しいとは思っていないはずだ」

「碌でもない事……だと？」

この時、ザンギエフは一つ思い違いをしていた。ユーリーの願いは単なる子供の我がままではない。

ユーリーの望みは自由を得ること。それは今生だけではない前世から思い続けてきた悲願でもあった。

（自由……俺はなんとしても自由が欲しいんだ！

好きな所に行って、好きな職業について、好きな女と手を繋いで、

好きな死に様を選ぶ当たり前の自由！ 殺し合いも実験台ももう
沢山だ。他の奴が当たり前のように持っている物……それが欲しい
ってそんなにいけないことなのかよ！

「碌でもない事だ！？ …………… おおおおおおおおおおお
おおおおおおおお！！！！ ミハイル・ザンギエフ……ッ
！！」

闘争心に猛る獣の遠吠えのような、それでいて慟哭へうきつそのもののユ
ーリーの咆哮ほうこう。

腹の底からこみ上げてくる熱いマグマのような感情を目の前の男
に叩きつける。

そのマグマは彼の感応能力ニユータイプによって彼の精神のみに留まらず、無
明みょうの炎となって周囲にまで広がっていく。

「な、なんだよ、あれ？」 「一番の感情……ッ！？」

「こ、こんなのって……」 「痛い！ 痛いイタイタイ！」

それを見ていたビャーチェノワ達は慄おのいた。

無明の炎とは感情の発露。

常人には見えずともリーディング能力によって彼らには今、普段
は捉えられないユーリーの感情の色がはっきりと見える。

ユーリーの嘆きは、怒りは、悲しみは、鬱屈は、叫びは、赤熱ルウヒーン
をサブフィール超え青炎に、青炎から黄輝トバースへ。

基地の研究者や人形である自分達に見えるような空間に絵の具で
塗りこんだ色とは違う。目を灼やく程の熱量をもったユーリーの心の
輝きの眩しさに彼らは恐怖した。

「もう一度だ！！ 今度は戦術機で、もう一度俺と勝負しろ！ 赤いサイクロン——ッ！！」

ユーリーは万能だ。だが決して得意が無いわけではない。

彼の数多ある才能の中で最も秀でたもの。それが前世で地球連邦軍のエース、ジャミルに次いでガンダムX与えられる程のMSパイロットとしての力だ。

しかし対するザンギエフもまたユーリーと同じく常人ではない。彼とて鍛え上げた感性和戦闘本能によって目の前の子供から発せられる圧力を感じとっている。

だがそれを受けてなお、ザンギエフは強大な壁として不動のままユーリーの前に立ち塞がっていた。

「……いいだろう。だがもはや格闘技を教えるなどと温い条件は止めだ。今度オレが勝てば、キサマは奴隷だ。命も、力も、未来も、キサマの一切をこのレッドサイクロンが貰い受ける」

ユーリーの気迫の炎をその覇気で押し返すザンギエフ。

周囲の空気は電気が通ったかのようにピリピリとお互いの肌を焼いていく。

ザンギエフは己の胸を叩き言った。

「さあ、教えろ！ キサマはオレに何を求める？」

「自由だ！ 俺が勝つたら、お前の権力ちからで俺とリュドミラを自由にしろ！」

強く。動かないリュドミラを強く抱きしめながらユーリーは己の望みを叫んだ。

6、「ここに人類の希望を探しに来た」

6、「ここに人類の希望を探しに来た」

1987年 6月12日 タルキートナ基地 第一戦術機ハンガー 戦術機MiG-27機内

いくつもの戦術機が立ち並ぶ格納ハンガー。

その中の一機、ソ連の第二代機MiG-21アリゲートルの管制ユニットの中にユーリーはいた。

「歩行・跳躍制御システム スタンバイ」

「間接統計思考制御システム 接続状態…正常」

「可動兵装担架 正常 項目……………CIWS”ストレット”、予備弾倉4」

「K-35-300A、B 推進剤充填率100%」

鋼の巨人を動かすためのプログラムが刻々と立ち上がっていく。

次々と流れる見慣れぬ表示の文字列をユーリーは淡々と目で追った。

第五世代人工ESP発現体が戦術機実習訓練に進むのは一次性徴が終わる12歳になってからだ、通常の訓練兵育成プログラムとは異なりIQが格段に高く、そしていつ計画が前倒しされるかわからない第五世代達は前倒しで戦術機関連の知識だけは教えられてい

ビヤーチエノワ

る。

しかしどうせMSと大差ないだろうと高を括って真面目に聞かなかったユーリーにとって初めて座った戦術機の管制ユニットは驚きと困惑の連続だった。

システム周りは勿論、起動手順も操縦桿の配置からシートの座り心地まで何もかもがMSとは違う。特に初めて受けたレーザー網膜投射映像は機械に自分の視界を奪われるようで大変気味が悪かった。

コモンドポスト

『こちらCPトルストイ中尉だ。どうだ？ 初めての戦術機、それも工廠から送られてきたばかりのモリ大尉のアリゲートルに乗った感想は』

視界の隅に新たなウィンドウが表示されそこに映った若い士官がロシア人らしからぬ陽気な声で話しかけてきた。

今ユーリーが搭乗しているのはザンギエフの副官であるモリ大尉がここタルキートナに赴任するに際して配備された新品のアリゲートルである。別に嫌味や悪意でそうしたわけではなく、戦術機での対戦を受けたザンギエフがユーリーに好きな機体を選ぶように言い、ユーリーは一番状態の良さそうな機体を選んで自然とそうなったのだった。

ガン・インターセプター

——ちなみに装備は迎撃後衛仕様。これは主腕にA-97突撃砲と多目的追加装甲を、背部の兵装担架ユニットにスーパーカーボン製の戦斧と予備弾倉を持たせた遠近両用の万能装備でユーリーは前世で乗っていたGXやドートレスの装備に比較的近いという理由からこれを選んだ。

「……意外と静かだ。ジェット戦闘機の派生兵器だからもつとやか

ましいのを想像していた」

ユーリーの声に先程までの激しさは無い。

今は戦う時。特に先程リユドミラを犠牲にした心の弱さをユーリーはただのパイロットに戻ることで埋めようとしている。

『主機のジェットやロケットは跳躍か飛行時にしか起動しないし、そもそも主動力は燃料電池の電力による炭素伸縮繊維だからな。音なんて出ようが無いのさ……』とそろそろ起動シークエンスはいいぞ、殻付きボウヤ。歩き方はわかるか？』

「大丈夫だ」

操縦桿を僅かに前に倒すと同時に強化装備に付属したフットペダルを押し込む。

すると思ったよりあっけなくアリゲートルは動き、格納ハンガールの扉を潜ることができた。

『よし、統合仮想情報演習システムJIVEESを起動する』

トルストイ中尉の声と共に網膜投射映像で送られてくる景色が見慣れた基地の搬送道路から雪深いロシアの荒野へと変わり、同時にリーダーに三つの赤い光点——エネミーを示す光点が表示された。それを見て顔をしかめるユーリー。

今回のザンギエフ大佐との決闘は一对一のはずだ。

C Pに抗議するために端末に触れようとする寸前で再び彼から通信が入った。

『さて、ひよっこボウヤ。私は詳しい事情は知らないが、察するにどうやら今回の決闘は君から大佐へ吹っかけたらしいな』

(決闘……)

フラッシュバックする光景。

あの巨人のようなモヒカンの男。背筋の凍りつくような舞闘と地面の味。

そして血まみれのリュドミラ。

「……………」

『ああ、怒っているわけじゃないんだ。大佐がこういった挑戦を受けるのはいつものことだ。だが生意気なだけの新人士官ならともかく戦術機に乗ったことすら無い子供ってのは初めてでね』

参ったね、とウィンドウの中のトルストイ中尉が大仰な仕草で両手を挙げた。先程の会話といい、彼はロシア人にしてはかなり大らかな性格のようだった。

『私はCPとしてお前をサポートをするよう大佐から言われている。だが戦術機に関して俺から言えるのは”考えるな、慣れる”という事だけだ。幸い大佐の機体は空輸されたばかりだからイリユーシンから降ろして調整が終わるまであと20分はかかる。つまりあと20分の内に君は基礎動作の習熟を終え、大佐を超える腕を身に付けさせなきゃいけない。……ハハハッ、絶対無理だけどな。けど大佐に強化装備を着させるだけの手間をかけさせたんだ。一応体裁だけは取り繕わなきゃいけない。そこでJIVEESの仮想演習機能だ』

中尉が手元を操作すると先ほどまで視界の端にあったレーダーマップが拡大される。

表示された敵は3体。極々簡単な行動ルーチンのみを与えられた

それらは互いに連携を取る事無くバラバラに狭い範囲の中を移動している。

『訓練兵がシミュレーターで使う仮想敵戦術機を三体入れておいた。これで存分に練習したまえ。なんなら撃墜できなかった分を本番で味方として登録してやってもいいぞ。大佐もそれくらいのハンディキャップなら認めてくれるさ』

「馬鹿にするな、ハンデなんていらねーよ！」

『あ、おいっ——』

気遣う中尉の言葉を見下されたと感じたユーリーはCPとの通信を強制的に切る事で答えた。

「……………」

再び管制ユニット内に静寂が戻る。

リーダーに映された赤い光点と自機との距離は手前から8000、8500、9000。

手始めに主武装である突撃砲と飛行能力の性能を確認するため、とりあえず近づいて一機落とそうとアリゲートルのバーニアを吹かしたところで予期せぬ出来事が彼を襲った。

「うわっ！ わわっ！」

操作に従って跳躍ユニットに点火し、ロケット機構から推進剤を噴出した反動で大空に舞い上がったアリゲートル。

だが跳躍ユニットが腰にあり、しかもAMBAACではなく空力で飛ぶという戦術機の特性をすっかり忘れていたユーリーは戦術機の

予想外の軽さと操作に対する反応の鈍さに慌ててしまい、操縦桿を無茶苦茶に動かしてしまった。

そのせいで跳躍ユニットはあらゆる方向にデタラメに向けられることになり、アリゲートルは空中でバーテンダーが使うカクテルシェーカーの中に入れられたかのようにガクガクと上下に揺さぶられる。

「ク——ッ！！」

無論、そんな事をして無事に飛行し続けられるほど戦術機は便利にできていない。

無茶苦茶な機動のせいで完全に揚力と安定を失った機体は急速にその高度を落として地面に近づいていく。

「高度警告！ 墜落の危険があります」

高度30メートル。どうにか操作感を掴んだユーリーが再度跳躍ユニットを吹かして機体を立て直したのは、墜落を予期した自動衝突回避装置が管制ユニットの操作へ介入する寸前であった。

『ヒューッ！ 今のは危なかった！ 開始前に墜落しちまう所だった。冷や汗かいちまったよ』

「う、うるさいっ！ ちょっと空中機動の把握に手間取っただけだ！」

勝手に再接続してきた中尉の通信に怒鳴り返すユーリー。

だが内心では彼も相当焦っており、強化服でなければ冷や汗でぐっしょりと濡れていたのは間違いない。

（そうか、機体重量に対して跳躍ユニットの推力が高い分、空中での操作がデリケートなんだ。これが戦術機……いつまでもMSパイロットの感覚じゃだめだ。機体の特性を掴まない……）

そう決意すると今度は若干慎重に操縦桿を動かす。

最初は高度をとって簡単な通常の機動を、そして徐々に高度を下げて戦術機特有のNOE——光線級の攻撃を受けないための地面ギリギリでの匍匐飛行を試す。

それから上がったたり下がったり更に急加速と急制動を繰り返したユーリーは通常機動を一通りマスターしたと判断して、今度は戦闘機動を行うために一番手近な敵へと向かっていった。

JIVE Sに設定された標的は戦術機の源流であるF-4ファントムのライセンス生産機であるMiG-21バラライカ。

今尚多くの衛士が搭乗し確かな運用実績を誇る傑作機であるが、無人で低出力の跳躍ユニットしか持たないそれらは低空でゆるく飛行を続けており、時折思い出したように左右に機体进行を向ける以外は全く戦術機らしい機動をとってはいない。

物足りない感はあるが、そこは武装の確認のためと割り切って直線軌道のまま前方にA-97突撃砲を向ける。そしてカーソル表示がロックオンになるのを待ってから操縦桿の引き金を引いた。

A-97の銃口から断続的にマズルフラッシュが起こり、吐き出されたペイント弾がJIVE Sに表示されたMiG-21をすり抜けて地面へ撃ち込まれる。撃墜と判定されたバラライカがポリゴン崩壊のチープな演出とともに消滅した。

『うまいじゃないか！ おめでとう、初撃墜だ。ハハハッ！ どうだ嬉しいか？ これが20年前ならあと9機でお前はエースだぞ』

まともな訓練も受けていない子供が初めて乗った戦術機で低速とはいえ不規則に動き回る敵機を一射で撃墜。

例えその功績の殆どが搭乗した戦術機のロックオン機能と航空機動制御のおかげだとしてもトルストイ中尉からの将来の優秀有望な衛士への賛辞に嘘はない。

だがトルストイにとって不幸なことにこの子供は彼が思っている以上に無感動で生意気だった。

「……こんなんじゃ駄目だ」

『は？』

「おい中尉、もっとバラライカの動きを良くできないのか？　こんなんじゃ紙飛行機でも撃つてた方がまだましだ」

『こ、この糞餓鬼……！』

それまでの新人を見守る先輩としての気分を台無しにされたトルストイは手元のコンソールを操作してバラライカの行動レベルを最大にまで上げる。それは通常、仕官した衛士が本格的な対人戦闘訓練で用いるプログラムだ。

同時にそれまでバラバラに逃げていた2機のバラライカはまるで示し合わせたかのように軌道を変更。合流し一直線にアリゲートルの方へ向かってくる。

『これで希望通りだ、ひよっこボウズ！　もう知らないぞ、大佐と戦う前に赤っ恥かいて泣いちまえ！』

熱くなる一方のトルストイ中尉を気にもせずに、ユーリーは敵が連携を取り始めたことを冷静に分析して、一方的に挟み込まれないように JIVEES によって表示されている仮想の市街地へと機体を移動させた。

――距離 1800、1700。

赤い光点は高速で、しかも時折交わりながらアリゲートルの隠れている廃ビルの方へ近づいてくる。

――1100、1000

そして互いの突撃砲の射程ギリギリで散開し、バラライカが左右から挟み込もうとしたところでユーリーはアリゲートルをビルの陰から飛び出させる。

即座に反応し突撃砲での迎撃を行うバラライカ。

前後から襲い掛かる火線をアリゲートルは噴射地表面滑走中サーフェイシングに右足で地面を蹴り左にステップすることで避けるが、それはユーリーが思い描いていた動きよりも遥かに遅い。

なんとか一発ももらわずに避けきったが、反撃として突撃砲のトリガーをひいた時には既に前方のバラライカは回避行動に移っており、ユーリーはまともに反撃もできないまま再びビルの陰に隠れる羽目になった。

（動きが固い！ それにさっきの挙動、36ミリの反動も受け流せないのか！）

乗ることで初めて知った戦術機の反応の鈍さと主腕主腕の華奢さ。

例えば先ほどの回避行動。右足で地面を蹴った後、本来なら着地の直前にもう一度左足で地面を蹴ってバラライカに接近戦をしかけるはずだった。

そしてその後の反撃もロックオンによる自動照準を待たなければ、もしくは一拍遅れた射撃でも連射の反動で銃口さえぶれなければ何発かは命中したはずだ。

回避行動を阻害したのは自立姿勢制御プログラム、そして反撃を遅らせた自動照準。

本来なら衛士を守り戦闘を助ける二つの機能だが、ユーリーという秀逸な乗り手の前では彼の技能を縛る枷にしかない。

（クソッ！ 泣き言なんて言えるか！ この戦いにはリユドミラの自由と俺の意地がかかってるんだ！）

アリゲートル
機体が自分についてこれないならば自分が機体に合わせればいい。
い。

追撃をかわし、アリゲートルを三度、みたひ適当なビル影に隠れさせたユーリーは手を操縦桿から離して大きく深呼吸をした。

「ふうふう、はぁー」

目を瞑りつむ深呼吸と共にユーリーは自分のパイロットとしての思考を組み替えていく。

動作終了後の制御プログラムによる硬直。そして自動照準と連射時の突撃砲の挙動。それらを乗り越えるには自分はニュータイプであってはいけない。

目指すは最速ではなく最適。言うなれば精密機械。反応速度や第六感に頼るのではなく、隙を作らない堅実な機動と淡々と敵を追い

詰める戦略が必要なのだ。

『どうしたひよっこ？ 気分でも悪いのか？ それとも降参するか？』

突然機動を止めたユーリーに対して中尉から通信が入る。

バイタルモニターはフラット。だがユーリーが着ている強化装備はブカブカの物（それでも国連軍で支給している物の中では一番小さかった）をバンドで無理矢理止めた急造品であり、先ほどから度々バイタルデータをロストしているのでアテにならない。

——戦術機の管制ユニットはその恐ろしい揺れから慣れない者や衛士適正の無い者にとっては地獄に等しい。そもそも専門のトレーニングを積んだ現役の衛士でも強化装備のフィードバック無しには戦えない程戦術機は激しく揺れるのだ。

それはこの世界の科学技術もっても解決できない問題であり、人道などおかまいなしのオルタネイティヴ3ですら人工ESP発現体が戦術機で闘うのは12歳になってからと規定した理由である。

「ふうふうう……いや、心配無用だ」

目を瞑ったままユーリーが答える。

『……そうか。まあ問い詰めても仕方ないからこれ以上聞かないけどよ。気分が悪くなったらすぐに降りろよ。吐くくらいならまだしも、お前みたいな子供なら戦闘機動で口から内臓が出てきてもおかしくないんだからな』

「了解……っと」

それまで陰に隠れたアリゲートルの出方を窺うようだった二機のバラライカの動きが変わった。

まるで痺れを切らしたかのように一機のバラライカがユーリーが隠れているビルに3発もの120mmを打ち込む。

ビルの倒壊とともにバラライカは噴射跳躍しながらシースから短刀を引き抜きアリゲートルの頭上から迫った。

薄目を開けるユーリー。

半歩、最小限の動きだけで瓦礫の雨とバラライカの短刀をかわす。空振りしたバラライカはすぐさま姿勢を整え再攻撃しようとするが、それよりも早く背部装甲に突きつけられた突撃砲からゼロ距離で36mm弾が放たれた。

『仮想敵B撃破……！　なんだ、今の動き……？』

背中から管制ユニットを貫かれたバラライカがポリゴンとなって崩れ落ちる。同時に残るもう一機のバラライカより放たれた火線をユーリーは上昇することで逃れた。

僚機を失ったバラライカもアリゲートルを追撃すべく若干遅れながらも空へと躍り出る。

だが軽やかに空に突き抜けたアリゲートルに対しその動作はどこか鈍^{にぶ}くてぎこちない。先ほどは連携に気を取られてユーリーにはそこまで見る余裕は無かったが、敵は結局は第一世代戦術機、それも粗末なプログラムだけで組まれた仮想の無人機なのだ。

連携行動は教本をそのまま写せばいいが、高度な判断と複雑な制御を要求される個人機動に関してはやはり圧倒的に能力が不足していた。

上空を取ったアリゲートルが眼下のバラライカに向けて突撃砲の引き金を引く。わずか一秒の連射。

銃口から飛び出したのはたったの六発の弾丸だったが狙い済ましたその攻撃はバラライカの右肩部に命中しその攻撃力と姿勢を奪う。先程までのアリゲートルの照準精度からすれば考えられないほどユーリーの射撃は正確だった。

「トドメッ！」

『あ、おい！ 何をする気だ！？』

そう叫ぶとユーリーは若干左足を曲げた状態で跳躍ユニットを地上へ向け噴射降下する。フーストダイング右足を矢のようにまっすぐに伸ばし光の尾を引きながら猛烈な速度で降下するアリゲートルと、その先には右腕を失ってフラフラと飛ぶバラライカ。

——刹那の交錯。

実態を持たないバラライカをすり抜けたアリゲートルは何事も無く地上へ着地。

リーダーには既に赤の光点はない。

『仮想敵C、頭部破損のうえ墜落……撃墜判定』

もはや驚きの声も出ないといった様子で中尉が告げた。

*** 同時刻 同基地 第4戦術機ハンガー横 ドレッシングルーム

「大佐殿！ これは一体どういうことじゃ！？」

ザンギエフがハンガー横のロッカールームでソ連陸軍の強化装備（特注品サイズ）に袖を通してしていると突然、白衣の老人が怒鳴り込んできた。

「ヒヤーチエノフ第五世代は未だシミュレーター訓練どころか簡易適正審査すら行っておらんのだぞ！ 戦術機などに乗せてもまともに戦えるはずあるまい。こんなことに一体なんの意味がある！？」

が鳴り立てる老人に強化装備を着ける手を止めるザンギエフ。いかにもうつとおしいというように視線だけを老人に向けた。

「……オルタネイティヴ計画の技術責任者ラフマニノフ教授か」

「そうじゃ。ここでは技術中佐などという階級を貰っておるが……計画に関する実質的な権限はザンギエフ大佐、おぬしより上だと思ってもらいたい！」

「それで、何か問題が？ オレはここには教官として派遣されている。生徒の訓練内容に関しては一任されているはずだ」

「だが訓練で事故を起こす許可は出とらんはずじゃ。おぬしのおかげで優秀なESP発現体が一人危篤状態に陥っておるというのに、今度は子供相手の実機演習など党や基地司令が許可するはずなからう！」

二人の視線がぶつかり合い火花を散らす。

教授は老獪な政治家でもザンギエフのような強面こわもてでもないが、こ

と研究対象のことになるととてもない集中力と胆力を発揮するタイプである。

あれから2時間。

セルゲイ達オルタネイティブ3チームが意識の戻らないリュドミラを医務室に緊急搬送しCTスキャンにかけた結果、彼女の頭部には深刻な頭蓋骨骨折と脳挫傷が確認された。

人工ESP発現体の生産は既に止められているため、^{ビャーチエノワ}第五世代――^{シエスチナ}それも第六世代に準ずるほどのESP能力を持ったリュドミラは”人命並みに”貴重である。

すぐさま非番だったニコライを呼び戻し、オルタネイティブ計画直属の医療スタッフ総動員で懸命の手術が^{オペレーション}行われたが、リュドミラの治療はそれでも難しいという程状況は切迫していた。

だがセルゲイ教授にとって本当に重要なのは自身の研究成果の結晶たるリュドミラの方ではなくイレギュラーであるユーリーである。彼の持つ特殊な能力はセルゲイにとって未知の領域だ。彼が産まれて八年。一時は行き詰っていたESP能力の開発もユーリーを研究することで徐々に勢いを取り戻しつつある。

ここで彼を失うのはなんとしても避けたい故の抗議だった。

「訓練許可なら先ほど下りた。そもそも、私がここに来たのは党からあのユーリーという子供を制御下に置くよう依頼されたためだ」

「何じゃとっ!?!」

教授の顔が驚愕に染まる。

ソビエト連邦政府にとってオルタネイティブ3計画の進捗の重要度は高い。セルゲイ教授自身もソビエト政府に資材を発注し、報告書を送っている以上あの突然変異^{ミュータント}に関してもしずれは言及されるだ

ろうと覚悟はしていた。

だがいくら重要な機密を含む仕事であるとはいえ、送られてきたのがあのザンギエフ大佐！ 書記長（ソビエト連邦共産党の最高職）の信頼も厚く国土防衛の切り札である彼を、一体どんな手を使えばただ一人の子供のために派遣することができるのか。

「……………ッ！ そうか、セラウイクの全連邦党大会！ ヴィクトールの奴、大佐殿を政治の舞台から引き離す口実で国連軍に引っぱりつけてきたのか」

武勇高くソ連に並ぶ者無きサイクロン。

公平で潔癖な性格は軍人に信奉者が多い一方で、後ろ暗いところのある文官や党の議員からは脅威として見られていた。

例えばザンギエフ本人にその気は無くともその名前はあまりに大きく、ザンギエフが活躍する度にいつかは”公の場で自分の不正を弾劾されるのではないか” 政治家となり自分の地位を脅かすのではないか” という不安は募っていく。その不安が最高潮に達するのが本日から行われている全ソビエト連邦領から代議員が集まるセラウイクの党大会であった。

一方で国連軍人にしてオルタネイティブ計画の監視役であるヴィクトール・ガスパロフの党への貢献は大きい。元々の名声もあるが、オルタネイティブ計画の誘致から研究内容のソ連への利益誘導まで、彼は国連軍少将として使えるあらゆる手管てくだを使って党に貢献してきたのだ。

恐らく彼は最高評議会へはオルタネイティブ計画のためと言い、もう一方でミハイル・ザンギエフを党大会に出席させないために彼を国連軍に出向させたのだと教授は確信した。

「否定はしない。だが勘違いするな。確かにここにきたきっかけはヴィクトールが手を回した事だが、それだけではない。オルタネイ

「ティヴ計画に関わりたいというのは私自身の意志だ」

「馬鹿な！ 力も、名誉も、軍からの独立行動権すら認められた程の人間が今更何を望む？ BETAへの復讐か？ 心を見るESP能力か？ それとも病を治す遺伝子技術か？」

真意が見えないザンギエフの言葉にセルゲイは驚き、問い詰める。超能力、最先端の遺伝子治療技術。普通に人間ならば喉から手が出るほど欲しい物だ。BETAの復讐を考えない衛士もこの世界にはいないだろう。

だがザンギエフは首を振ってそれら全てを否定した。

「希望だ。私はここに人類の希望を探しに来た」

7、「……光、です」

7、「……光、です」

***1987年 6月12日 アラスカ州タルキートナ基地近辺
クリスティアンセン湖東岸***

三機の仮想敵を撃墜したユーリーは先の戦闘での消耗をチェックしていた。

「A - 97 突撃砲 弾数1849、K - 35 - 300 推進剤充填率
A機 90% B機 95%」

「主脚の膝部に若干の負荷 判定……問題なし^{グリーン}」

残弾といってもアリゲートルの腰部には3つの弾倉が収容可能な上、今回は兵装担架にも4つ弾倉を積んできたため突撃砲の弾数に不安は無い。120mmはそもそも使用すらしていないし、被弾も無いので多目的追加装甲やCIWSの耐久度にも問題は無い。

推進剤と間接の消耗がやや気になる所ではあるがトルストイ中尉から現状の推進剤充填率でも一時間の戦闘機動を保証されたのでユーリーは補給へ戻らなかった。

勿論、余裕からではない。補給に戻ったとしても戦術機にとって最も消耗の激しい部品である衛士、即ちユーリーの体力は回復することはできない。生まれつきG耐性が強いといっても子供の体である以上、今の自分が全力で戦えるのは30分程度だと彼は見ていた。

『おいひよっこ。今モリ大尉から連絡が入った。荒熊^{ミドワイエチ}の準備が完了

したそうだ。大佐がJIVEESの演算圏内に入り次第戦闘を開始しているぞ」

「ミドヴィエチ？」

会話の流れとそして荒熊というネーミングからしてザンギエフの乗る戦術機なのだろうが、聞いた事の無い機種名にユーリーは首を傾げた。

『ミドヴィエチは大佐が赤きサイクロンの称号と一緒に専用機としてミコヤム・グルビッチとスフォーニのソ連の二大兵器設計局が合同で開発して政府から送られた戦術機だ。ベースこそバラライカと同じ第一世代のF-4ファントムだが……常に最新の改修が施されていて、特に各関節や腰椎部の強化は大佐の近接戦能力を100%活かすための仕様になっている』

「専用機……」

『なんだ羨ましいのか？』

「いや、真剣勝負だ。一番慣れた機体に乗るのは当然だ」

そもそも決闘方法をこちらが決めた以上これくらいの不利は想定済である。

ただ、懐かしい言葉を聞いてユーリーは昔の愛機であったGX-9900の三号機を思い出した。もっとも、あれはユーリーのための専用機ではなく三機生産された汎用機であったが、自分で整備や調整を行い塗装色までデザインしたあの三号機は彼の分身とも呼べる機体だ。

『いいか、ひよっこ。専用機といってもミドヴィエチの特性は第一世代……良く見てもせいぜい1、5世代機だ。パワーこそずば抜けているが、重量が増えたせいで機動力は最新の跳躍ユニットをもつてしてもカバーできていない。それに電磁炭素伸縮繊維を増やした分廃熱や継戦時間にも問題がある。決して無敵の機体じゃないってことを忘れるな』

忠告と共にデータリンクからミドヴィエチのデータがアリーゲールの管制ユニットへと送られてくる。

そこにはミドヴィエチの画像資料と共に、カタログスペック、装備可能な兵装などが一緒に添付されていた。

「お、おい、いいのかこれ！？ 軍事機密だろ？」

『何もおかしいことはない。私は大佐からお前のCP将校としてできる限りの事をしろって言われたんだぞ？ CPが現場に情報を送るのは当たり前だ。それに大佐は勝負には生真面目な方だ。アリーゲールのスペックは筒抜けなのにお前が何も知らされないままなんて不公平、絶対に納得しないに違いない』

「……礼は言わないぞ。俺は今からお前の大佐殿を倒すんだからな」

「ハッ！ やってみるんだな、ひよっこ！ せいぜい大佐と良い勝負ができるよう頑張れよ！」

ピピピッ！という電子音がユーリーと中尉との会話に介入したのはその時だった。

リーダーに新たな赤い光点が映る。その方向へ首を向け目を細めると思考制御によってカメラの照準も絞られて、光点の正体を明らかにした。

網膜映像に移る識別番号——MiG/Su-01 ミドヴィエチ
黒を基調にした塗装、バラライカ以上に骨太のボディーに右肩にはソビエトの象徴たる赤い星と国家章、ナショナルマーク左肩には赤い竜巻をデフォルメした個人章。パーソナルマーク轟々《ごうごう》と凄まじい音を立てて稼動する跳躍ユニットが示すのはこの機体がコソコソと隠れることなど全く考慮していない設計だということ。

背部兵装担架はここからでは確認できないが両手に二丁のA-9
7突撃砲を持っている事がここから窺い知れる。

なるほど、ザンギエフらしい機体だとユーリーは実物を見て納得した。

がに股で短めの手足はお世辞にもスマートとは言えないが、モヒカンをイメージさせる大型のセンサーマストや普通の戦術機に比べてゴツゴツして分厚い装甲。どちらも乗り手を意識してデザインしたのだろう。

それと外見以外でも中尉から送られたデータによればあの機体は間接部の強化の他に摩擦軽減の表面加工装甲や試作型の新型近接兵装を取り入れているらしい。ザンギエフが力に貪欲なのは格闘技だけではなかったのだ。

電子音とともにトルストイ中尉とは別の通信ウィンドウが現れる。

『待たせたな、小僧。約束は忘れてはいないだろうな？』

ザンギエフの落ち着いた声がスピーカーを通してユーリーに届けられた。

”約束”

再びのフラッシュバック。迫る巨腕、恐怖に陥った自分、そして

地面に伏せる血まみれのリュドミラ。

ついさっきの事だ。忘れるわけがない。

自由を得る。自分はそのためにザンギエフ大佐という^{ビッグネーム}巨人に戦いを挑んだのだ。

挑んで……そしてリュドミラを犠牲にした。

「……ああ」

憤りと後悔を隠すためにユーリーは最小限の返事だけで答えた。

彼我の距離は残り14000。

操縦桿を握りながら、最後に抱きしめた姉の体の冷たさを思い出す。

（見ていてくれよ、リュー。俺は今度こそ……今度こそあいつに勝つ！）

闘志とともにザンギエフを迎え撃つべくユーリーは跳躍ユニットに火を入れ、鋼鉄の巨人の身を大空へと向かわせた。

『ミドヴィエチ、JIVE S演算圏内に到達！ 戦闘開始！』

「ミドヴィエチ、JIVE S演算圏内に到達！ 戦闘開始！」

トルストイ中尉の緊張した声が基地管制室内に響く。

同時にレーダーに映る青い光点と赤い光点は飛行最高速度に達し、演算圏内の両端に位置していた筈の2機はほとんど距離を詰めていく。

管制室内ではトルストイ中尉のほかにモリ大尉とオルタネイティ
ブ計画の軍事や技術関係者の十数名が観戦のために詰めており、J
IVESの操作データと仮想戦域内に飛ばされた無人航空機ドローンから送
られるデータから合成された戦闘映像を大型モニターで見ていた。

二機の戦術機はあつという間にお互いを主武装の射程距離内に捉
えると、まるで鏡に向かつているように突撃砲を同時に構えてその
引き金を絞る。そして二機とも示し合わせたように時計回りに回避
行動をとった。

盾である追加装甲を前に構え優れた機動力を活かすアリゲートル
に、二丁の突撃砲の反動をもとめせずに撃ちまくるミドヴィエチ。
二機は突撃砲を避け、あるいはお互いに撃ち返しながら空中を螺旋
にグルグルと回る。

一見互角に見えるこの攻防。だが、どこか機械的なユーリーのア
リゲートルの動きに対して、ザンギエフの乗るミドヴィエチは二挺
の突撃砲を自在に操って敵の移動予測位置と回避予測位置を同時に
攻撃するという複座機顔負けの射撃能力で次第にアリゲートルを追
い詰めていた。

「アリゲートル、多目的追加装甲に被弾多数！ 損傷……大破判定
！ 多目的追加装甲を破棄！」

ユーリーの意志ではなくJIVESの演算とHQからの操作によ

ってアリゲートルの右腕マニピレーターがペイント塗れの多目的追加装甲を手離す。

それはアリゲートルの優位の一端を失う出来事であったが、同時に多目的追加装甲という重りが無くなったことでもある。そしてその瞬間、モニターで戦況を見ていたトルストイには全力の機動を許されたアリゲートルのセンサーアイが歓喜で輝いたように見えた。

『うおおおおおおおーっ！』

舌つ足らずな声の叫び。

——アリゲートルの機動が変わる。

それまで円を描き距離を保つだけだった飛行から、前傾し燃焼ガスの尾を引きながら肉食獣のようにミドヴィエチへ向かう。

当然、ミドヴィエチも迎撃に突撃砲の多重弾幕を張るが、二つの銃口から放たれた数百発に及ぶペイント弾の全てを、アリゲートルは右へ左へと狂ったようにバレルロールを繰り返すことでかわした。

そして濃密な弾幕というのはずっと続けられる物ではない。ミドヴィエチが持っていた突撃砲の内、片方の残弾が遂に0となる。

ザンギエフは副腕がリロードを行う間、僅かに弾を残しておいた右手の突撃砲でアリゲートルを牽制しようとする。

だがユーリーが弾幕が半減するタイミング、それもリロード作業のため機動が抑制された隙を見逃すはずが無い。それまでの不規則な回避行動から一転、アリゲートルは両手で保持したA-97を乱射しながら最大噴射でミドヴィエチの頭上を掠めるような軌道で突撃した。

「ミ……ミドヴィエチ、突撃砲Bに被弾！ 大破、爆発判定！ 右腕に損傷！ ……信じられない！ あのひよっこ、大佐に当てやが

った！」

トルストイの管制を聞いて技術者達は自らのモルモットの思わぬ善戦にほう、と感心を示す。

逆に戦闘機の経験か衛士経験のある軍事関係者は今の攻防を見て声も出せなかった。日々研鑽を積み、戦場に身を置いてきた彼らには先程の攻防がいか馬鹿げているかがわかる。彼らからすれば回避しながら二挺の突撃砲をあれほど自在に操るザンギエフの技量が^{かみわざ}神業なら、それをかわしたユーリーの連続反転バレルロールは自殺行為同然の変態機動だ。^{へんたいきどう}アクロバット専門の戦術機部隊でも難しい機動を戦闘中、それも弾丸を回避するために使うなど到底信じがたい。

『やはり俺の目に狂いは無かった。此処にこそ私が求め続けてきた物があつた！』

リロードの終わった突撃砲で再び牽制を加えながら、オープンチヤネルでザンギエフが吼えた。その声は喜びに満ちていると同時に失望の色もある。

『だが何故だ？ 何故自由など求める？ それほどの力を人類の未来のために使おうとしない？ BETAが憎くは無いのか。お前が前線に出れば何人の同胞の命が救えるかお前は分かっているのか？』

上を取ろうと上昇をかけるアリゲートルの頭を速射で押さえるミドヴィエチ。弾幕を避けようと機体を左右に揺らして上昇を試みるが、機動力の差にも関わらずミドヴィエチはアリゲートルの大きな拳動にも難なくついて来る。

結果アリゲートルは上昇を諦めざるを得なくなった。

『なんだよそれ、鬱陶しい！ BETAなんて知るか！ 人類なんて知るもんか！！ 俺は自由が欲しいんだ、その何がいけないってんだよ！』

細かく上下に動いて突撃砲を撃ちながらも一度隙を作れないかと窺うアリゲートル。

恐らくもう一度先程の機動を行えばいかに大佐とはいえ隙くらい無理矢理作ることができそうだが……とトルストイは考えたが、モニターに目を落とせば先程の機動のせいかアリゲートルの状態が所タイエローになっており、衛士であるユーリーのバイタルデータも大きく乱れていた。

「さっきの機動、下手すれば機体が空中分解してもおかしくなかったことかよ……！ 第一世代じゃない、新品の第二世代機なんだぞ！」
パラライカ
アリゲートル

管制室の中でトルストイの声が響いた。

『お前達だけではない！ 我が国は生存を賭けてBETAと戦っているのだ。世界中どこもそうだ。勝つために、人類は団結せねばならん。お前にもわかつているはずだ！』

『国のためなら、人類のためなら何をしたらいいのかよ！ BETAが俺やリユドミラが何をしたらっていうんだ！ 実験も、洗脳も全部お前達大人の都合じゃないか！！』

徐々に白熱する戦況。

交差する36mmの火線。

両機から放たれる数千にも及ぶマズルフラッシュに加え、いくつ

かの弾丸は空中でぶつかり合いペイントの華を咲かせて散る。そして弾丸はその射線の先、即ちお互いの突撃砲の銃口にもペイントをぶちまけた。

「アリゲートル、ミドヴィエチ、両機の突撃砲に被弾判定！ 武装を破棄！」

被害報告をし、武装破棄のコマンドを送りながらながらトルストイは内心で何度も信じられない、と呟いた。

——ミハイル・ザンギエフは紛^{まご}う事なき超人だ。

純血のロシア人でインテリ階級という一面を持ちながら最前線の“消耗品”である衛士となった彼は10年以上ソ連のあらゆる戦場を飛び回って戦い、あるいは生き延び続けてきた。その活躍は改めて語るのも馬鹿らしいほどで、ある時は単機で数百のBETAを屠り、ある時は戦場で指揮官を失った部隊を直卒^{じきそつ}して崩壊しかけた戦線押し戻し、またある時は反逆し戦場から逃亡した戦術機大隊を説得によって連れ戻したりもしている。

力を持ち、知恵を持ち、人徳^{カリスマ}を持った無双の英雄。それがミハイル・ザンギエフ。

実際軍部や、ソ連共産党の最高議会の中には何度もソ連の窮地を救った大佐を神格化し妄信するグループすらあるほどだ。

大佐が纏う力。あの超常的で圧倒的な力。うまく言葉にできないが、あれは人の心から生まれる重力のような物だと思う。BETAとの戦いが続くこの世界で、死んだ人間の感情や魂を取り込むことでザンギエフはより大きく重く、そしてより強くなる。

「信じられない……」

——その超人と互角に戦っている子供がいる。

この子供が今日始めて戦術機に乗ったことは間違いない。それをここまで操る才能もトルストイは認めることができる。だが、ザンギエフ大佐の強さを副官として間近で見てきた彼には、戦術機の操縦が巧みな事と大佐と戦える事はイコールではないと知っていた。

あの力に対抗するには大佐と同じような存在になるか、相手が背負っている重力を跳ね返す程の信念が必要だ。

だが戦場に出たことの無い若干8歳の子供が人の魂や感情を受け継ぐはずがない。信念も歳に見合わぬ物を持っているが、それでも彼の叫びは十代の戯言同然だ。
ティーンエイジャー

——では一体何が彼にここまでの力を与えているというのか。

モニターの向こうでは空戦状態のまま何度も交差し、ソ連の次世代近接格闘兵器である試作モーターブレードを叩きつけるミドヴィエチとそれをスーパーカーボン製の戦斧”ストレット”で受けるアリゲートルがいる。

そのぶつかり合いの凄まじい圧力にストレットは火花を上げて融け始め、モーターブレードは機関部から黒煙を上げてる。

「警告！ 衝突墜落の危険あり。操作に強制介入します」

HQのJIVES管理システムによりこれ以上のぶつかり合いが危険と判断されたため両機は自動操縦で一定距離まで離され地上へと降ろされる。

勝負に水を差された形になったザンギエフは不満に呻いた。

『イワン、JIVESを切れ！ この勝負、もはや安全なままでは終わらん！』

「し……しかし大佐！ 相手は子供ですよ？ そんなことをすれば本当にあの子を殺してしまうかもしれない！」

『この程度の事で死ぬならそれまでの運命だったということだ。やれ！』

「——っ！ ええい、どうなっても知りませんよ！」

命令には逆らえず、統合仮想情報演習システムをオフにするトルストイ。

同時に今まで二人に網膜投射で移されていた寒々しいロシアの風景が消え、現実の光景——アラスカのクリスティアン・セン湖の畔が映る。

地上に降り、JIVEESという枷から解放された二機は今度は地上で格闘戦に移行し古代ローマの剣闘士の試合のように激しく武器をぶつけ合わせた。

と、その時トルストイが管制しているレーダーが戦域内に近づく4機の戦術機を捉えた。

「これは……機体識別F-14？ トムキャット 何故米軍機がこんな所に！？」

しかもトムキャットは全てこのタルキートナ基地から発進している。

いくら国連軍基地といっても、セラウイクのお膝元とも言えるタルキートナにアメリカの戦術機があることは余りにも不自然だ。

「——それは俺がオルタネイティブ第三計画のためにノースロック・グラナン社から提供させた機体だからじゃ」

疑問に答えたのは管制室にいたオルタネイティブ計画の技術者の中でも最も年長の老人——セルゲイ・ラフマニノフその人であった。

「セルゲイ教授、今あの子供は大佐との”実機訓練中”です。ガスパロフ司令の許可もとっております。いくらアナタといえども大佐の邪魔はさせませんよ」

トルストイは管制用の機材を守るように立ち上がり言った。隣に立っていたモリ大尉も同じように技術者達から管制機材を守る立ち居地に移動している。

「ふんっ、わかっておるわい。案の定セラウイクの基地司令殿から釘をさされたしのう。だが基地司令殿はデータを取るくらいなら構わんと仰っていた」

セルゲイは二人の様子に不快そうに顔を歪めると、トルストイの座っている機材とは別の機材へ歩み寄り件の進入者へ通信を繋げた。

「スエーミ（7番）、ドウヴァツアッチアジン（21番）、ストーチエーシチ（110番）、トリースタ（300番）聞こえておるか？」

『『『』はい、教授』』』』

セルゲイの問いかけに通信用スピーカーから4人の少女の返事が返って来る。彼が子供を数字で呼んだ事もそうだが、その声が皆一様に幼い事にトルストイは驚いた。下手をすればあのユーリーとか

言う子供よりも年下なのではないか。

トムキャットは珍しい複座の戦術機なので衛士が別にいるのなら子供を乗せるのも難しくはないが、それでは戦闘機動は無理だろう。とりあえず戦闘に介入する気が無いと分かる。

「今お前達から2000メートル前方では第五世代のアジン（1番）^{ビャーチェノワ}が戦術機に乗って戦っておる。アジンは普段であればお前達、第六^{シエ}世代^{スチナ}の能力をもつてしてもリーディングを受け付けない特性を持っておるが、先程野外訓練中の第五世代達が奴の思考波を観測することに成功した。見えた色は個体によって様々だが、皆一様に恐怖を感じたと言っておる」

『『『『………』』』』

少女達……セルゲイがシエスチナと呼んだ四人は感情を一切見せる事無くセルゲイの言葉を聞いている。

「お前達の任務はビャーチェノワ達が見たという特異な思考波をもつ一度観測してデータとして記録すること、そして可能であれば思考波から奴の思考をリーディングすること。わかったか？」

『『『『はい、教授』』』』

さきほどと全く変わらない返答。余りに無感情なその様子にモニターに写っている少女達はまるで人形かロボットのように見える。

「そして中尉。お主の小隊にはシエスチナを乗せた状態での新型のリーディング支援装備とデータポッドのテストを命じる。具体的には目標に対して遮蔽物の有無、あらゆる角度、距離で同乗したシエスチナが対象をリーディングできるかを測ってもらう。なおシエス

チナには戦術機搭乗経験が無い。念のためスコプラミンを服用させておるが、リーディングは体調によって大きく性能が上下するので一切の戦闘機動は禁止する。あまり揺らさんように」

「了解しました！」

セルゲイの命令にいかにもお坊ちゃまといった風情のロシア人中尉が答えた。

（りーでいんぐ？ 何かの特殊技能なのか？ 一体なぜこんな子供をここに連れてきた？）

とトルストイが疑問を抱いたその時、再びオープンチャンネルで二人の会話が管制室に流れた。

『さあ、党と国に忠誠を誓え！ ユーリー・アドニー・ビヤーチエ
ノワ！』

『嫌だっ！ この世界は……この国は……お前達は卑怯者だ！ 平等のために正義のためになんて言って弱い人間に全てを押し付けてそれでも足りなくなったら俺達みたいな人造人間の子供を作って命がけの戦争を押し付ける！ 戦士なら、兵士なら自分でBETAと戦って勝って見せろよ！』

「じ、人造人間……？ まさか……こいつら全員そうなのか！？」

トルストイと、普段は寡黙で滅多に感情を出さないモリ大尉ですら恐怖を感じてお互いを見合わせる。

弾劾されているにも関わらず、セルゲイにオルタネイティブ計画の技術者に動揺の様子は無い。そして先の通信を聞いているはずの

シエスチナの少女達にもまた無感情のままだった。

この世界の、この国の闇は彼らが想像していたより遥かに深かった。

「ハア——ハア——ハッ！」

『この程度の事で死ぬならそれまでの運命だったということだ。やれ！』

『——っ！ ええい、どうなっても知りませんよ！』

アリゲートルの管制ユニットに響く二人のやり取り。

網膜にJ I V E S O F Fの文字が表示されるとともに今まで写されていた寒々しいロシアの風景が消え、ユーリーの瞳には現実の光景——アラスカのクリスティアン・セン湖の畔が映された。

この時、アリゲートルは既に突撃砲を失っている。ミドヴィエチもそうだ。

だからユーリーは仕方なく格闘戦を行っているのだが、機体特性から安定感があり強力なチェーンソー型近接兵器を振るうミドヴィエチに対してユーリーは先程から防戦一方、しかもいまいち扱いにくい斧という武器で何度も打ち合ったため、アリゲートルも全身が既に警戒状態だった。
コンディショニングエラー

「ハア——ハア——フ~~~~！」

加えてユーリーの体力も既に限界が近い。本来ならあと5分は問

題ないと計算していたが、先程のバレルロール、あれがいけなかった。

ユーリーの感覚ではアリゲートルの跳躍ユニットの加速力や最大出力はGXに大きく劣る。

だから調子に乗って無茶な機動でミドヴィエチに仕掛けたわけだが（実際そこまではよかった）その一撃でミドヴィエチを仕留められなかった。自分が子供の身であることを忘れ、アリゲートルの出力をGXに比べれば遥かにマシという程度の認識の代償に、こうして頭痛と吐き気と耐久アラートの騒音に耐えながら向こうの得意である格闘戦をする羽目になったのだ。

（でも、負けられない！ 俺は負けられないんだ！）

ミドヴィエチのモーターブレードが唸りを上げて何度も振りかぶられる。

朦朧とする意識の中、ミドヴィエチが動くたびに何とかストレットを持ち上げて受け止めるが、先程から何度もモーターブレードの摩擦を受けてきたストレットは10合目を迎えてついにスーパーカーボンの耐用温度を超え、摩擦熱に耐え切れずに燃え上がりその刃の侵攻を許した。

「くっそおおおー！」

「ストレット破断。 K - 35 - 300 B機 ロスト。 左腕負荷限界、コンディションレッド」

それはJIVESによる演算ではなく本当の喪失。機体状況のウインドウに表示されていた左の跳躍ユニットが黄色から灰色へと変わり、ストレットを握っていたアリゲートルの左腕は半ば折れかけ

ほとんど操作を受け付けない。

対してミドヴィエチはほぼ無傷。JIVESを切ってからザンギエフは意図して右腕を使わないようにしているようだが、それはユーリーにとってなんの慰めにもならない。

絶対に負けられない戦い。

姉の命を賭けた献身と自分の全てを賭けた一戦。

だが敵はあまりに強く、自分は今にも負けようとしている。

『さあ、党と国に忠誠を誓え！ ユーリー・アドニー・ビャーチェノワ！』

「絶対に嫌だっ！ この世界は……この国は……お前達は卑怯者だ！ 平等のために、正義のためになんて言って、弱い人間に全てを押し付けて、それでも足りなくなったら俺達みたいな人造人間の子供を作って命がけの戦争を押し付ける！ 戦士なら、兵士なら自分でBETAと勝ってみせろよ！」

（頼む、ジャミル！ 俺にお前の力を貸してくれ！ 今だけで良い、俺をお前みたいに強く、無敵のニュータイプにしてくれ！）

血を吐くように。世界を隔てた親友に祈りながら血走った目でモニターの中を見回して勝機を探す。

表示の中から見つけた最後の武器はアリゲートルの両腕に装備されたマチェットナイフ。辛うじて生きていた左腕のサブアームを動作させてスーパーカーボンの山刀さんとうを構える。

だがそんな隙をミドヴィエチ見逃さず、無慈悲にも振りかぶられたモータブレードがアリゲートルの両脚部を薙ぎ払われた。

「くううううー！ー！ー！ー！」

人間で言う太ももの半ばを断ち切られたアリゲートルは赤茶色のオイルを撒き散らしながら地を舐め、這い蹲^{つくは}る形になる。足の切断を除けば奇しくもそれは先のリュドミラとザンギエフの構図を戦術機で焼き直したような光景だった。

（守らなくては……リューは、姉さんは、俺がつ！）

姉。リュドミラ。

最後に握った彼女の小さな手、無垢で穢れを知らない子供の手。ユーリーが2度の生を経て始めて得た家族の手の冷たさを彼は忘れない。

『何故わからん！ お前達だけではない。誰もが世界を守るために命がけで戦っているということがなぜわからんのだ！ 姉だけを守り、お前達だけが自由に生きられれば満足なのか？ 国家とともに誰かと共に世界全てを守ろうとは思わないのか！』

「くっ」

ザンギエフの言葉にユーリーは己の前世の最期を思い出した。

あの時、自分は一人でランスローという死に立ち向かった。だが考える。あの時ももし自分が一人ではなかったら、もしもジャミルや仲間と戦っていれば自分は死ぬ事無く、今もあの世界で生きられたのではないか。そして生まれ変わっても一人で戦う人間でなければ自分は姉を傷つけずに済んだのでないか。

そもそも、己が一人で戦い続けてきたのは何故だ？ 万能でなんでもこなせるからか？ ならば何故自分には前世でも今生でも^{いまだに}感應能力がうまく扱えないのか？

脱出警告の赤い光が管制ユニット内をグルグルと回る。

Gの後遺症と疲労で朦朧し、心を満たし始めた迷いと妄想をユーリーは歯を強く食いしばることで振り切った。

（考えるな！ 今は奴を倒す……倒して——）

『大佐、もう十分でしょう！ 戦闘を終了してください！』

こちらへの通信ではなくミドヴィエチからの通信からトルストイの声が聞こえた。

『それはコイツが決めることだ。どうする小僧？ 負けを認めて生き延びるか、死んで姉と同じ墓に入るか』

「ふざけるな！ 俺はまだ戦える！ リューだって死なない。俺が、俺は——！」

アリゲートルに残された力は少ない。主脚は両断、跳躍ユニットは一基のみ。そして武装も残されたのは山刀のみ。マチェットナイフ

絶望的、どころではない。普通ならLIVESが戦闘不能と判断して自動的に仮想戦闘を終了させているところだ。

「絶対に、絶対に絶対に絶対につ！ 負けられないんだあああああ
！——」

『あくまで降参しないつもりか……ならばいい。最後まで抗あらがって見せろ！ 自由が欲しいのなら、このオレを殺して見せろ！』

両手のモーターブレードをパージし、徒手空拳となるミドヴィエチ。体を大きく開くスタイルは生身のザンギエフそのもの。

そのミドヴィエチ目掛けてユーリーは最後の力を込めてフットペダルを蹴り飛ばす。

臨界まで引き上げられる跳躍ユニットの出力。その圧力にイエロークンデーションだったジェット・ロケット混合エンジンの内部制御弁は耐え切れず破損する。文字通り爆発したそれは暴走ともいえる状態で上半身だけのアリゲートルの体を宙に浮かべ、ミドヴィエチの元へ弾き飛ばした。

「あああああああああー！ー！ー！ー！！！！」

アリゲートルは両脚部の無い、しかも片方の跳躍ユニットという状態から奇跡のようなバランスで飛び続け、ミドヴィエチの管制ユニット目掛けてマチェットナイフを突き出す。

そこからはまるでスローモーションのようだった。

跳躍ユニットの”爆発”に押し込まれながら残った体全体で腕を突き出すアリゲートル。

ミドヴィエチの胸部装甲が火花を散らして削れていく。そのまま装甲を貫き通し、管制ユニットの中のザンギエフを刺し殺す算段だったが、ここでなんと装甲に食い込んだ、ナイフの先端が胸部装甲から頭部へ、上へ上へとずれていく。アリゲートルとナイフは一直進しているにも関わらず《……………》。

そして遂にナイフが空を切り、事態に気づいたユーリーが機体正面——即ち地面の方を見た瞬間、仰向けにブリッジしたミドヴィエチのカメラと目が合った。

ガシツとアリゲートルの腰にミドヴィエチの両手が巻きつけられる。

『——ファイナルッ!!』

スープレックス。

暴走飛行だった状態から更に加速をつけて地面に叩きつけられるアリゲートル。

同時に今まで網膜に送られていたレーザーが途切れ、Gとコンデイションモニター以外に外部を把握する手段が無くなる。

凄まじい衝撃は管制ユニットや強化服を素通りし、内臓を傷つけられたユーリーは鼻血を吹きながら口からも血を吐いた。

「頭部、ロスト。肩部コンディションレッド、両腕、ロスト」

「……リユー、ごめん……ごめんよ!」

『——アトミック!!』

二度目のスープレックス。加えて今度は腰椎部への膝蹴りが入る。もはや爆発と呼べるほどの振動が管制ユニットを襲い、潰れた電装系やパネルモニターが弾け飛び、破片が強化装備やユーリーの露出した肌に突き刺さる。

「俺にもっと……もっと力ちからがあれば……!!」

「——主電源、
ダウン」

『——バスタアアアア!!!!!!』

スクリューパイルドライバー。

もはや自分や機体がどんな状態か想像もつかない。

痛覚は無い。ただ電源の落ちた管制ユニットの中はひたすらに寒くて眠い。

(力が……ガンダムがあれば……)

目を閉じる直前、昏い暗黒の中に光を見たような気がして、ユーリーは手を伸ばしながらその意識を手放した。

*** 同日 アラスカ州タルキートナ クリティアン・セン湖畔*
**

『こちら消防班から管制室へ。エンジンの火災は鎮火した。推進剤が残り少なかったのが幸いだったな』

「こちらCP。了解。ご苦労だった」

『こちら救護班。ハッチの強制解放はやはり駄目だ。これからソウで装甲ごと管制ユニットをこじ開ける』

「了解。中身ごと切らないよう気をつけてくれよ」

『ああ、まかせとけ。こっちはプロだぜ』

激戦後のクリスティアン・セン湖に消防班と衛生兵を向かわせたトルストイ。

神経を張り詰め続けた彼はザンギエフから届いた戦闘終了の報告に脱力し、額に手を当てながら椅子にもたれかかった。

「……なあモリ大尉。あの子供生きているかな？」

モニターにはもはや原型がなんだったかわからないほど破壊されたアリゲートルと僅かに管制ユニットに傷をつけたミドヴィエチが緊急車両と共に写っている。この惨状を見てあのアリゲートルが今朝工場から届いたばかり新品だったとは誰も思わないだろう。戦車級にたかられた戦術機でもあそこまで酷くはない。

「……………」

問われたモリ大尉はわからないという風に首を横に振った。彼は生来無口な人間で上官の命令に答える以外は殆ど口を開かない。

「あと最後の特攻。^{カミカゼ}一体どんな操作をやれば足も片方の跳躍ユニットも無い状態で戦術機をまっすぐ飛ばせるんだ？　というかあの速度を仰け反って掴むなんて、うちの大佐はどういう反射神経してんだよ」

「……………」

日本出身であるモリ大尉に合わせてカミカゼと言ったが、言った後でトルストイにはそれがぴったりの表現のように思えた。

神が起こした風。だからカミカゼ。奇跡の攻撃であり、単なる破れかぶれのスーサイドアタックとは次元が違う。

「なあ、あの子供生きてるといいなあ」

「……………」

無意識に繰り返すトルストイに相変わらず答えないモリ大尉。

一方管制室のオルタネイティブ計画技術者側は大いに盛り上がっていた。

『こちらスエーミ。対象の思考波観測には成功。ただリーディングには失敗しました』

『ドウヴァツアッチアジン。同じく』

『ストーヂエーシチ、同じく』

シエスチナの少女達の返答と共に膨大な観測データが管制室に流れ込んでくる。そこに技術者達は群がって涎を垂らさんばかりに閲覧していた。

「なるほどアジンの思考波の発信は脳全体から行われてたのか。リーディングで観測しにくいわけだ」

若い研究員の一人がデータを見比べながら言った。

「まるで人類の新種だ。一体どういう環境に置かれればこんな使い方ができるんだ？」
「OG下じゃないか？ この間ワシントンDCの学者が論文に載せていたぞ」

「人工的にこの”新種”^{ニユータイプ}の思考波を再現できないか？」

「それなら脳外科手術で人格を消し去って……いや駄目だな。発想が古すぎる。リーディングとプロジェクションを繰り返すことで脳を個を持たないニコイチにするのはどうだ？」

「それだとラグがでるし、数百の実験材料がいる。脳髄だけで被検体を生かせる技術があればなあ。Gを気にせず戦術機に組み込める

のに」

思い思いに見識を語る研究者達。彼らが纏う狂気にザンギエフの副官のみならずオルタネイティブ計画に携わる軍人達も嫌そうに顔を歪める。

しかしこの場でただ一人冷静だったセルゲイは四人のシェスチナの内、最年少の一人から報告が上がっていないことを思い出した。

「どうしたトリースタ？ 思考波の観測に失敗したのか？」

『……いいえ教授。思考波の観測には成功しました。ただリーディングの結果が……』

言いよどむトリースタ。感情の無いはずの彼女に僅かに表情が見えた気がしてセルゲイは大いに興味をそそられた。

「トリースタ。お主のリーディング能力はこの4人の中でも群を抜いて高い。言ってみい、何が見えた」

少女はそれでもまだ少し迷っていたが、やがてポツポツと自分の見えた物について話始めた。

『……光、です。言葉や画像、思考や感情のオーバーフローとも違う光です。暖かくて、でも眩しくない。夜を照らすような優しい光が見えました』

「夜を照らす光……？ 月のような、ということかろう？ ……
…フンツ、ミュータントめ。この期に及んでまだ儂に謎を与えるか。
これでは寿命がいくらあっても足りんではないか」

『教授』

「なんじゃ、トリースタ？ まだ報告があるのか？」

セルゲイの問いかけにトリースタという少女は首を振って否定した。

『……私、もう一度あの光を見たいです。……また彼に会えますか？』

——絶望の地平に朽ち逝く魂の残照。

——滅び行く世界に燃えあがる命の炎。

——この煉獄で与えられた新たな生。

——孤独なまま宇宙で散った彼はで今度こそ光を見つけられるのだろっか

oon / Alternative

Muv - Luv Red / M

7、「……光、です」（後書き）

“ファイナルアトミックバスター”

ザンギエフが放つ怒涛の連続投げ技攻撃。ゲージ3本を消費する。消費されるのが何のゲージかはソビエトの最高国家機密に指定されていて本人と党の最高指導者以外誰も知らない。

いつもご愛読ありがとうございます。

申し訳ないのですがまたしばらく更新を空けます。

8、「俺の名前を呼んでくれ！」

8話 A・W・11年「俺の名前を呼んでくれ！」

——地球

その星はかつて蒼緑の宝石とさえ呼ばれた美しい星だった。
有機物を豊富に含んだ青い海と数万、数十万種類という生命に溢れた緑の大地。本来なら極寒か超高温の星ばかりがあまねくこの宇宙で、生物が生まれ繁栄を謳歌するこの惑星はまさしくこの広大な銀河に神が創り出した楽園だろう。

だが楽園は永遠ではない。

無数にある系統化された確立分岐の世界の中で、ある二つの世界の人類は偶然にもほぼ同時期に己の母星に大打撃を被ることになる。一方はBETA:Beings of the Extra Terrrestrial origin which is Adv ersary of human race——『人類に敵対的な地球外起源生命』と呼ばれる者の侵略によって。

そしてもう一方は第七次宇宙戦争でのコロニー落とし——人類自身の手によって。

奇しくも二つの世界はよく似ていた。人の手に余る破壊兵器の存在、国家間の相克、そして夜よりなお昏い人の心の闇が生み出す悲劇。

この背中合わせの世界はそっくりだが決して繋がることはない。
しかしもし、

——もしも一人の人間が何かの拍子で世界を渡ることができたら？

夢という形で、あるいは記憶という形でこの二つの世界の枠を超えることができる存在がいたのならその人間はどうするだろう？

人間は未来を知ることにはできない。だが一方の世界で起こった悲劇を、そしてもう一方の世界が滅んでいく様子を知れば人は自然と己のなすべきことを悟る。そして手に入れようとするだろう。

悲劇が起こるのならそれを食い止めるだけの知恵を

世界が滅ぶのならそれを跳ね返すだけの意志を

欲しいのは運命を切り開く力——神の如く万能な希望^{ひかり}。

それらは一体どこにある？

*** A・W・11年12月13日 北米大陸旧ニュージャージー
州 ロコシテイ***

終戦から11年。

コロニー落としによつて壊滅的な被害を受けた地球環境は未だ混沌の中にあつた。かつてあつた6つの大陸はどこもクレータに彩られて穴

だらけ。加えてコロニーの大質量によつて巻き上げられた大量の土砂や海水によつて気候が激変したため無事な場所などどこにも無い。分厚い雲によつて空を遮られた北アメリカはほぼ完全に凍結。南米は地殻変動によつてあらゆる火山が噴火し、アフリカとユーラシアはここ十年ずっと半径500キロを超える超大型の砂嵐が吹き荒

れ、激変した気候は動物のみならず植物・微生物にも影響を及ぼしその種類を戦前の半分にまで減っている。

——だがそれでもまだ人類は生きていた。

ここロコシティは戦前までは簡素な田舎町であった。都会からは遠く山々に囲まれた盆地の中にあつて、工業は殆ど発達していなかったが、当時では珍しく遺伝子組み換えをしていないトウモロコシや麦をすることで殆どの住民は生計を立てていた。

それは戦後の混乱期にも変わる事無く、苦勞を重ねはしたが住民の努力と犠牲によって細々と農地を維持しながら極寒の11年を過ごしている。

その町並みの中の一軒、11年の風雨と氷雪にさらされてボロボロになった民家から一人の男が現れた。年の頃は20代半ば、左目に走る大きな傷跡とそれを隠すサングラス、それに襟のついた青いコートを着ている。

彼こそ前大戦で無敵を誇った連邦軍のニュータイプパイロット、ジャミル・ニートその人であった。

ジャミルが一軒家から出て街の通りまで出ると通りに停まっていたジープ車から15、6の少女が声をかけた。

「キャプテン、フリーデンから連絡がありました。荷物の搬入と代金の受け取りが完了、バルチャー組合への報告も済んでいます」

ジャミルは少女の報告に黙って頷く。

バルチャーとはハゲタカの意味である。だがこの時代にはもう一つ別の意味があった。対戦中の軍事施設跡を巡り兵器の残骸や電子

部品を漁っては人々に売りさばく者達。人々は彼らをハゲタカになぞらえてバルチャーと呼んだ。彼らは時にお互いに戦い戦利品を奪い合うこともある危険な職業だがその分実入りは大きくこの荒廃した世界では魅力的な職業でもある。

ジャミルは独立してからまだ日が浅いが、ニュータイプ戦士としてアチコチの激戦地に送られていたため誰よりも交戦地点や秘密施設などの位置に詳しく利益を上げることが多い。そのためたった数年で彼は近隣のヴァルチャーの中でも一目置かれる存在になっていた。

「それでキャプテン、お探しのクレアという女性には会えたのですか？」

「ああ。サラ、君がテキサスの廃棄施設で入手してくれたデータのおかげだ」

クレア・アディール。テキサス州ラーフリン基地に所属。後方要員だったが終戦直前に妊娠して退役。

その後の足取りは不明だったが故郷の記載があつたためジャミル達はそれを頼りにこの街まで来ていた。

「いえ、キャプテンのお役に立てて何よりです。ところで……その女性とキャプテンとはお知り合いだったのですか？」

サラは言葉の端に少しの嫉妬を滲ませていた。

このサラ・タイレルという少女は元はジャミルが滞在していた町の町長の娘だ。町長といっても選挙や行政システムによって支えられた者ではなく寄り合いの代表。昔で言う商工組合の長というような意味合いが強い。

彼女は当時駆け出しのバルチャーとして父と取引のあったジャミ

ルに惹かれ、彼の独立——アルプス級陸上戦艦フリーデンの購入に合わせて半ば押しかける形でジャミルの副官となった。

「いや、彼女とは初対面だ。だが私は彼女の事を知っていた」

「それはクレアという女性が何か我々の活動に必要な情報を持っていたという事ですか？」

「そうじゃない。私は……ただ会うべきだと思ったんだ。彼女と彼女の子供に」

沈黙するサラ。

ジャミルは寡黙で理知的な男だが、時折こうして勘や直感をほのめかすことがある。占いや超能力といった類を全く信じていないサラはそれをジャミルが話題を避けるためのポーズだと考えた。

「……そうですか。ではせっかくの対面です。一度その親子をフリーデンにご招待しましょう」

フリーデンの食料庫には今まで仕事で北米中を回る傍ら様々な町で買い集めた珍しい茶葉やお菓子がおいてある。子供がいる女性ならきつと喜んでもらえるだろう。

サラの誘いには育ち盛りの子供にご馳走を振舞いたいという善意も含まれていたが、同時にジャミルが”一方的に知り合って”いるというクレアという女性を直接見極めたいという意図もあったのだ。だが彼女の思惑とは裏腹にジャミルは無念そうに首を振る。

「残念だが無理だ。クレアの娘は5年も前から行方不明、クレアも病気がちでここから離れることはできないそうだ」

「行方不明……！ 身売り目的の誘拐でしょうか？」

「いや、恐らくは——」

ニュータイプ研究所の手の者だろう、という言葉をジャミルは飲み込む。クレアの娘は生まれた時から不思議な力を持っていたという。

そして今はまだ自分が目指しているニュータイプの保護活動をこの少女に知らせるわけにはいかない。

（ニュータイプ研究所……心当たりではユーラシアの大正製薬、ノルデナウ、ポールスター、そして北米のアルタネイティヴ社、ティタノテクトン……どこも研究のためには過激な人体実験をも厭わない組織だ。もし本当にそんな所に連れ去られていたのなら彼女の命が危ない…… 今後は情報屋と接触してその線で当たっていこう）

ジープに乗って郊外に停泊していたフリーデンに戻る二人。

ジャミルは補給の確認をしたら艦の進路を最寄の街に発進の準備をさせようとするが――

「キャプテン、大変だあ！」

デッキに乗って館長席に座るなり、日系人の少年が慌てた様子で転がり込んできた。

「どうしたのよ、シンゴ！？ そんなに慌てて」

サラが少年のあまりの剣幕に驚いた様子で問いかける。

「ま、町に12機のMSが接近中！ 数はドートレスタイプが4、

ジェニスが8！」

「なんだと!？」

「先日ここから北東40kmのカーネルスタリオンシティを襲った夜盗のようです! このままでは……」

「すぐに救援依頼のバルチャーサインを出せ! ロココとナインはどうだ?」

「本人達は行けると言っていますが……」

現状のフリーデンの戦力はドートレス3機。ロココとナインとはフリーデンのメカニックである。

二人のMS操縦技術はお世辞にも高いとは言えず、下の上、あるいは中の下くらいがいいところ。戦闘どころか本来なら搬入や搬出のために少し動かすぐらいが関の山なのだ。

しかも今回は町で売るドートレスを修理するために彼らは2日徹夜している。

フリーデン一行は危険な地域を通る時は必ずフリーのモビルスーツ乗りを雇っていたが生憎、今回は暇を出していた。

「止むを得ん……私が出る!」

きびすをかえして格納庫へ向かうジャミル。

「キャプテン!? しかし、あなたは……!」

叫ぶサラ。だがジャミルは振り返る事無く気密扉の向こうへ行ってしまった。

ロコシティ 市街南部

「ヒヤハツハッハー！いいぞ、抵抗しろ！このオレ様をもっと楽しませて見せろー！」

夜盗は叫ぶと100mmマシンガンを街に向けて乱射する。戦術機の主力兵装を遥かに超える重量と威力を持つ弾丸は容易く高射砲や建物を打ち抜き、マズルフラッシュがひらめくたびにロコシティの防衛装備は沈黙していく。

だがロコシティの町民も黙ってやられているわけではない。無事な高射砲から弾幕が張られ、歩兵用の携行ロケットランチャーを構えた人影が夜盗達のMSに駆け寄る。

「そんな豆鉄砲が効く思ってるのか？こっちはMSモビルスーツに乗ってんだぜ！」

カスタムされたジェニスのオープンマイクでそう叫ぶとバーニアを吹かして高射砲の弾幕を避け、ロケットランチャーを構えていた町民に向かって焼夷手榴弾を投げつける。

本来MSに装備され対戦車、対防護施設用に作られた手榴弾は地面に届くと、設計どおりの熱量を発揮し町民とロケットランチャーを地面の黒いシミへと変えた。

「お前達！燃やせっ、燃やしちまえ！！」

「「「おう！」「」」

彼に同意した夜盗達数人が同じように焼夷手榴弾しょういりゅうだんを使って町を焼き始める。

榴弾の炎は直接威力を発揮するのみならず、大きく燃え広がり重火器や弾薬の集積所に引火して町の被害を一足飛びに増やしていく。

フリーデンから出撃したロココとナインが到着したのはそんな時だった。

「奴ら……！ 同じ人間相手にひでえことしやる！」

「この街にはキャプテンの知り合いもいるんだ。あんな好き勝手をやらせてたまるかよ！」

メカニック二人は眼前の光景に歯を食いしばり、奇襲で仕留めべくビームライフルのトリガーを引く。

だがやはり二人の操縦技術の未熟さはいかんともし難く、ビームの一発は外れ、もう一発もカスタムされたジェニスの右腕を撃ち抜くに留まった。

「なんだあ！？ 今頃守備隊のMSがでてきたのか？」

「たったの2機で何ができるってんだよお！」

新手に気づいた夜盗達は一斉に猛反撃を開始。12本のマシンガンから一斉に放たれた100mmの浸徹弾の弾幕が二機を襲う。

ロココとナインはドートレスに装備されたMS用の盾を構えそれを防ぐが、超鋼スチールでできたそれらはあつという間にへこみ、あるいは削れて見る見るうちに盾としての機能を失っていった。

相手は素人。

経験豊富な夜盗達は一瞬で敵の正体を看破する。大方町でMSだけ購入してろくに訓練を行わなかったか、たまたま滞在していたM

おおかた

Sの行商か何かだろう。

この様子ならそう梃子摺ることはない。だがMSの操縦技術はともかく夜盗達もまた戦闘面で問題を抱えていた。

こそこそと、夜盗の一人が先程撃ち抜かれて落ちたカスタムジェニスの右腕のほうに這い寄る。戦闘の間隙を縫って忍び寄ったジェニスの一機は飛びつくようにMSの右腕を拾うとすぐさま反転し、戦域を離れ始めた。

「へへッ！ もらったぜっ！」

「あ、テメエ！ オレ様のパーツをどうする気だ！」

右腕の無いカスタムジェニスは仲間の行動に気が付くと容赦なくマシンガンに向けてトリガーを引き絞り撃ち抜く。

「お、おい、そんなマジに……ぎゃあああああー！」

装甲の薄い背部からコクピットを撃たれたジェニスのパイロットは即死。

だが今度は四散したジェニスの残骸に向かって6体もの夜盗のMSが殺到した。

「おい、お前ら！ 何してんだ！ 遊んでねーでさっさとあの2機を片付けろ！」

カスタムタイプのドートレスにのった夜盗のリーダー格らしき男が通信で叫ぶ。

「へへ、あんなど素人の相手、5人もいりゃ十分でしょ！」

「そうそう。俺らはその間にゴミ処理でもしておきますよ。ま、せいぜいこれ以上”ゴミ”を増やさないよう気張ってください」

「お、お前らああああ！！！」

「おおっと！」

怒り狂った夜盗のリーダー格のドートレスから味方に向けて銃弾が放たれるが、先程と違い十分に反撃を予想していた夜盗達は難なく射線から逃れ反撃に出る。

状況は12対2から三つ巴に、さらに夜盗達は味方が被弾するたびにパーツを奪い合うため三つ巴から生存競争にバトルロイヤル。

「な、なんなんだ、一体なんだよ、これ……！」

フリーデンのブリッジで戦闘の様子を見ていたシンゴ・モリがそう呟いたのも無理は無い。

——それはまさに地獄の坩堝のような光景だった。

流れ弾の100mm口径弾が民家を襲い、ビームライフルがMSごと背後の官舎を貫く。倒れたMSは数十人が逃げ込んだ退避シエルトを押しつつぶして、サーベルは触れるだけで道路のコンクリートを沸騰・爆発させ、バーニアの余波は周囲にいた住民を車や電灯ごと吹き飛ばす。

そこは少なくとも戦場では無かった。戦場ならば守るべき交戦規定と戦友があり、全ての戦力は敵と味方にキチンと別れて殺しあう。だがこの場は違う。12人の盗賊たちが欲望から先程まで仲間だったMSを狙いそのついでのように住民を殺していくこの場所は憎

悪と怒りだけを際限無く膨らませていく蟲毒の壺だ。

ロココとナインは勿論町への被害を避けたいのだが、彼らが街から離ればもはや乱戦を停める手立てはなくなってしまう。13体の鋼の巨人が武器を振るい入り乱れる決戦場となった町はさきほどとは比べ物にならない速度で被害を拡大させていく。

その中にはジャミルが先程訪ねたクレアの家も含まれていた。

—— 一方フリーデンのMS格納庫。

薄暗いコックピットの中、ジャミルはMSを動かすために必死で足掻いていた。

「……………くっ！ やはり……………駄目なのか！」

脂汗を流し、何度も吐き気を催しながら、気力でなんとかフリーデンから出撃せんとするが、ドートレスはデッキの中でギシギシと音を立てて軋むだけ。操作を受け付けない……………いや、操作しようとするジャミルの意志を彼の体が拒んでいるのだ。

「うう……………」

—— 操縦桿を動かすたび、サテライトキャノンのあの圧倒的な破壊力を思い出す。

手から汗が滲み出し、ブルブルと腕全体が震えだす。

—— 足を伸ばすたびに、自分の間近をコロニーが通り抜け大気に焼

かれながら地球に落下していく様を思い出す。

フットペダルはまるで溶接されたかのように重くドートレスの足回りを泥沼のように固めてしまう。

——息をするたび、己の”能力”を失った瞬間が蘇り、ニュータイプ
プの力に思いあがっていた自分を苛む。

胸が締め付けられるように苦しい。ここは地上なのにまるで真空
の宇宙に放り出されたかのようにだ。

「こんな……こんな体たらくで、本当に元ガンダムパイロットと呼
べるのか……！」

”コックピット恐怖症”。それがジャミル・ニートが背負った戦
争の後遺症である。

すべての原因は第七次宇宙戦争、その最終決戦の中でコロニー落
としを阻止するためジャミルが放ったサテライトキャノンの一撃が
きつかけだった。

ジャミルが成功させたコロニー落とし迎撃は偶然と、戦友である
”彼”の犠牲による産物でしかなかったが対宇宙要塞、または質量
兵器破壊のために作られたサテライトキャノンの威力を目の当たり
にした宇宙革命軍のザイデル・ラッソ総帥は万が一あの兵器がこれ
以上量産されることになれば全コロニーが脅威に晒されるとし、本
来恫喝の手段でしかなかったコロニー落としを強行する。

結果論だがジャミル・ニートはうまくやりすぎたのだ。

もしジャミルがGXの能力を90%程度しか引き出せない並みの
NTであればあの作戦でのコロニーの撃墜率は目標の半分もいかな

かっただろう。あるいはあの時、”彼”の能力を足止めに十分と考えずに任務を捨てて”彼”と一緒にランスローと戦っていれば少なくともGビットは磨り減りGXは本来の迎撃能力を発揮できなかったはずだ。そうすればザイデル総帥もそこまでサテライトキャノンを危険視しなかっただろう。

自分の能力と過信が引き起こした人類史上最大の悲劇。あの時、世界中から聞こえた数億、数十億の死者の苦痛や感情はそれまでのジャミルの矜持や価値観を吹き飛ばして余りあるものだった。そして何より平和な世界を見せるという約束があつたにも関わらず、自分の一撃は地球に取り返しをつかない傷を負わせ、約束を果たす機会を永遠に反故にしてしまった。

”——ジャ——ル——ッ！”

「ぐっ……」

突如、激しい頭痛がジャミル襲う。

同時にそれまでかろうじてバランスを取っていたドートレスは数台のクレーンを巻き添えにして金属のワイヤーを何本も引きちぎりながら悲鳴のような音を立てながら倒れこんだ。

外では相変わらず激しい砲声と爆発音が鳴り響いている。ロココとナインはまだ戦っているのだろうか。

メカニックである彼らですら戦っているというのに、自分はようやく会えたクレアを守るところか、倒れたMSを起き上がらせる事もできない。

惨めさと悔しさと自己嫌悪がこみあげる。

「これが今の私……。私に、こんな！　こんな男に価値なんてあるはずない！　君に命がけで助けてもらうような価値などあるわけが、

ない……」

コックピットのモニターにサングラスから零れた熱い雫がポタポタと降り注ぐ。

”——ッ!”

「誰か……助けてくれ。誰か、誰でもいい……！ 私では駄目なんだ！ クレアと、彼女の娘を……この町を、ルチルを、ニュータイプを、地球の皆を……私を……」

この暗黒の世界を変えられる人間……それは”彼”のようなニュータイプなのか、あるいはかつての戦争を戦ったブラッドマンやザイデルのような人間か。ジャミルにはわからない。

頭痛が段々と酷くなる。頭の中で誰かが、遠いどこから語りかけているような気がする。だが能力を失ったジャミルにとって、その誰かの精神による接触は多大な苦痛を伴っていた。

耳や涙腺から血が流れ、意識は白く濁っていく。

”——ジャミル、ジャミル・ニート！ 俺が助けるよ！ きつと助けてやるよ！ だから、俺の名前を呼んでくれ！ 俺の力を、感じてくれえーっ！”

異世界から届いたその言葉を聞き届けるよりも早く、ジャミルはその意識を閉ざした。

『キャプテン、近隣のバルチャー艦から援軍が到着しました！　口
ツソ・アラマంతとローザ・インテンソ一味です！　……………キャ
プテン？　キャプテン！？』

8、「俺の名前を呼んでくれ!」(後書き)

遅れてすまにい。

9、「待っています」

9、「待っています」

***1987年 6月19日 ソ連領アラスカ タルキートナ国
連軍基地 基地司令室***

ザンギエフとユーリーの”実機演習”から一週間。
セラウイクから帰ってきたヴィクトール・ガスパロフ基地司令は
執務室で数年ぶりに友人であるミハイル・ザンギエフと再会した。

「久しぶりだなミハイル」

「ああ」

「直接会うのはハバロフスク以来だな。私は国連軍のこんな後方に
いるが君の噂だけは相変わらずよく耳にする」

ザンギエフは大佐、ガスパロフは少将だが二人の会話には階級の
壁がない。

それは国連軍とソ連軍という垣根が齎^{もたら}した気安さであると同時に
ガスパロフのザンギエフに対する信頼の表れでもあった。

「それで、例の手続きは済んだか？」

「済んでいるとも。あとはミハイル、君がここにサインすれば終わ
りだ」

そう言つてガスパロフはデスクから取り出した書類をザンギエフに手渡す。

書類には国連軍の公用語である英語で国連軍タルキートナ基地が備品の譲渡に合意する旨の記述がされており、ソビエト連邦政府が幾つかの付帯条件に加え2100億ルーブルを支払うことでオルタナティブ計画の産物である”生体部品”を買い取るとされている。

「しかし……今更ながら馬鹿げた話だな。たかだか人工ESP発現体の2体……いや、実質1体だったか。原価2億ルーブルもしない物のためにこんな大金を払うとは。一体君はこの予算をどこから引っ張ってきたんだ？」

「……殆どは先月KGBが逮捕した我が国のGPU（政治局）長官が米国への脱出資金として不正に貯蓄していたものだ。立場から事件を公にするわけにはいかず、かといって悪戯に官僚どもに使わせるには多すぎる金額だったので宙に浮いていた」

「ふむ、では残りは？」

ザンギエフは黙つて懷に手を入ると内ポケットから黒いカード——ソビエト連邦内で使われている電子マネーカードを取り出して見せる。

「なるほど。だがいくら世界的英雄といえどこれだけの散財は厳しいだろう。そもそも、何故君はあの子供にこれほどこだわる？」

「オレの直感だ。あの子供はきっと党と祖国奪還を待つ同胞の役に立つ。金など惜しくない」

「あいかわらずの頑固一徹といったところか。ところで”もう一つ

の条件”も忘れていないだろうな？ 君の要望を通すために私は随分苦労したんだぞ」

いくらホスト国であるソ連が大金を出すと言っても国連——特にアメリカは他国がオルタネイティブ計画を私物化するのをよしとするはずが無い。

故にザンギエフが払った金額の一部はアメリカの外務省高官や国連の官僚たちを買収するのに使われ、残りの買収を受け付けない人間——特に以前からソ連とオルタネイティブ3の癒着関係を批判していた国連事務次官補のゲンジョウサイ・タマセを中心としたグループを説得するためにこの国連軍少将はこの一週間殆ど寝ずにアラスカとアメリカ中を渡り歩いていた。

「そちらは手配済みだ。議会にいる私の”友人”に頼んで党のポストを用意させた。あと一週間もすればお前が指名した通り、同志ヴァシチェンコはしかるべき役職を得るはずだ」

「ハッシュー素晴らしい！ これで国防省とKGBへのおおよその根回しは完成した。あとはこのオルタネイティブ計画を成功させれば、私は晴れて党中央委員会入りだ」

「ヴィクトールよ。お前は党に入って何をするつもりだ？」

「何を、とはくだらないことを聞くのだな。私が望むのは真の公正と平等を体現した国家だ。だが社会主義化したソ連は外からでは変えられん。ならば中央に入ろうというのは当たり前前の考えではないか」

「そつか……お前は変わったな」

「私が？　そうかな？」

「ああ。以前の――チェコで過激派や腐敗した政府を相手取っていた頃のお前ならこんな回りくどい手は使わなかっただろう」

チェコ動乱。

1978年に発動されたパレオロゴス作戦の失敗によって起こった歴史上二度目の“プラハの春”である。

当時のチェコはチェコスロヴァキア共産党政府つまり事実上ソビエト連邦の支配下に置かれており東側陣営として東ドイツやフィンランドなどの東欧国家と共にワルシャワ条約機構の一員としてBETA戦線を支えていた。だがパレオロゴス作戦以降、BETAはユーラシア北西部で猛攻を開始、頼るべき盟主であるソ連は広大な領地の東西で分けられ支援の手は途絶えてしまう。

東からは間もなく押し寄せるであろうBETAの波、最悪の場合海を隔てたイギリスや合衆国、それにアフリカに退避できる西側諸国と違い単なるソ連の衛星国家でしかないチェコには逃げ場が無い。

この極限状況においてチェコスロヴァキア政府はまったく突然にワルシャワ条約機構からの脱退とソ連の管理下を離れて自由主義経済への転換を宣言した。それは一部国民の意志もあったがほとんどは国家を実質的に取り仕切っていた共産党の幹部達の暴走から行われたことである。

だがそんな独断の結果、後方支援を担っていた工業国家の突然の撤退は東ヨーロッパでBETAと戦っていたワルシャワ条約機構に少なくない被害を与え、西側諸国も何の相談も条件も無く勝手にBETAとの戦闘を放棄したチェコスロヴァキアを公式に非難するなど諸外国からの反応は最悪と言えるものであった。

また国内でも準備期間の無い国家改革に選挙法や経済法の変更などが間に合うはずもなく、組織体制や官僚や政治家の意識は強権的

だった社会主義国家であった頃のまま。しかも自由主義への転換によつて長年チェコ人から受けていた民族差別や貧しさから解放されるはずだった少数民族スロヴァキア人やハンガリー人はそのねじれを解消するために今まで以上の重税や差別に晒されることになる。

「あの頃か…… そうだったな。とにかく恐ろしい時代だった。我が国はBETAの脅威に加え、外からはソビエトとアメリカから外交圧力、私の住んでいた田舎町でも夜になれば血に飢えたスロバキア人やモラヴィア人が我々チェコ人を襲おうと外をうるついでた。……尤も、その逆の場面も何度も目撃したがね。ともあれ、当時はまだ守るべき祖国があつた。滅びは確実だったが同胞の名誉と地位を守るためなら私はどんな手でも使っていただろう」

そして1980年に入り中欧にまでBETAの足音が近づくとチェコスロバキアで加熱され続けていた民族問題、経済格差、外交的軍事的政治的問題など人類が知る限り殆どの社会問題が一斉に爆発する。単なる暴徒でしかなかったそれぞれの民族主義の過激派は軍閥となり、それを抑制すべき旧共産党チェコスロヴァキア政府の上層部は立場を利用して自分の亡命先を探すために腐心し始める。つまりこの時点——BETAの大規模侵略を目前にした1980年の時点で——チェコスロヴァキアという国家は空中分解し無政府状態になったのだ。本来なら、あるいは世界情勢が健全であれば周辺国家はチェコスロヴァキアがこのような事態に陥る前に援助の手を差し伸べただろう。経済援助、移民先の確保、又は軍事的介入があればチェコスロヴァキアはこうも簡単に崩壊しなかったはずだ。

だが当時は混迷の時代。まだ国連の力も弱く、大国からも東西両陣営に同時に喧嘩を売った国家に手を差し伸べようという意見があるはずもない。

かくして一時は工業国家として世界中に名を馳せた国家チェコス

ロヴァキアは一夜にして人類の欲望と怨嗟の渦巻く地獄の釜ような場所となった。

ヴィクトール・ガスパロフの名が聞こえ始めたのはこの頃である。

「……まあ昔のことはもういい。それよりもミハイル。これからどうするつもりだ？」

これ以上の回想は無用だと判断したガスパロフは話題を打ち切つてザンギエフに新たな話題を振った。

「ひとまずはアイツが目覚めるのを待つ。その後はA - 01の衛士おほっちゃんと一緒に前線に連れて行くつもりだ。元々私はこのタルキートナ基地には教導の為に来たのだからな。他の人工ESPの第五世代とやらがまだ何年も戦術機に乗れない以上私がここを離れることに問題はあるまい」

「やれやれ、A - 01はあの子供のついでか？ 無事に帰してくれるんだろうな？」

「今はBETA共もヨーロッパの蹂躪に忙しくこちらへの圧力は弱い。多少危険でも将来ハイヴ突入を考えるのならばA - 01は今の内にノギンスクハイヴの間引きや北欧戦線で力をつけておくべきだ」

「ふうむ……まあ軍事に関しては君が専門だ。ここは君を信用するよ。だが、こう見えて私の手駒は少ない。全滅は避けてくれよ」

ガスパロフは明らかに納得していなかったが、長い付き合いのせいで自分が文句を言ったところでこのモヒカンの巨漢が衛士の教育にまっとうな手段を使うはずがないのはわかっている。

「約束はできんな。頼むなら俺達が戦うBETAにでも言ってくれ」

「ふん、連中に耳さえあればな……っと」

ガスパロフは己の言葉を遮りLEDの青い光を点滅させる端末に目を落とした。

報告は医務室からだった。

「ミハイル、朗報だ。例の子供が目覚めたらしい」

「そうか。ならば明日には本土へ出発する。世話になったな」

「明日か？」

ガスパロフが本気で驚いた様子で言った。

「久々の後方なんだろう？ ゆっくりしていかないのか？」

「私に休息は不要だ。それに……いや、なんでもない。また会おうヴィクトール。今度会う時はセラウイクの党大会かもしれんな」

——懐かしい夢を見ていた。

それは彼の元いた宇宙への移民が当たり前にある世界、MSが躍

動し戦う世界、そして自分の死と誇るべき戦友が作った戦後の世界。
だが夢の中の世界はユーリーの知っている姿とは大きくかけ離れていた。凍りつき穴だらけの大地、僅かな燃料や食料にしがみついた人々、そして戦争で心に傷を負い自責の念で涙を流すジャミルの姿。

こんなはずではなかった。

確かにユーリーは自分の意志に反して連邦軍のパイロットにされたが、少なくともこんな世界を望んであの辛い戦争を戦ったわけではない。自分は戦って戦い抜いて、地球を守り、知り合いや愛した女たちを守り、そしてかけがえの無い戦友をを命がけで救って死んだ。そのはずだったのに――

『こんな……こんな体たらくで、本当に元ガンダムパイロットと呼べるのか……！』

世界の壁を越えて触れたジャミルの心。そこに浮かぶのは全ての元凶たるコロニー落としの光景。究極とも言える後悔と自責の念。

あの戦争がもたらしたのは破壊だけだ。大儀を果たした訳でも平和を手に入れたわけでも無い。死んだ人間に何も残らなかったのは勿論、あの戦争は戦って生き抜いたジャミルにも恐怖と後悔、そして己を知るものがない孤独の地平だけを残したただだったのだ。

”ジャミル……！！ 俺は覚えているぞ！ 最強のNTパイロット――ジャミル・ニートがどれだけ強かったか、どれだけ勇敢だったか！”

ユーリーとジャミルという二人のNT能力があれば聞こえるはずの声はしかし、世界の分岐という分厚い壁と片方の能力の喪失によって届かない。

『これが今の私……。私に、こんな！　こんな男に価値なんてあるはずない！　君に命がけで助けてもらうような価値などあるわけがない……』

” そんなことない！　そんなこと、俺は…… ”

無力さからサングラス越しに涙のしずくを落とすジャミルの姿がユーリーにはリュドミラを守れなかった己の姿と被^{かぶ}って見える。

せめて声を、想いを送ればとジャミルの方へ手を伸ばすがその手は形すら持つ事はない。

何故ならユーリーはこの世界の人間ではないから。命を失い、肉体を失い、名前さえ失った彼にはこの世界へと干渉するための因果が無い。

『誰か…… 助けてくれ。誰か、誰でもいい…… 私では駄目なんだ！　クレアと、彼女の娘を……！　この町を、ルチルを、ニユータイプを、地球の皆を…… 私を……』

救いを求めるジャミルに触れるためにユーリーは感応を更に高める。それがジャミルを傷つける行為だと分かっていたが、それでもユーリーは世界の垣根を超え、再び戦友に声を届けるために全力を振り絞る。

だが突如ユーリーの意識から音が、光が遠のいていく。まるで飴が熱で溶けるように今までかりそめの形として保っていた体は緑色の炎に包まれ形を失っていく。

世界は異物を許さない。

ただ静観しているだけならいい。だが因果も力も無いまま無理矢理に壁を破壊し人の心に触れようとするユーリーの行為にこの世界

は猛烈に反発したのだ。

ユーリーの魂が急速にこのジャミルのいる世界から切り離されていく。

”——ジャミル、ジャミル・ニート！ 俺が助けるよ！ きつと助けてやるよ！ だから、俺の名前を呼んでくれ！ 俺の力を、感じてくれえーっ！”

せめて最後に、と思いユーリーは声を張り上げ既に無いはずの手を精一杯ジャミルへと伸ばす——

*** 同日 タルキートナ基地 オルタネイティブ第三計画医療局

ユーリーが眠っているベッドに近づく若い少女が一人。

ドアやカーテンに身を隠してキョロキョロと周りを警戒しながらまるで小動物を連想させるような動きでベッドに近づいていく。

少女は部屋の入り口からたっぷり五分はかけてベッドにたどり着くとその上にかかっている名札を確認した。

「……この人が第五世代のアジン（一番）」

無表情な魔m、だが好奇心をもってベッドで眠る少年の顔をまじまじとみつめる。

正面から、上からそして横から。何かを探すようにあらゆる角度から覗き込む。だが生憎と少女の探し物は見つからなかったようで、

「……光って、ないです」

がつくりと肩を落として少女は呟いた。

と、そこで目の前で眠るユーリーの唇が動いていることに気づく。

「——れ」

「……？」

それは本当に微かな音。

よく聞こうと少女が耳を近付けたその時——

「——てくれえ——！！！！」

「ツ！！！？~~~~~~~~！！」

跳ね起きた少年の額が少女の頭を強かに打ちつけた。

「なんだ？ 目に涙が……？ ……ってあれ？ ここは？」

キョロキョロと辺りを見回すユーリー。

見れば自分は病室らしき部屋で点滴や計器に繋がれ、そして傍らには……額を押さえた女の子？

「なんだ、お前？ 頭でも痛いのか？」

「——ッ！？」

手を差し伸べられてビクリと反応する。少女にとってはぶつけられた痛みや怒りよりも突然彼が目覚めた驚きのほうが強かったようだ。

頭を押さえながら恐る恐るといった具合にユーリーの方を振り返る。

少女の容姿は銀髪に碧眼、ウサギの耳にも似た奇妙なヘッドセツトをつけている。年齢は5、6歳といったところか。

「お前……シエスチナ第六世代か？ 珍しいな、シエスチナと会えるのは特殊カリキュラムだけかと思ってた」

「……セルゲイ教授に、特別に許可をもらいました」

「へえ、あの爺さんがねえ……女の子の知り合いができるのは大歓迎だから別にいいけどな。俺はユーリー・アドニー・ビャーチエノワだ。お前は俺に”なんて呼んで欲しい”？」

不思議な含みを持たせてユーリーは言った。

「……………？ 私は第六世代のトリースタ（300番）です。他に型番はありません」

「そうか……ま、いいさ！ 特に要望が無いなら、今から俺はお前をチビと呼ぶ。何故なら俺より小さいからだ。いいな？」

「……………不合理です。私より背の低いシエスチナはいくらでもいるのに……………」

「その時はその時だ。そいつには別の呼び方を考えてやるさ」

「……………」

トリースタは理解しがたい言動をリーディングで読み取るべく彼を凝視する。だが第六世代最高峰と言われた彼女の能力をもつてしても彼の特性は破りがたく、僅かに見えたのは感情の残滓のような儚い色だけ。

「で、チビ。お前俺に何か用なのか？」

「……ひかり」

「は？」

「光を見に来ました」

端的過ぎる表現に今度はユーリーがいぶかしむ番だった。

「光？ 電灯ならこの天井にもついてるだろ？ それとも日の光のことか？」

首を振って否定するトリースタ。

「……どちらも違います。光っていません」

「なあチビ、ひょっとしてお前目でも悪いのか？ それとも頭が悪いのか？」

ユーリーは真剣に目の前の少女の健康を心配して言った。

だが相手は人工ESP発現体、特に第六世代としてESP能力への影響を抑えるために、感情を芽生えさせる要素を徹底的に排除した教育を受けてきた少女である。

「……いいえ。私の視覚と脳機能は正常です」

「そうか？ うーむ、絶対何かがおかしいと思うんだがなあ」

首を捻るユーリーに対してトリースタは特に怒りもせずに医者
の問診のように淡々と自分の状態を答える。

「ま、いいや。よくわかんないけど、俺も一緒に探してやるよ。多
分、お前にしか見つけれないものなんだろう？」

「それは……はい」

トリースタは自信なさに頷く。

確かにF-14に乗ってあの模擬戦を観測したシエスチナの中
で”あの光”を観測できたのは自分だけだ。だが内心ではあれだけ
力強く暖かい光を何故他の姉妹達が見つけれなかったのか疑問に
思ってもいた。

「その代わりちょっと教えて欲しいんだ。リユー……俺の双子の姉
さんが多分この建物のどこかにいるはずなんだが、知らないか？」

「姉さん……リュドミラ・アドニー・ビャーチェノワ……？」

「そうそう！ おお、わかるのか？」

コクンと頷き部屋を立ち去ろうとするトリースタ。

ユーリーは慌てて己にまわりつく点滴や計器を引き剥がして彼
女を追いかけた。

リュドミラの病室は思ったよりずっと遠くそしてずっと嚴重な医療体制が整えられていた。

ベッドの周囲は何層にも渡ってビニールシートのテントによる防疫対策がとられ、部屋の外から見えるだけでもユーリーの身長を超える装置や色とりどりの薬液が入った点滴がいくつも見える。

ただ不審な事にこれほど熱心な治療が行われているにも関わらずこの部屋には医療スタッフが一人もいない。部屋の鍵は勿論、テントの外にはご親切にエプロンや消毒液までもが用意され彼女に会う手はずが完璧に整えられていた。

ユーリーもそのことを怪しく思ったが、あくまで目的はリュドミラの見舞いである。誰の目論見であれ今は有効活用させてもらうしかない。

トリースタとともにシートの前にあった装束一式を素早く身につけると、深呼吸をしてビニールのカーテンを潜り抜けた。

「よお、リユー。元気にしてたか？」

返事は無い。

ベッドにはあの時、演習場で見た姿をそのまま凍らせたようなリュドミラが眠っている。唯一の違いがあるとすればその頭部。頭蓋骨の手術のため彼女が自慢にしていた髪は全て剃られ、変わりに白い包帯が隙間無く頭を覆っているぐらいか。

「元氣……なわけないよな。ごめんな……俺が馬鹿だったせいじゃない風……」

そんな彼女の姿を見て改めてユーリーの心に強い悔恨が湧き上る。それは敗北の屈辱や力への渴望を上回る程の思い。過ぎ去った時間

への狂おしいほどの郷愁であつた。

そつと両手で血の気の無い彼女の手を握る。

「俺さ、夢を見てたんだ。」昔”の、俺が救つた大切な友達が出てくる夢だ。夢の中はすつげえ寒そうで貧しくて……どいつもこいつも生きるのに必死で殺氣立ってて……アイツ、泣いてたんだ。

——ハハツ、酷い奴だよな、俺つて。自分には特別な力があるから友達も地球も救えたから、だから今度もきつと一人で切り抜けてみせるつて^{いき}粹がつて……。でも全部さ……全部、俺一人の思い込みだつたんだ。友達は全然救われていなかったし、お前をこんな目に合わせて、勝てるとタ力を括つていた戦術機でもザンギエフのおっさんにボロクソに叩きのめされた……！」

思えば生まれ変わつて八年。唯一の家族であるリュドミラには自分の秘密や本音を打ち明けたことは一度も無かつた。彼女が嫌いであつたわけでも無関心であつたわけでもない。自分に最も近い存在であるとなつていながら、ユーリーは初めて得た肉親という相手にただ戸惑つていたのだ。

「こんなことなら！ お前を、アイツを傷つけるだけなら、記憶なんて！ 力なんてなければよかった！ 自由なんて求めないで、ただ人間兵器としての運命を受け入れていれば………たとえばBETAに殺されるだけの人生でもお前と死ぬまで一緒にいられたのに……」

ユーリーには確かに力がある。前世ではニュータイプまたはガンダムパイロットとして。この世界ではESP発現体であり第五世代として期待された衛士としての申し分ない力を持っている。

だが彼の力は唯一の、そして絶対の物ではない。彼の操縦技術は

ランスロー・ダーウエルやジャミル・ニート、ミハイル・ザンギエフには及ばず、人類を革新に導くはずのニュータイプとしての感応能力は戦争の趨勢を変えるどころか半径50mまでしか発信できないという欠陥を抱えている。

そんな中途半端な人間が世界を救い、自由を得ようとした結果がああジャミルと今のリュドミラを生んだのだとユーリーは深く後悔していた。

大きく息を吸い、己の決意を胸に決める。

「……リュウ、俺はもう自分の未来は望まない。戦って死んでも、オルタネイティブ計画に実験で殺されても文句は言わない。でも……どんなことになっても、どんなに苦しくても必ずお前を元通りにしてみせる。どうすればいいか見当もつかないけど……死ぬまでにこれだけは絶対になんとかしてみせる……！」

固い固い決意を最愛の姉に誓う。

だが変化は彼の心中以外にも起こっていた。それまで彼の隣にたたずんでいるだけだったトリースタが小さな声をあげる。

「——あつ」

（——！！？ 光が！ でも、どうして！？）

その場で唯一、変化に気付いたトリースタは驚きで大きく目を見開きながらリュドミラの方をじっと見つめた。

（どうしてリュドミラ・アドニー・ビャーチェノワ”の中にあの”光”が……？）

それは間違いなく”光”だった。生気のないリュドミラの体を包む光。優しくて暖かい——トリースタがもう一度見たかった心の光だ。

トリースタの思考を疑問が埋め尽くす。あの”光”は突然変異であるユーリーの物ではなかったのか。それが何故、普通のビャーチエノワ、それも昏睡状態の彼女から発せられるのか。双子だから？
きょうだい姉弟だから？ それとも単純に彼に深く関わっているから？

改めてユーリーを凝視してみるが彼からは相変わらず感情の残滓しか拾えない。そして”光”を持ったリュドミラの方も感情や思考はフラットで相変わらず目を覚ます気配はなかった。

だが考えられる原因はこの男以外有り得ない。この光は試験管で生まれた突然変異にして第五世代

二番目の一番、ユーリー・アドニー・ビャーチェノワが起こした物だ。

どうやったのかは分からないが、この光は彼だけでなく他人も持つことができるらしい。

じつと自分の胸を見つめるトリースタ。

リーディング能力では自身の感情を見ることはできない。だがこの二人に宿った物は自分の中には無いと断言できた。

（もしも、もしもこのベッドに眠っていたのが私だったら……私がこの人と姉弟だったら……私にもこの光が……？）

思い出の無いこの人形のような自分の中にもあの暖かい光が宿ったのだろうか。とトリースタは考える。

——静かな音と共にICUの扉が開かれたのはその時だった。

「見舞いは済んだか、ビャーチエノワ」

屈み込むようにして扉を潜ってきたのはミハイル・ザンギエフ――これほどの巨人を生まれて初めて見たトリースタは怯えてユーリーの背に隠れた――彼は無菌状態のカーテンには近づかず壁際にもたれかかった。

「ああ、済んだよ。それと、ありがとうな。アンタなんだろう？

リユーにちゃんとした治療をさせて、俺のために人払いをしてくれたのは。オルタネイティブ計画の奴らじゃ用済みは即廃棄だから」

「……事故とはいえ、怪我を負わせたのはオレだ。責任は取る。その代わり、分かっているな？」

「アンタの下でソビエトのために戦えば良いんだろう？」

「そうだ。貴様は本日より中央政治局直属独立部隊の二等兵として我が軍に登録された。明朝0700時にここを発ち前線に出る事になる」

「二等兵！？　おいおい、衛士の階級は少尉からだろ！？」

「特例で認めさせた。ブートキャンプ正規訓練も受けていない身分なら十分な優遇だろう。……なんだ？　不満があるのか？」

「……………いや、いいさ。階級がなんだろうと同じ、俺は戦うだけだ」

唇を尖らせながらユーリーは渋々自分の境遇を受け入れた。

——クイクイツ

自分の袖を引っ張られる感触にユーリーは振り返る。

「……あの、ユーリー……兄さん。もうここには帰ってこないんですか？」

ユーリーは兄と呼ばれたことに少し驚いていたが、すぐにトリースタの切実な様子に気付くと、励ますように彼女に笑いかけクシャクシャッと小さな頭を撫でた。

「心配するなって！ 俺は絶対に帰ってくる。また会えるさ」

「……………」

「その頃にはお前も大きくなってもうチビとは呼べなくなってるかもしれないけどな。大丈夫だ。戻ってきたらちゃんとリユーだけじゃなくチビ、お前にも会いに来る。約束するよ」

「……はい。私待っています。きっと、ザンギエフさんみたいに大きくなって兄さんを待っています」

ザンギエフの身長〃214cm 体重〃121kg

ユーリーは頬を引き攣らせながら、喉から辛うじて”ほどほどにな”とだけ答えた。

10、「大佐を信じて突き進め！」

10、「大佐を信じて突き進め！」

***1987年 6月25日 ソ連領シベリア軍管区イルクーツ
ク州***

『CPよりレッドサイクロン。ポイントGー17から支援砲撃に対するレーザー照射を確認、大隊規模と推測されます。司令部より至急の光線級の要撃^{ようげき}が要請されました』

「引き受けた。こちらからは私と配下の2個中隊が行く。増援は不要だ」

『^{ダー}了解』

CPからの通信にミハイル・ザンギエフが2体の要撃級を同時に撃ち殺しながら答えた。

彼が己の部下と配下のA-01と共に出撃し戦闘を開始してから既に2時間。侵攻してきた師団規模のBETAに対してソビエト連邦第41軍・36軍共同の防衛線は戦闘を続けていた。

軍隊という組織の中では異色の独立行動権を持つザンギエフの部隊はCPから情報を受けつつ適時ザンギエフ独自の判断、あるいは軍司令部の要請に答える形で戦場を移りながらこの戦闘に参加している。

「ヤスタラヴ中隊、ゼムリヤ中隊！ 60秒後にポイントG-17の光線級の排除に向かうだ。それまでにここを平らげる！」

『……了解』^{ダー}

ザンギエフからの命令を受けて両隊長―ヤスタラヴ01のマギン中尉、ゼムリヤ05で臨時の中隊長であるハバロフ少尉から疲労の滲んだ返答が返る。汗をかき、息も絶え絶えな彼らはつい先程まで意気揚々と戦術機に乗り込んでいた若武者達とは似ても似つかない。だが無理も無い。彼らにとって今回の出撃は初めてBETAと相対する戦い。それも純血のロシア人である彼らは被支配階級である少数民族を抑えるための対人訓練ばかり受けてきたのだ。

今回ザンギエフがアラスカから連れてきたA-01の部隊はアリゲートル1個大隊36機。エリートとして2年以上の教育と最新の装備を持って戦場に乗り込んだ彼らのうち、4機が死の8分を超えられなかった。（ちなみに最後のヴァダー中隊は現在別行動中である）

『大佐、レーダーに生体反応なし。周辺の敵の殲滅を完了しました』

「よし、各小隊はコンディションチェックとリロード。小隊の準備が完了し次第、中隊長の指示で楔式型陣形アローヘッド・ツィーを構築しポイントG-17のBETA群正面から浸透して後方の光線級を潰すぞ！」

『……了解』^{ダー}

一つの山場を越えたからか、少し元気を取り戻したA-01の小隊長たちがザンギエフに答えた。

その返事に満足し、頷くザンギエフ。

光線級要撃は人類が戦線を維持する上で必要不可欠だ。何せ光線

級がいると砲撃が出来ない、戦闘ヘリも飛ばせなければ戦術機の機動だって制限を受ける。だが驚異的な遠距離攻撃能力を持ち、尚且つ無数のBETA群の最後部で要塞級に守られている光線級を撃破するのは容易いことではない。目標はたった2m程度で防御力も無い小型BETAだが、戦術機部隊は敵を掻き分けこれらを射程に収めるまでに甚大な被害を負うのが常であった。

だがこの部隊は普通の戦術機部隊ではない。

現在、ザンギエフの手元にある戦力は、直属の3機とヤスタラヴ中隊12機、ゼムリヤ中隊11機をいれて合計27機。いまだ前線の衛士の8割以上が第一世代のF-4ファントムかMiG-21バラライカを使っている現状を考えればザンギエフのミドヴィエチ以外全ての機体が第二世代の戦術機で構成されたこの部隊はかなり恵まれている。

「大佐、BETA群と接敵開始しました」

「よし、各隊は突入を開始しろ！ ウラアーーーーー！」

「『『『『ウラー！』』』』」

激に答えて2つの中隊が旅団規模のBETAに対して呐喊する。

ヤスタラヴ中隊はさすがにエリート部隊を名乗るだけあってフォーメーションの展開は見事だ。

ザンギエフは部下の三人を引き連れて、ゼムリヤ中隊を援護できるように彼らの右後ろにつける。完全充足のヤスタラヴ中隊と違って中隊長という戦術の核、あるいは精神的支柱が戦死した彼らの動きが若干ぎこちないからだ。

最速の脚力を持ち、怒涛のごとく迫る突撃級の群れ。

ゼムリヤ中隊はその進路を避けて、突撃級の脇をすり抜けると反転して突撃砲のトリガーを引き絞ると柔らかな背面を晒した突撃級たちに着弾したケースレス弾がパパパツと幾百もの小さな血潮の華を咲かせる。

『やった！　ざまあみろ、化け物め！』

『中尉の仇だ！』

機体を振り向かせ、土煙と血煙をあげながら倒れこむ突撃級を確認してガッツポーズを取る中隊員達。だが間髪いれずに現れた新たな突撃級の集団が足を止めていた中隊員達を戦闘単位未満になるまでバラバラに引き離していった。

「馬鹿者！　呐喊中は陣形維持と進路の確保だけに集中しろ！　BETAの密集地で仲間とはぐれたら死ぬだけだぞ！　ゼムリヤ05！　今は貴様が中隊長だ。しっかりしろ！」

『は、はい大佐！』

ザンギエフは中隊を守るべく匍匐飛行中《NOE》の機体の推力を上げて、中隊を分断していた要撃級を次々と屠っていく。そしてある程度進路が確保された時点で前方にいた要撃級とその周囲の戦車級を最小限の射撃で排除して敵の密集地の中に空間を作った。

BETAの群れの中にできたポケットに素早く飛び込むゼムリヤ中隊。彼らは大慌てで隊列を整え、BETAが再び押し寄せる前に飛び立った。

「レッドサイクロンよりCP、状況を報告しろ」

『CPよりレッドサイクロン、まもなく当該地域を担当する戦車連隊と砲兵師団のAL弾換装が完了します』

「よし、カウントダウンを開始しろ。我々は重金屬雲の展開と同時にBETA群後衛へと突入する」

『了解、A-01全機に通達。ポイントG-17への砲撃開始までのカウントダウンを開始します。240、239、238……』

光線級がAL弾を迎撃することによって生まれる重金屬雲は濃度さえ十分なら一時的にレーザーを無効化することができる。少数で敵集団を突破して光線級を倒す衛士にとっては命綱とも言える戦術だが、重金屬雲には気化した重金屬によるデータリンクの途絶や視界の悪化の他に、気温の低いロシアでは気化した重金屬が冷えやすく効果時間が短いという欠点が存在する。そのため支援砲撃で重金屬雲を発生させる際には戦術機部隊は厳密なタイムスケジュールに基づいて作戦を遂行する必要があるのだ。

「コマンドポストオフィサー」

今回、CP将校が提示した時間は4分弱。全中隊はそれまでに要撃級や戦車級の混在する最も危険な中央部を抜けなくてはならないがザンギエフが指揮するA-01は今回が初陣。

長く後方で訓練を受け続けてきた分、突撃級の処理などの単純な作戦行動は可能だが密集地での乱戦となると脆さが露呈し始めた。

『跳躍ユニットが——っ！ 嫌よ！ こんなところに置いていかないで——！』

『誰か助けてくれ！ 俺の機体のそこら中を、BETA共が！』

ザンギエフの援護を受けて一時はペースを取り戻した中隊もBETAとの乱戦に巻き込まれた新米の衛士達から徐々に崩れて、悲鳴

と一緒に損害の報告が上がり始める。本来なら大隊長のザンギエフではなく、それぞれの中隊長が受け持ち対処すべき情報だが初陣の彼らは自衛だけで精一杯でそれどころではない。

「落ち着け、ヤスタラヴ09！ 破損した跳躍ユニットは破棄、エレメントは突入まで09の片肺飛行を援護しろ。ゼムリヤ03、戦車級はオレが排除してやる。トリガーをロックしてそのまま動くな」

ミドヴィエチがチェンソー型のCIWSを取り出しアリゲートルの装甲によじ登り歯を立てる赤いアリのようなBETAを次々と切り落としていく。ミドヴィエチが腕を振るうたびに両者の装甲に赤い物が飛び散り、アリゲートルの装甲に骨肉がへばりつく様子はまるで趣味の悪いホラー映画かなにかのようだ。

戦場の例に漏れずに動きを止めた2機にもBETAが這い寄って来たが、幸いにも数が少なかったのであまり作業を邪魔されずに済んだ。

「大佐、ありがとうございます！」

「礼は後だ！」

『55、54、53……』

CPのカウントダウンを聞き、ザンギエフはミドヴィエチのレーダーで両中隊の位置を確認するがどちらも期待したほど進んではいない。

支援砲撃の開始まで既に一分を切っている。一応、発射から重金属雲の発生までタイムラグがあるが、このままでは展開と同時に突入するのは難しいとザンギエフは判断した。

（できればもう少しいつらに経験を積ませてやりたかったが……）

何しろ彼らは普通の部隊ではない。国連軍の最重要計画、オルタネイティヴ3直属の特殊部隊であり数年後にはハイヴ突入を命じられる決死隊でもあるのだ。対BETA戦闘の経験は多いほうがいいに決まっている。

だが順調、とはとても言いがたい今のシベリア戦線の状況を考えれば光線級排除の失敗はとても容認できることではなかった。

「ここからはオレが先行する！ ヤスタラヴ中隊は右後方に、ゼムリヤ中隊は左後方からそれぞれ槌壺型陣形ハンマーヘッドワンで続け！」

新米衛士達に経験を積ませる為にそれまで後方で睨みを利かせていただけだったミドヴィエチが一気に先頭に踊り出る。

フルオート全力連射を許された二丁の突撃砲が激しく銃火を迸らせそれまでとは比べ物にならない速度で進路を塞ぐBETAを薙ぎ倒していく。両手に2丁そして背部兵装担架に2丁、計4丁の突撃砲を装備したミドヴィエチが発揮した火力は劇的だった。

――
一転

まさに一転。ザンギエフが前に出た途端、それまで苦戦していたのが嘘のように中隊は前進を再開した。

先頭に立つのはたった一機、たった4丁の突撃砲にも関わらずザンギエフの前進は突撃前衛2個小隊でも成しえなかった突破力を発揮する。

BETAの死骸を踏みつけたミドヴィエチが吹いたマズルフラッシュが一息に7体の要撃級に赤い花を咲かせていく。最小限の銃弾で、しかし致命的な部位を撃ち抜かれた要撃級を後続の中隊がトドメを指す。彼が120mmキャニスター弾を用いれば台地を埋め尽

くしていた戦車級は瞬く間に血肉の絨毯と化し、その腕を振るうたびに要撃級の歯を食いしばった頭部のような感覚器がまるで”黒髪危機一髪”のように宙に飛ぶ。

その姿はまさにユダヤ人を導くために紅海を割った英雄^{モーセ}のようにあるいは彼らの祖先で恐れ知らずの騎兵として世界中を席卷したコサック騎兵のように。

——高速機動戦闘

人類が戦術機戦闘において開発した戦闘概念であり、第二世代戦術機の設計方針に大きな影響を与えた戦闘方法である。

そもそもBETAを倒すことは戦術機に乗っていればそれほど難しいことではない。突撃砲の弾がある状態でロックオンさえできれば、極端な話衛士は引き金を引くだけでBETAを倒すことが出来る。勿論それでBETAに勝てるかといえそうではない。BETAの中には36ミリの弾丸を弾くものが何種類もいるし、そうでない種ですらロックオン機能が間に合わないほどの物量で押し寄せるのが常だ。

ならば戦術機はどうすればより安全に、より効率的にBETAを倒せるのか？ 数多の犠牲と経験の結果、人類が導き出した結論は小型級が取り付けないほどの高速での射撃や運動エネルギーを利用した格闘戦——つまり素早く動いて素早く倒すということ。たったそれだけのことだが、それを戦術機の設計に概念として組み込み衛士に行わせるには重大なジレンマがあった。

一つはそもそも高速機動戦闘という物に関して具体的なデータが無い事。そして具体的なデータを得るための概念実証機に十分な性能が無い事。つまり第二世代の機体を作るためにはデータが必要だが、そのデータを得るためには概念実証に用いる戦術機にも第二世代並みの性能が必要だったということだ。

特に開発の遅れが深刻なのは電装周りだった。高速機動戦闘を行

うためには飛行中に格闘攻撃をしても墜落しない繊細な姿勢制御機能やより早くより正確なロックオンシステムが必要とされる。

先進電子技術を持つ米国ならともかく、1978年当時のソ連でこれだけ複雑な処理を行えるCPUの開発には数年はかかる。CPUの開発を待ち、そこから改めて本体の設計を始めるとしたらソ連の戦術機開発は再び米国に大きく遅れを取ることになる。(CPUは数を増やすことで並列処理に強くなるが最大処理速度は変わらない)

懊悩おつのうし迷走し始めるソ連の戦術機開発機関。だが程なくしてある衛士から提出された戦術機の操作ログによって開発局を悩ませていた問題は一気に解決した。

そのログはある衛士による実戦の記録——紛れもない第一世代戦術機によって行われた高速機動戦闘だった。信じがたいことにその衛士は戦術機に足りない機能をマニュアルで——つまり毎コマ秒ごとに変わる姿勢制御や射撃照準、果ては主機出力の調整までを手入力で——神懸かった早さと精密さで入力してMiG-21にその機動を実現させたのだ。

ソ連の、いや世界中のどんなテストパイロットも成し得なかった偉業を果たしたその衛士は後にある特別な称号とミコヤム・グルビツチ、スフォー二両局から共同設計された専用機を受け取ることになる。

『大佐、敵後衛まであと1500！　あとはあの集団さえ倒せば終わりです！』

「オレが排除する！　ゼムリヤ、ヤスタラヴ中隊は速度と隊列を維持しろ！」

『ヒヨツコ共、聞いた通りだ！　いいか、どんな時でもまっすぐ大

『信じられない！　信じられない！』

BETAの反応を示す赤いクリップマークがまるでミドヴィエチに吸い寄せられるように近づきそして消えていく。BETAの残数を示すカウントは狂ったようにその数字を低下させる。

目の前で起こった常識を遥かに超える景色を目の当たりにしてA-01の面々は思い知った。

レッドサイクロンとはただの称号ではなく、このレーダーの敵標^{レッドサイクロン}の模様を指した言葉であると同時に、BETAの血肉^{レッドサイクロン}を撒き散らす嵐の事であり、そして戦場の真っ只中にソビエト連邦の領地を築き上げる戦神を指す言葉だということ。

そして世界で最も強い権力を持ち、あらゆる人から恐れられるソビエト連邦政府が彼にこの称号を与えた理由は打算でも政治的駆け引きの結果でもなくこの英雄に対する純粋な敬意からだということ。

『――3、2、1、支援砲撃、開始！』

爆音が響き、合計数トンに及ぶ金属の塊が後方の戦車連隊やMLRS、砲兵師団から撃ち出される。

それを迎撃すべくBETA群から何条ものレーザー光が放たれ、空中で気化した鉛やジェラルミンの濃灰色の煙が徐々に戦域を覆い始めた。

『CPよりレッドサイクロン、光線級の配置、マーキングを開始………完了しました。全機にデータを送信します。AL弾の最終弾着まであと45！』

データリンクの更新に伴ってそれまで戦術機のモニターに表示されていた赤い光点の内、光線級がいると思われる場所が黄色く表示

される。

ザンギエフが120mmキャニスター弾を使ってBETA後衛との間を塞ぐ敵集団を排除し終わるとほぼ同時に最後のAL弾が重金属雲によって守られたままBETAに突き刺さった。

「重金属雲濃度よしっ！ 小隊散開せよ！ 光線級を狩りつくせ！」

『『『ウラー！』『』『』』』

ザンギエフの命を受けた6つの戦術機小隊が解き放たれた猟犬となって黄色い光点に迫っていく。訓練された猟犬の群れが青い友軍マーカーとなって四方八方に散開していくと、針に触れるシャボン玉のように黄色いマーカーが近づくたびに消えていく。

後は時間との勝負——と思った矢先、またしてもA-01の衛士達を戸惑わせる出来事が起こった。BETAの後衛集団にも幾らか要撃級や戦車級は存在するが、新米衛士達に対して新たな脅威となつたのは60mの巨体を持つBETA——要塞級だ。^{フォート}

「イワン！——！」

『お任せください、大佐！』

中隊に続いてBETAの後衛集団に飛び込んだトルストイ中尉のアリゲートル。

トルストイは苦戦していたゼムリヤA小隊の方へ向かい、彼らの前に立ちはだかる要塞級に肉薄する。

『ヒヨッコ共！ 良く見てろよ！ 要塞級ってのはこうやって料理するんだ！』

要塞級の尾節が放つ強酸を撒き散らす衝角がトルストイを襲う。だが彼は素晴らしい動体視力で持つて衝角を36ミリで撃ち落し懷に飛び込むと、突撃砲で10本ある足の付け根と尾節を撃ち貫き無力化。そしてトドメをさすのかと思いきや、まだ生きている要塞級の頭部に飛び乗ってそこから周囲の光線級へ狙撃を始めた。

そのあまりに豪胆な戦い方に声を失い操縦を忘れるA小隊の衛士達。

「ケン！」

『……了解』

続けて突入したのはモリ大尉のアリゲートル。

同じく苦戦していたヤスタラヴC小隊の元へと向かった彼の機体に握られているのは恐らくこの国唯一の装備であろう日本製の74式近接戦闘長刀。カタナ

モリ大尉はアリゲートルを前傾させ、恐ろしいほど低い姿勢で長刀を背負うように構えている。おそらくは彼自身が身につけている剣術の構えなのだろう。

水が流れるような滑らかな軌道でスイスイとBETAを躲しながら長刀を奮い、小隊を囲んでいた戦車級二体と新手の要塞級を両断する。そしてやはり光線級を守るように聳え立つ要塞級の巨体に接近すると噴射跳躍で要塞級の頭部より高く飛び上がり長刀を大上段に構えた。

『……秘剣——兜割り——』
かぶとわ

C小隊に所属する衛士達にはモリ大尉が長刀を振り下ろす様は見えなかった。後にはただいつの間にか着地していた彼のアリゲート

ルと頭部から尾節までを一刀両断にされた要塞級だけが残されている。

そして――

『こいつ36mmが効かないぞ！』

『じゅ、重光線級だ！ 誰か120mmは残ってないのか！！』

驚愕する小隊員達。眼前に聳え立つのは戦術機そびの全長を超えるほど巨大な目玉の怪物……。そこには彼らの目標にしてBETAの中でも最も数が少ないはずの重光線級が4体も固まってそこに存在している。

『下がって、HESH弾を使うわ！』

『駄目だ！ 一発だけじゃ爆風で重金属雲が散ってしまう……！！
4体同時に仕留めなきゃ全滅だぞ！』

『ヒッ、初期照射警告が――！！』

重光線級の初期照射警告――死の宣告にも等しい警告を受けたと聞いてさしものA-01衛士達に戦慄が走る。不幸なことに今小隊がいるのはザイギエフ大佐は勿論、モリ大尉とトルストイ中尉からも遠い位置だ。

小隊壊滅――中隊の誰もが彼らの生還を諦めたその時、

『アイアイサー、キャプテン！』

ソビエト連邦の戦線のと真ん中、それもBETAの群れの中で舌

つ足らずで白々しい英語が響いた。^{てきせいげん}

同時に戦場を一陣の風の如く駆け抜けた一機の戦術機が放った1発の砲弾が、巨大な爆発とともに密集していた4体もの重光線級を一撃で葬り去る。

『ヒーハーツ！ 俺を見つめると火傷するぜ！』

「……………」

通信ウィンドウに映ったのは親指を上突き出しながらウィンクする子供の衛士（本人は中隊の女性衛士全員に向けてアピールしたつもりらしい）。子供——いくらこの国の陸軍では兵士の若年齢化が著しいがそれでもこれは幼すぎる。そもそもこの子供はアイアイサーと言ったが、ザンギエフはトルストイ中尉とモリ大尉以外には命令を発していない。

ザンギエフだけではない。トルストイ中尉やモリ大尉だけでなく、戦闘中の両中隊の面々ですら顔をしかめ、思わず通信ログでこの子供の通信が何かの間違いで戦場に紛れ込んだ混線でないかを確認したぐらいだ。

だが異常はそれだけではない。その年齢と同じくらい声の主が乗り込んでいる戦術機もまたおかしかった。

まず本来第二世代の戦術機としてスマートかつ、最小限であるはずの装甲が戦術機のフォルムを崩すほど恐ろしく分厚くされていること。関節の可動を妨げないよう配慮されているとはいえ、ここまでの重装甲は接近戦を想定し作られた第一世代MiG-21バライカやその改造機であるザンギエフのミドヴィエチを持つてしてもありえない。

そしてその機体本隊の重量とバランスをとるように腰から伸びる

双発の跳躍ユニットもまた巨大だった。通常の可動アタツチメントに加え追加の支持担架を用いなければ支えられないほどの重量を持ったそれは、今もなおアリゲートルの跳躍ユニットとは比較にならないほどの轟炎を吐き出しこの戦術機を信じられないほどの高速で飛ばしている。

そして戦術機に乗る衛士は誰もが固定兵装のナイフに加えて突撃砲かハイパーカーボン製のCIWS、多目的追加装甲に予備弾薬の中からシビアな兵装積載能力と相談しながら装備を選択するのだが、この戦術機が装備しているのは国際規格を遥かに超えた大口径のバズーカに2対のミサイルポッド、加えて戦術機ではなく自走整備支援担架^{トカ}に積むような超大型の予備弾薬のコンテナまで背負っているときた。

空を飛ぶことが不思議なほどの重武装、この戦術機の威容は戦闘機ではなくまるで戦艦か戦車を無理矢理に二足歩行に仕立て上げたようだ。

『……MiG-25』

—— MiG-25 スピートフォズ

それはソ連がハイヴ攻略のために高速突撃と制圧戦術を付与する目的で米国のF-15を独自に再設計した戦術機。運動性と機動力による生存性の獲得を目指した他の第二世代戦術機と違い、大型の機体に大出力の跳躍ユニットを備え過剰なまでの兵装搭載量と高速直進性近接戦闘能力を与え^{ファイヤーフォート}”核弾頭弾による戦域制圧”すら考慮した常識破りの砲火の要塞。

そんな戦術機界の問題児を押し付けられたのは同じく常識破りの問題児。——即ち、ユーリー・アドニー・ビャーチェノワその人であつた。

10、「大佐を信じて突き進め！」（後書き）

今回ユーリーが搭乗したスピオトフォズという戦術機ですが、ここを探しても設計に至る設定だけでデザインがなかったので真に勝手ながら重装甲重武装の戦術機ということにさせてもらいました。

何故なら30m前後の大型BETAに対して曲射砲を用いない装備を使った場合戦術機の最大射程は30km程度。特にハイヴ侵攻と核弾頭装備を前提とした戦術機ということでもっと近接で核爆発が起こる可能性を考慮して前面の装甲厚は可能な限り確保する必要があるのと、航空母艦から発進して沿岸部の敵に対して瞬間火力を発揮する後継機のブラーミヤリサと違い、ソ連がシベリアを保持して戦域が内陸に限定されている時期に開発された戦術機ならこういう仕様だろうと思って設定させていただきました。

他にもいろいろ嘘設定作ってますが……。

ああ、はやくガンダムを出したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6426s/>

Muv-Luv Red/Moon/Alternative

2011年11月16日11時26分発行